第3章

開 発 報 告

3.1　開発概要

本事業は、コロナ禍で停滞した留学生受入れの回復が期待される**専修学校におけるアジアIT留学生受入れの新たな戦略モデル**を構築するものである。

本事業は前年度（令和６年度)、専ら〈(入学前の）広報募集〉の活動に注力したが、取組２年目である本年度（令和７年度）事業では実施フェーズを一つ推し進め、主に**〈(在学中の）教育指導〉**の活動に取り組んだ。

そこで展開される**教育指導**は、学校が策定したカリキュラムに基づく通常授業を阻碍しないよう、基本的にインターネット上で実現されてフレキシブルな学習スタイルを可能にする**オンライン教育**の形をとる。これにより、留学生が来日後の学習にスムーズに入れるような**補完教育**の実施を企図した。

その際、この教育指導では、**〈補完学習〉〈実践演習〉〈管理・評価〉**という３つのプロセスを想定する。

補完学習

留学生は、各種コンテンツ（映像講義、確認テスト、調べ学習、共同学習・討議）により、日本語や授業内容等に関する補完学習が可能である。その内容は、**IT分野の留学生を対象にする**ため、その学習ステージに応じて次のような科目を設定する。

科　目	対　象	内　容
IT留学生キャリア教育	入学前or入学直後の留学生	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
日本事情	入学前or入学直後の留学生 N3未満の日本留学希望者	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
就職適性検査対策： 言語領域	日本語学校修了 orN2以上の入学１年目の留学生	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
就職適性検査対策： 非言語領域	日本語学校修了 orN2以上の入学１年目の留学生	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。

実践演習

実践的教育として、企業等と連携した対面でのPBL（課題解決型学習）や職場体験、実務家講演会等の実施も企画する。

管理・評価

教員と学校は、留学生の学習進捗状況や学修成果を管理機能で確認できる。必要に応じてメッセージ送信も可能である。また、その受講実績や学修成果を評価・認定し、卒業や就職の際のポイントに反映するような制度（評価基準等）の設定についても検討する。

以上の方針に基づき、本事業では本年度（令和７年度）、開発案件として次の５件に取り組んだ。その各件の内容は次節以降で詳説する。

※ 開発番号は前年度からの通し番号

開発06　日本IT留学広報媒体拡張

IT専修学校への留学を促すPR媒体「日本IT留学ウェブサイト」「日本IT留学パンフレット」（前年度制作）の〈日中語版〉の追加

開発07　オンライン教育システム開発

IT専修学校留学生向け教育プログラムを展開する教育基盤の仕様（前年度策定）の一部を抽出して構成したプロトタイプの開発

開発08　IT留学生教育プログラム開発

IT専修学校留学生向け教育プログラム（40講）のカリキュラム（教育体系）・シラバス（授業計画）の開発

開発09　IT留学生教育コンテンツ制作

IT留学生教育プログラムの科目Ａ～Ｄ（40講）の講義映像・演習課題・自習問題の作成

開発10　IT留学生学修評価基準策定

IT留学生教育プログラムの受講実績や学修成果を評価・認定するための基準体系の開発

3.2　日本IT留学広報媒体拡張

本事業では前年度（令和６年度)、専ら〈(入学前の）広報募集〉の活動に取り組んだ。

その活動の一環として、IT専修学校への留学を促す広報／PR媒体である**「日本IT留学ウェブサイト」**とその要約版小冊子**「日本IT留学パンフレット」**を制作した（各媒体の詳細は 本事業 令和６年度『事業報告書』参照)。

その際、前年度に制作したのは、ウェブサイトが日本語版・英語版・韓国語版・ベトナム語版、パンフレットが日英語対訳版・日韓語対訳版・日越語対訳版である。

本事業で設定したターゲット国は中国・韓国・ベトナムであるから、そこで着手できなかった**ウェブサイト中国語版**と**パンフレット日中語対訳版**を本年度事業で制作した。

3.2.1　日本IT留学ウェブサイト

本ウェブサイトの基本仕様は次の通りである。

【サイト名】**日本IT専門人材留学ウェブサイト（ITSJ：IT Study in Japan)**

【Ｕ　Ｒ　Ｌ】**https://denshi-mext.jp/itsj/**

【対応言語】**日本語・英語・中国語（簡体)・韓国語・ベトナム語**





日本IT留学ウェブサイト 中国語（簡体）版

3.2.2　日本IT留学パンフレット

本パンフレットの基本仕様は次の通りである。

【冊 子 名】**日本IT専門人材留学パンフレット『アジアIT専門人材の日本への留学』**

【判型・頁数】**A4判タテ・16頁**

【各国語版】**日英語版・日中語対訳版・日韓語対訳版・日越語対訳版**



日本IT留学パンフレット　日中語対訳版（一部）

※ 本パンフレットの全頁紙面は本書「附録」に収載。

3.3　オンライン教育システム開発

本事業で本年度（令和７年度）に展開する**教育指導**の活動は、学校が策定したカリキュラムに基づく通常授業を阻碍しないよう、基本的にインターネット上で実現されてフレキシブルな学習スタイルを可能にする**オンライン教育**の形をとる。これにより、留学生が来日後の学習にスムーズに入れるような**補完教育（IT留学生教育プログラム）**の実施を企図する。

そのため、本事業では前年度（令和６年度）、そこで実施した調査③（オンライン教育システム事例調査）の結果を踏まえ、開発する**オンライン教育システム**の仕様案を策定した。その仕様案を以下に再掲する。

▼ オンライン教育システム仕様案

1 在籍管理	1.1 ログイン情報	‣ 受講者の最終ログイン日時 ‣ 指導者の最終ログイン日時
	1.2 コース設定	‣ １学校・団体について複数のコース・指導者の設定・登録が可能
2 学習管理	2.1 課題取組	‣ 回答状況（未着手状況・開封日時・着手日時・提出日時） ‣ 得点・正答率 ‣ 平均点（課題別・個人別）・各問正答率
	2.2 動画視聴	‣ 視聴状況（未視聴状況・開封日時・初回視聴日時・最終視聴日時・視聴完了日時） ‣ 再生時間（動画の長さに対し、学生がそれを最後まで視聴したかの確認が可能）
3 CBT出題	3.1 問題仕様	‣ 出題形式：　３肢択一式 ‣ 出題内容：　講義内容の理解度を測定する一問一答問題 ‣ 搭載問題数：　５問×40単元程度、計200問程度
	3.2 自主学習	‣ 搭載された全問題について目次から問題セットを選んで自主学習。反復練習が可能。
	3.3 課題配信	‣ 搭載された全問題からランダムまたはセミオーダーで課題を作成し、受講者（全体/個別）に配信。
	3.4 自動採点	‣ 自動採点による正答率の自動算出。基準点未達の場合、課題の再配信も可能。
	3.5 自動配信	‣ 日時を設定したタイマーセットにより、課題の自動配信・自動締切・自動採点が可能。長期休業中も課題配信が可能。
	3.6 出力印刷	‣ 作成・配信した課題は印刷出力し、中間試験・期末試験・進級試験等で配付可能。マークシート対応で採点も簡易。
4 授業配信	4.1 オンライン型授業	‣ Zoom・Teams等のWEB会議システムに対応し、事前セットでオンライン型授業が可能。
	4.2 ハイブリッド型授業	‣ Zoom・Teams等のWEB会議システムに対応し、オンライン型授業と併用して対面授業が可能。
	4.3 オンデマンド型授業	‣ 動画数：　IT留学生教育プログラム４科目30～40単元の計40点程度。 ‣ 指導者が動画を指定して受講者に提示する課題配信が可能。視聴ログの保存により、受講者の視聴状況の把握が可能。 ‣ 学校が独自に作成した動画をYouTube等にアップロードし、そのURLを管理画面から登録して学校オリジナル教材化が可能。

	4.4 ハイフレックス型授業	▸ ハイブリッド型授業（オンライン型授業＋対面授業）と併用してオンデマンド型授業（動画視聴・CBT解答）の実施が可能。
5 その他	5.1 コミュニケーション	▸ メッセージ機能により、受講者-指導者間の質疑応答が可能。LINEに似せたUIにより、気軽なコミュニケーションが可能。
	5.2 レスポンシブデザイン	▸ 端末毎のデザイン自動調整により、PC・ダブレット・スマートフォンのいづれでも無理のない取組が可能。

本事業では本年度、教育プログラムの実証を行う。そのため、そこで最小限に必要な機能を上表（仕様案）から選定し（網掛け部分：1.1、1.2、2.1、2.2、3.1、3.2、3.3、4.3、5.1、5.2）、その機能群を搭載した**オンライン教育システム**を**プロトタイプ**として開発した。

尚、開発に際し、本システムのベースには、汎用性と低コストの観点から、オープンソースのｅラーニングプラットフォームである moodle を利用した（Moodleは同種のシステムでは比較的多くのユーザー数を持つ）。

本システムの画面遷移の様子（一部）を以下に掲載する。



IT留学生教育プログラム オンライン教育システム 画面遷移図（一部）

3.4　IT留学生教育プログラム開発

本事業は、専修学校におけるIT留学生について、その入口（来日・入学）から出口（就職・定着）までの一貫した支援体制を（オンライン活用も含めて）構築・整備するものである。

その取組２年目である本年度（令和７年度）は、事業フェーズを一つ推し進め、**〈(在学中の）教育指導〉**が主な活動テーマである。

そこで展開される教育指導は、IT専修学校の通常カリキュラムで手薄になりがちの領域、すなわち**日本語能力の強化**、**職業マインドの醸成**、**日本事情・文化の理解**に焦点を当て、それを**オンライン教育**で補完するという位置付けである。

したがって、そこで開発する**教育プログラム**は、IT専門知識の追加・強化でなく、**IT専門教育と就職移行を成立させる前提条件の補完**がその中核的役割である。

3.4.1　開発経緯

この教育プログラム開発に先立ち、本年度事業では次の３調査を実施した。

調査④ IT専修学校留学生教育実態調査
調査⑤ IT留学予備生キャリア意識調査
調査⑥ IT留学生用日本語教材事例調査

そして、この３調査から次のような考察を得た。

調査④ IT専修学校留学生教育実態調査

この調査は、IT専修学校における留学生教育の実態を把握することを目的としたものであるが、もう少し踏み込んで言えば、特に（在学中の）“現場の困り事”を炙り出すことを企図したものである。具体的には――

- ○ 留学生の日本語能力はN3相当が最多層であり、座学定着も低い傾向が報告され、その阻碍要因には専門用語の漢字・語彙や日本語での発言・質問等の困難が上位に挙っている。
- ○ 実習における困難の要因は、仕様書・指示書の読解、デバッグの粘り強さの不足、報連相の不備等が上位で、ITに必要な基礎学力（論理・数学）の欠如も課題に挙っている。
- ○ 回答校が現在実施している補完教育には、日本語補習やITパスポート対策等に加え、ビジネスマナー・社会常識、キャリア形成支援、就職適性検査（言語領域）対策等が挙っている。
- ○ 回答校が今後実施したい補完教育には、就職適性検査（非言語領域）対策、日本事情（文化・社会）補習、企業連携PBL等が挙っている。

つまり、この調査の結果は、留学生の学修定着と就職移行を阻碍する主要因が、① 言語（読解・表現）、② 数理・論理、③ 職業意識・職場行動、④ 日本事情（文化・社会）の理解不足に収斂されることを示唆する。

調査⑤ IT留学予備生キャリア意識調査

この調査は、IT分野への進学・就職を希望するアジア（中国・韓国・ベトナム）学生のキャリア形成に関する意識や実態を把握することを目的としたものであるが、もう少し踏み込んで言えば、特に（来日前の）学生の“関心・不安”を浮び上がらせることを企図したものである。具体的には――

○ 強い関心がある学びには、日本語コミュニケーション、チームワーク・リーダーシップ、問題解決力・論理的思考等が上位に挙っている。

○ 日本留学・就職に関する不安・課題には、日本語能力、学習基礎（数学・プログラミング等）、就職活動の進め方（エントリーシート・面接・適性検査等）が上位に挙っている。

○ 重視する職業意識には、責任感・誠実・チームワークが上位に挙っている。

つまり、この調査の結果は、入口（来日・入学）段階でも課題が“IT以前”にあり、それが調査④で示唆された現場課題（言語、数理・論理、協働行動、キャリア意識・職業観）と同型であることを補強する。

調査⑥ IT留学生用日本語教材事例調査

この調査は、IT留学生に適した既存の日本語教材に関する情報を収集・整理することを目的としたものであるが、それによって逆に、当該教材市場における“設計思想”と空白が立ち現れることを企図したものである。具体的には――

○ IT分野の日本語教材は、仕様書・要件定義書の読解、会議での確認、進捗報告等、ITプロジェクトで必要な言語行為を中心にして構成されている。

○ 多くの日本語教材がN3以上を入口にし、総ルビ・図解・音声等で可読性を担保している。

つまり、この調査の結果は、留学生や外国人材に対する言語支援が、一般日本語だけでなく、就業やIT業務の文脈にも接続した日本語の読解・コミュニケーションのスキル強化として設計されるべきことを示唆する。

以上の３調査の結果から得た検討材料を総合して再整理すると、次の**A**～**D**のような認識に辿り着く。

【A】◇ 実習における困難の主因は、デバッグの粘り強さの不足や報連相の不備等の行動様式にある。
◇ 専修学校での補完教育に、ビジネスマナー・社会常識、キャリア形成支援等が位置づいている。
◇ 留学予備生の関心も、チームワークや職業意識（責任感等）に表れている。

➡ したがって、IT留学生に対する補完教育には、単なる就職活動の技法でなく、**日本のIT現場で働くための規範・協働・自己管理の前提**を教育内容として扱う科目が必要である。

【B】◇ 専修学校が今後実施したい補完教育に、日本事情（文化・社会）補習が挙っている。
◇ 留学予備生の不安の対象に、文化・コミュニケーション、住居・生活開始が含まれている。
◇ 本事業計画にも、教育指導活動で日本事情（文化・社会）理解を促進することが明示されている。

➡ したがって、IT留学生に対する補完教育には、（生活支援と共起して）**学修・就職の前提になる日本事情（文化・社会）リテラシー**を教育内容として扱う科目が必要である。

【C】◇ 座学定着の阻碍要因には、専門用語の理解や日本語での表現の困難が上位に挙っている。

◇ 実習における最上位の困難が、仕様書・指示書の読解である。

◇ 専修学校が現在実施している補完教育に、就職適性検査（言語領域）対策が挙っている。

◇ 留学予備生の不安の対象に就職適性検査が含まれ、関心の対象では日本語コミュニケーションが突出している。

◇ 日本語教材市場でも、IT業務の文脈での言語行為（仕様書読解等）を重点化する構造が確認される。

➡ したがって、IT留学生に対する補完教育には、単なる就職試験対策でなく、**授業理解と就職移行を共に成立させる言語基盤の強化**を教育内容として扱う科目が必要である。

【D】◇ 座学定着の阻碍要因に、IT基礎学力（論理・数学等）の不足が少からず挙っている。

◇ 留学予備生の不安の対象に学習基礎（数学・プログラミング等）、関心の対象に問題解決力・論理的思考が上位に挙っている。

◇ 専修学校が今後実施したい補完教育に、就職適性検査（非言語領域）が挙っている。

➡ したがって、IT留学生に対する補完教育には、**授業理解と就職移行を共に成立させ、IT学修の継続と就職試験対策の両方に必要な数理・論理の底上げ**を教育内容として扱う科目が必要である。

以上の４認識（**A**～**D**）をそのまま、本年度事業の教育指導活動で展開する**補完教育の教育内容**に反映すると、次の４領域が設定される。

【A】職業意識・協働行動（企業文化・職場規範・協働の型・自己管理）

実務で求められる報連相・納期意識・品質観・チーム行動等、日本の職場でのマインドや行動様式を扱う。

【B】日本社会・文化・生活（日本の生活基盤と社会文化リテラシー）

日本で学び働く前提になる社会制度・生活様式・文化様相・情報空間等の理解を扱う。

【C】言語処理（授業理解・就職試験対策・仕様書等読解に資する言語能力）

語彙・論理・読解・実務文書理解等、学修と就職の両方に必要な言語処理を扱う。

【D】数理・論理（数的処理・推論・情報処理の基礎）

基礎学力と就職試験・業務遂行の両方に関連する数理・論理の基盤を扱う。

そして、この４領域を、本事業で開発する**教育プログラムの教育体系（カリキュラム）**として具現化する（次項で詳説する）。

3.4.2　カリキュラム

前項（**3.4.1**）で見た補完教育の４領域を教育プログラムとして実装する際、次のような設計判断が必要になる。

領域の科目化

領域A～Dは相互に依存するが、授業運用上、教育目標と評価軸を明確にするべく、各領域を**【科目】**として分離する方が合理的である。

○ **領域A・B**は「価値観・行動様式・社会文化」の学習で、〈講義＋演習〉で内省と相互理解が必要になる。
○ **領域C・D**は「処理能力」の学習であり、〈講義＋演習〉で反復と手順化が必要になる。

このように、各領域は学習形態の要求が異なるため、Ａ～Ｄを【科目】として切り分けることで、授業と評価の設計が適合する。

対象者の設定と適合

開発する教育プログラムの**対象者（受講者）**は、次のような**IT専修学校留学生**を想定する。

- 来日２～３年程度
- 日本語能力（JLPT）N2～N3程度
- 就職（活動）準備段階

このような対象者に適合する教育内容は、１回の〈講義〉で知識を詰め込み過ぎない“スモールステップ”型の構成を採る。

そのため、本教育プログラムの構成は――

▶ 全体を**４科目**（科目Ａ～Ｄ）で構成する。
▶ １科目を**10講**で構成する。10講（１科目）の展開を〈概論→基礎教育→場面適用→統合〉で進める。
▶ １講を**〈講義４題＋演習（＋自習)〉**に統一する。

こうすることで、受講者の理解負荷を制御する。

〈１科目=10講〉の設定

〈１科目=10講〉という統一的設定は、任意でなく、次のような要請から導出される。

○ 標準化と移植性：　他校展開等（横展開）を想定した場合、科目間で学習量が大きく異なる設計は運用の阻碍要因になる。
○ ｅラーニング化：　【講】を最小単位にして〈講義＋演習＋自習（理解度確認)〉をパッケージ化し易い。
○ 学習負荷の管理：　N3～N2層には、１講の論点数を抑え、10講で段階的に積み上げるのが適切である。
○ 学修評価基準対応：　学修評価基準のスキル項目を講単位の到達目標に割り当てる際、均質な講数の方がマッピングが明確になる。

したがって、10講×４科目の全40講は、教育内容の“豊富さ”でなく、標準化された最小構成（ミニマム バイアブル カリキュラム）として位置付けられる。

〈１講＝講義４題＋演習（＋自習)〉の設定

〈１講＝講義４題＋演習（＋自習)〉という統一的設定は、教材作成・授業実施・評価運用を同時に成立させる

仕様である。すなわち――

〈講義〉　１講４題の設定は、１講の焦点を分散させ過ぎず、N3～N2層が処理できる情報量に制御する。

〈演習〉　理解を行動・産出に接続し、授業内で誤解を顕在化させる。

〈自習〉　１講５問の設定は、１講の要点を詰め込み過ぎず、N3～N2層の講義内容の理解度を確認する。

この設定は、科目Ａ・Ｂのような態度・行動領域にも、科目Ｃ・Ｄのような処理能力領域にも共通化でき、教材の統一フォーマットとしても機能し得る。

以上を踏まえ、本事業で開発する**教育プログラムの概要**を次のように整理する。

▼ 教育プログラム概要

名　　称	**IT留学生教育プログラム**
概　　要	IT専修学校留学生が日本のIT企業に円滑に就職・定着できるよう、学修評価基準に基づいて職業意識・日本事情・言語処理・数理を４科目40講で補完し、スモールステップ設計のオンデマンド視聴とライブ演習＆CBTで学修成果を可視化するIT留学生向け教育プログラム。
教育目標	○ 日本のIT職種・職場規範を理解し、報連相・協働・品質意識・自己管理等の基本行動を想定場面に即して実践できる力を養う。 ○ 日本の社会・制度・生活・文化・情報空間等を理解し、その知識を日本で学び働き暮すための実用知にして生活・就職の前提を整える。 ○ 授業理解と就職適性検査に必要な言語処理・数理の基礎を把握し、仕様・手順等の読解と課題解決を踏まえて学習を継続できる力を養う。
ポリシー	○ 学修評価基準を教育目標に直結し、各講の到達目標・講義内容・演習課題・自習問題観点等を学修評価基準に対応させる。 ○ 日本語能力N2～N3程度を前提にし、図解・例示を用いて指示を短く区切るスモールステップと頻繁な理解確認で学修のバリアフリー化を図る。 ○ 講義の理解度はCBTで定量化し、演習はルーブリックで可視化することで、学修ログに基づく振り返りと改善が図られる運用として設計する。
対 象 者	○ IT専修学校に在籍する留学生（来日２～３年程度、JLPT N2～N3程度、就職（活動）準備段階） ○ IT専修学校で専門科目を受講しているが、言語処理・数理・職場行動等の “IT以前” に課題が残る学生 ○ オンライン教材と対面授業の併用により、自律学習（復習・弱点補強）の習慣化を図りたい学生
教育形態	講義：　オンライン教育システム上でのオンデマンド視聴 演習：　オンライン会議システムを利用したライブ配信（指導者主導、グループワーク） 自習：　オンライン教育システム上のCBTによる択一式問題（１講５問）への取組

教育内容	【科目Ａ】IT留学生キャリア教育 日本のIT職を前提にし、職業意識・職場規範・協働行動・自己管理・リスク認識・キャリア設計等の理解を補完する。 【科目Ｂ】日本事情 日本で学び働き暮す前提になる日本の社会・文化・生活・情報空間等を概論的に理解し、行動上の躓きを予防する。 【科目Ｃ】就職適性検査対策：言語領域 語彙・文法・読解・要旨把握・実務文書解釈・技術日本語の基礎を補完し、授業理解と就職試験対策を支援する。 【科目Ｄ】就職適性検査対策：非言語領域 割合・表読解・確率・方程式・図形・論理・アルゴリズム・統計等の基礎を補完し、数理処理力と論理思考力を底上げする。 ※ １科目10講 全40講構成、各科目・各講の内容詳細は別掲シラバス参照。
修了判定	○［理解］CBT採点：　各講の理解度確認テストで正答率80%以上 ○［実践］演習評価：　各講の演習成果物をルーブリックで評価し、達成率70%以上 ○［到達］学修評価基準：　領域Ａ～Ｄの全スキル項目でLv.2以上
学修成果	○ 日本のIT現場で頻出する指示読解・報連相・納期意識・デバッグの粘り強さ等の行動課題を〈講義４題＋演習（＋自習）〉で最低限の水準まで底上げできる。 ○ 専門授業の理解を阻碍する“言語負荷”を低減し、学修継続（定着度）を改善できる。 ○ 就職適性検査と就業前提知の不足を補完し、就職移行と職場定着のリスク（ミスマッチ・早期離職等）を低減する。

その上で、本教育プログラムの**各科目・各講の内容構成**を次頁以降に整理して示す（表内「テーマ」列の①～④は講義テーマ、◎は演習テーマを表す）。

▼ 教育プログラム科目・講・テーマ構成

科目	講	テーマ
A IT留学生キャリア教育	01　日本のIT人材として	① 日本のIT職種と役割（開発・保守・運用の違い） ② 顧客視点と価値提供 ③ プロフェッショナルとしての姿勢（責任・質保証） ④ 学び続ける意義 ◎ IT会社の１日を想定したケース討議＋共有（自分の役割を短く説明）
	02　職場の基本ルール	① 就業規則と勤怠（遅刻・欠勤の連絡） ② 報･連･相の型 ③ 守秘義務と情報管理 ④ コンプライアンス（法律・社内ルール） ◎ ミニケースを読んで報･連･相メッセージを作成→グループで推敲
	03　多様性と異文化協働	① 時間感覚・上下関係の違い ② 偏見への意識 ③ 相互リスペクトがある言い方 ④ 共通言語（やさしい日本語＋英語） ◎ 文化差の場面をロールプレイ→気付きを整理
	04　チームワークとロール	① 役割（リーダー／メンバー） ② 助け合いとレビュー ③ 小さな目標の分担 ④ 振り返りミーティング ◎ 簡単な作業計画をチームで設計（役割分担を明文化）
	05　コミュニケーション	① やさしい日本語のコツ ② メール・チャットの基本形式 ③ 会議での発言・メモ ④ フィードバックの受け方・伝え方 ◎ メール文の改善（件名・本文・依頼）とミニ発表
	06　リスク認識と“小さな品質”	① ミスの種類 ② チェックリストとセルフレビュー ③ エスカレーション ④ 安全・情報セキュリティの基本 ◎ 作業手順を読んでチェックポイントを列挙→グループで整理
	07　タスク・時間の管理	① ToDoと優先順位（重要／緊急） ② 見積りとバッファ ③ 割込み対応 ④ 締切とプロミス ◎ １週間の学習・作業スケジュールを作成→相互コメント
	08　継続的な学び	① 学びのPDCA ② 学習ログ（ノート・ツール） ③ 資格学習の入り口 ④ 学習コミュニティの使い方 ◎ 自分の学習ログ様式を試作→ペアで改善
	09　倫理とハラスメント防止	① 仕事の倫理（ごまかさない） ② 権利と義務の入口（労働時間・休憩） ③ ハラスメントの例と線引き ④ 相談先・記録の仕方 ◎ 事例を読んで不適切発言の言い換えを検討
	10　IT留学生のキャリア設計	① 強みの棚卸し（学習・言語・経験） ② キャリアパス例 ③ 短期･中期目標の作り方 ④ 日本・母国・国際の選択肢 ◎ 個人キャリアシートを作成 → グループで相互レビュー
B 日本事情	01　社会構造の概要	① 国・都道府県・市区町村 ② 人口・高齢化の現状 ③ 働き方の種類（正社員／契約･派遣社員） ④ 地域社会の仕組 ◎ 居住区の行政窓口・支援情報を調べてミニ発表
	02　生活文化の実際	① 住まいとゴミ出し ② 医療・保険・マイナンバー ③ 銀行・携帯・交通系IC ④ 災害への備え ◎ 来月の生活のToDoリストを作成→相互レビュー

	03　職場文化の諸相	① 納期・時間管理の重視 ② 報･連･相と会議 ③ 上下関係と敬語 ④ 休暇・残業の考え方 ◎ 職場の暗黙知を列挙・整理→グループで発表
	04　伝統文化の概観	① 神道・仏教の入口 ② 年中行事（正月・お盆等） ③ 礼儀（挨拶・所作等） ④ 地域の祭り ◎ 出身国の行事と日本の行事の共通点を比較・発表
	05　伝統文化とデジタル技術	① 文化財のデジタル保存（写真・動画・3D） ② 観光 × AR/VR ③ 和楽器・舞台の配信 ④ 和食・和服のオンライン発信 ◎ 地域の伝統をデジタルで紹介する１頁案を作成
	06　情報空間の諸相	① 日本のメディア（TV・新聞・ネット） ② SNSマナー ③ 個人情報と安全 ④ フェイク情報の見分け ◎ １つのニュースを複数媒体で比較→注意点をミニ発表
	07　日本の産業におけるIT	① 製造のIT（工場の自動化等） ② 金融のIT（キャッシュレス等） ③ 小売のIT（EC・在庫管理等） ④ 働き方とIT（勤怠管理・テレワーク等） ◎ 身近な店・サービスのIT活用を観察→ミニ発表
	08　JAPANコンテンツの素地	① 漫画・アニメ・ゲームの概要 ② 制作の流れ（企画→制作→配信） ③ ファン文化とコミュニティ ④ 海外展開と著作権の意識 ◎ 好きなJAPANコンテンツを解説（法に抵触しない範囲で）
	09　都市と地方の多様性	① 東京・大阪・札幌・名古屋・福岡等の特徴 ② 地方の産業（農業・観光等） ③ 地域文化と方言 ④ 地方×IT（地域課題・リモート対応等） ◎ 関心ある地域を調べて地図付きでミニ発表
	10　社会参画の入口	① 税と社会保険の基礎 ② 地域活動・ボランティア ③ 相談窓口（役所・NPO等） ④ 災害時の行動 ◎ 自分の日本での相談先リストを作成→相互レビュー
C 就職適性検査対策： 言語領域	01　出題の全体像と対策	① 出題範囲と形式（語彙・文法・読解等） ② 時間配分の考え方 ③ 解く順 ④ ミスを減らすコツ ◎ 例題10問→解法共有
	02　語句の意味・二語関係	① 同義語・対義語 ② 包含関係 ③ 言い違え易い語 ④ 接頭辞・接尾辞 ◎ N3〜N2語彙で二語関係問題を練習
	03　文の論理構造	① 接続語（つまり・しかし・だから等） ② 論理関係（同意・対比・因果等） ③ 指示語（これ・それ・この・その等） ④ 空欄補充の考え方 ◎ 短文整序（並べ替え）で論理問題を練習
	04　文法と敬語の運用	① 助詞（は・が・を・に等） ② 助動詞・補助動詞（〜られる・〜ている等） ③ 敬語（尊敬語・謙譲語・丁寧語） ④ ビジネス文の型 ◎ ビジネス（社内）メール文の校正（誤り探し）を練習

	05　要旨把握（短文）	① 主題・述部の確認 ② 要点抽出（誰が・何を等） ③ 例（事実）と主張（意見）の区別 ④ 正誤判断 ◎ 100～150字の要旨問題を練習
	06　長文読解	① 段落構成の把握 ② キーワードの把握 ③ 図表挿入文の読解 ④ スキミング ◎ 300～500字の読解問題（＋根拠部線引き）を練習
	07　情報整理と換言	① 表や箇条書きによる整理 ② 言い換え（名詞化・動詞化等） ③ 情報や記述の順序の並べ替え ④ 一文要約 ◎ 一文要約の問題を練習→相互レビュー
	08　実務文書リテラシー	① メールの型（件名・宛名・本文） ② 申請・報告の型 ③ 指示文書（メール）の読解 ④ 注意書きの理解 ◎ 社内通知の読み取り＆質問の書き出しの練習
	09　構造的把握の基礎	① 結論→理由→例の順 ② 段落間の関係 ③ 話の骨子メモ（箱書き） ④ 紛らわしい選択肢の捨て方 ◎ 骨子メモを作りながら例題解答
	10　技術日本語の読解	① 基本IT用語（保存・更新・権限等） ② 簡単な仕様書の読解 ③ 手順書・注意事項の読解 ④ 表グラフ付き説明文の読解 ◎ 短い仕様文の空欄補充問題＋用語確認
D 就職適性検査対策： 非言語領域	01　出題の全体像と対策	① 出題範囲（割合・表読み・推論等） ② 時間配分の考え方 ③ 計算を速くする工夫 ④ ミスを減らすコツ ◎ 例題５問→解法共有
	02　割合・比・速さ	① 割合と百分率 ② 比の単純化 ③ 速さ＝道のり×時間 ④ 単位変換 ◎ 割合・速さの文章題（図で整理）を練習
	03　表・グラフの解釈	① 棒グラフ・折れ線グラフ・円グラフ ② 増減と平均 ③ 複合表の読み方 ④ 単位・尺度への注意 ◎ 簡易な資料の読み取り→要点整理を練習
	04　場合の数と確率	① 並べ方の入口 ② 表での数え方 ③ 基本の確率 ④ 独立・従属の考え方 ◎ 少数値でケース分けして計算する練習
	05　整数と方程式	① 四則演算と約分 ② 一次方程式 ③ 比を用いた方程式 ④ 連立方程式の基礎 ◎ 数量関係の立式＆解法を練習
	06　図形と空間把握	① 角度と三角形 ② 面積・体積の基本形 ③ 展開図のイメージ ④ 相似の考え方 ◎ 図を描いて考える練習（方眼紙使用）

07　論理と集合	① 命題と真偽 ② 条件の読み替え ③ ベン図による整理 ④ 表条件の論理 ◎ 真偽表・ベン図を用いて考える練習
08　最適化と数列	① 順序づけのコツ ② 仕事量と時間配分 ③ 等差数列・等比数列の入口 ④ 段階的に良い案を選ぶ方法 ◎ 配分問題を表にして比較する練習
09　アルゴリズム的思考	① 手順の分け方 ② 条件分岐 ③ 繰り返し ④ 簡単な擬似コードの読み方 ◎ 手順カードを並べ替えて処理を説明する練習
10　統計リテラシーとデータ倫理	① 平均値・中央値・最頻値 ② 散布図と相関関係の入口 ③ 標本と母集団 ④ データの偏りと公正 ◎ 小データの要約表を作って解釈する練習

以上が、本事業で開発する教育プログラム（IT留学生教育プログラム）の教育体系（カリキュラム）である。そして、この教育体系に基づき、**各科目・各講の授業計画（シラバス）**を策定することで、本教育プログラムの設計を完成できる（次項で詳説する）。

3.4.3　シラバス

本教育プログラムは、IT専修学校の専門教育自体を増強・拡張するものでなく、留学生がその教育内容を理解・定着し、就職に接続するのに必要な基盤要件を全40講（＝10講×４科目）構成で体系化した補完教育である。それは裏返して言えば、留学生が日本のIT人材として学び働くまでの過程で教育現場で繰り返し観測される主な阻碍要因（制約要因）を、教育可能・評価可能な形に変換して取り除くことを狙う教育装置である。その際、「就職に接続する」とは、採用選考に通るための技法だけでなく、就職後の職場適応・定着を含む“状態変化のプロセス”（移行）を在学中に前倒しで整えることを言う。ここまでの射程を、本教育プログラムはその役割・機能として有する。

前項（**3.4.2**）で見た「教育プログラム科目・講・テーマ構成」は、本教育プログラムがいかなる教育内容を扱うかを設定したものである。

しかし、本教育プログラムを現場実装するためには、次の要件を充す必要がある。

- ○ 実 装 要 件：　誰が担当しても授業を再現できる（運用可能性）
- ○ 標準化要件：　学校間・担当者間で品質がぶれない（移植性・汎用性）
- ○ 評 価 要 件：　学修評価基準やCBT成績に対応し、到達度を説明できる（妥当性）
- ○ 説 明 責 任：　本教育プログラムの目的や仕様を関係者や外部に説明できる（透明性）

この要件を充す最小の設計文書が（各講の）**シラバス**である。したがって、「シラバス化」は、単なる書式化作業でなく、設計思想を授業運用・評価運用に接続する工程である。そのため、シラバスは、授業毎（コマ毎）に

記述せねば意味がない。多くの（自称）“シラバス”が科目毎で、そこに科目内の各講テーマが列挙されるだけ（少し拡張しても、配当年次や科目概要、評価方法（試験・レポート等）等の項目があるだけ）の記述に留まっている。それは、そのような“シラバス”自体がシラバスの形骸化を誘致しているのに等しいと言える。したがって、本事業で策定するシラバスは、講毎（授業毎）に記述される。すなわち、シラバスは40講分、作成された。

シラバス項目構成（シラバス全体設計思想）

本事業で採用した**シラバス項目の構成**は、教育設計の古典的な整合性原理（構成要素の対応）を、実務運用可能な形に圧縮したものである。その際、具体的に次の３層を一貫させることが重要である。

① 目的・到達：　何ができるようになるか　（**到達目標**）
② 内容・活動：　何を扱い、どう学ぶか　（**講内容・講形態**）
③ 評　　価：　何を以て到達を確認するか（**理解度確認テスト出題観点**）

この３層（教育目標・学習活動・評価方法）の整合を取れていることがシラバスの品質条件である。

科目・講・テーマ構成から各講シラバスに落し込むプロセス

上記の全体設計思想を踏まえ、全40講に共通する〈科目・講・テーマ構成→各講シラバス〉の落し込み手順を以下に整理する。その際に重要なことは、単にテーマ骨子を“膨らませて（授業担当者が）自由勝手に作文する”のでなく、本事業の成果物（すなわち本事業の趣旨・目的に基づいて開発された教育プログラム）としての整合性を損わない順序で情報を段階的に確定することである。

Step０　確定情報の確認

シラバス作成前に既に確定している情報源は次の３点である。

○ 科目・講・テーマ構成：　科目名・講名・講内テーマ名（①～④+◎）
○ 学 修 評 価 基 準：　各講に対応するスキル項目群
○ 理解度確認テスト：　各講の自習問題セット（１講５問、各問出題観点の抽出）

この３点が揃うことで、シラバスは各講の目標・内容・評価の整合を確保できる。

Step１　科目名・科目目的の確定

○ **科目名**は、“識別子”であり、教育内容の一貫性（科目境界）を保障する。
○ **科目目的**は、当該科目の到達像を定義し、講01～10に共通して記載される。これを先に確定しないと、各講が分散して個別に肥大し、科目として収束性が失われる。

Step２　講名・講内容の確定

○ **講名**は、当該講の焦点（“学ぶ核”）であり、「科目・講・テーマ構成」の中分類そのものである。
○ **講内容**は、「テーマ構成」（①～④+◎）をそのまま当該講の骨子として明示する項目である。ここでの原則は、講内容は“内容を膨らませる”場でなく“骨子を固定して示す”欄（膨らませるべきは後述する講概要・科目内当該講位置付け・出題観点の方）と認識することである。

Step３　到達目標の設定

各講の**到達目標**は、「学修評価基準」の小分類（スキル項目）がそのまま充当される。すなわち、到達目標は、講内容（①〜②+◎）を学んだ結果として“出来る”ようになる状態（“CanDo”）を学修評価基準に基づいて明文化したものである。その際、設計上の要点は次の通りである。

○ 各講の到達目標は、講内容（①〜④+◎）をカバーしつつ、過不足なく３点程度に収束させる。

○ 目標文は、展開を〈理解→条件・留意点→CanDo〉に揃え、評価可能性（採点可能性）を担保する。

○ 目標文は、“何となく解る”でなく「説明」「適用」「実践」等の行動表現で締め括る。

Step４　理解度確認テスト出題観点の設定

自習CBT（理解度確認テスト）は単なる“問題の集合”で終らせると、評価の妥当性（何を測定しているか）を説明できない。そこで、各講の自習問題群をテーマ別にクラスタリングし、「当該講で何を確認しているか」を短文（観点）で示す。

○ 出題観点は通常、講内容①〜④に対応する軸で設ける。

○ ただし、問題が〈適用・判断〉を測るものである場合、①〜④の横断観点（誤り易い点・判断基準等）を追加する。

○ 出題観点は、当該講の到達目標に対応せねばならない（評価・目標の整合）。

これにより、自習CBT（理解度確認テスト）は、単なる“小テスト”でなく、当該講の到達度を確認する測定設計（テストブループリント）になる。

Step５　講概要・科目内当該講位置付けの作成

ここが、骨子（科目・講・テーマ構成）を“運用可能な授業”に変換する核心の工程である。

○ **講概要**は、当該講でいかなる教育内容を扱って学習者が何を獲得するかを簡潔に説明するものである。

○ **科目内当該講位置付け**は、当該講の前後講との関係を明示し、“学習の積み上げ”（スキャフォルディング）を説明するものである。

特に本教育プログラム対象者（来日２〜３年程度、JLPT N2〜N3程度、就職（活動）準備段階）の場合、学習者はなぜ今これを学ぶかを理解できないと学習内容が定着しない。すなわち、科目内当該講位置付けは、単なる講構成の説明でなく、学習動機と行動変容の導線である。

Step６　講形態の設定

講形態は、当該講の目標達成に最適な学習活動を運用仕様として設定するものである。

○【科目Ａ】　講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）

○【科目Ｂ】　講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）

○【科目Ｃ・Ｄ】講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）

このように講形態を固定的に設定することで、担当者が変っても、学習者が経験する活動の質は一定度は保たれる。

Step７　キーワードの設定

キーワードは、単なる用語一覧でない。特にN2〜N3の留学生には、講の理解を左右する概念の足場である。キーワードの選定基準は次の３点である。

○ 概 念 の 核：　講内容①〜④の中心概念が入っている。

○ 簡潔な表現：　複合助詞を多用した長い表現を避け、短く再利用可能な表現にする。

○ 評 価 連 動：　自習CBTで問う概念や演習で使わせる用語と一致させる。

以上を踏まえ、本事業で策定するシラバスは、本教育プログラムの各講について次のような項目を設定し、その各項について説明するものである。そして、これを全講共通のフォーマットにする。**シラバス各項の意味・意図・意義**を以下に整理する。

▼ シラバス項目構成（全講共通フォーマット）と各項の意味・意図・意義

シラバス項目	意味 （何を示すか）	意図 （なぜ必要か）	意義 （運用・評価にどう効くか）
科 目 名	科目の識別子	科目境界の設定	学修評価基準・教材・CBT問題の紐付けの起点
科目目的	科目の到達像	10講を同一方向に収束	科目内の一貫性、説明責任、横展開の安定
講　　名	講の焦点	学習者の理解負荷を制御	学習者が何の講かを把握できて復習し易い
講 概 要	講の要約	何を獲得する講かの明示	受講前後の見通しの形成、教材制作の指針
科目内当該講 位置付け	前後講との関係	学習の積み上げを可視化	動機付け・定着・脱落抑制に寄与
講 形 態	学習活動の仕様	目標達成の手段を設定	担当者間の差の縮減、演習・評価の再現性確保
講 内 容	テーマ骨子の明示	教育内容の範囲の設定	逸脱防止、評価基準・CBT問題との対応点の明確化
キーワード	概念の足場	言語負荷の制御	理解促進、CBT出題語彙の統制、講内容の把握
到達目標	CanDoの宣言	評価可能な目標の明示	学習評価基準（スキル項目）と直結した妥当性の担保
理解度確認テスト 出題観点	自習CBTの測定意図	何を測定するかの明示	出題妥当性・説明可能性・改善（項目分析）に効く

「科目・講・テーマ構成」（**3.4.2**）は“設計の骨格”であったが、シラバス策定はそれを運用可能・評価可能な教育仕様に変換する工程である。そして、本事業で策定したシラバス項目構成は、① 目標（到達目標）・② 内容・活動（講内容・講形態）・③ 評価（理解度確認テスト出題観点）を必ず共起させた上で、留学生の学習負荷を制御しながら、学校間で再利用可能な標準モデルとして成立させるために設計されている。つまり、「科目・講・テーマ構成」からシラバスへの変換は、単なる骨子の文書化でなく、事業成果物としての教育体系（カリキュラム）を“実装仕様”に落し込む設計行為である。

こうして作成した本教育プログラムの**シラバス**（全40講）を次頁以降に示す。

▼ 教育プログラム シラバス――【科目A】IT留学生キャリア教育

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	01　日本のIT人材として
講概要	日本のIT職種（開発・保守・運用）の役割差を整理し、顧客視点での価値提供、責任と質保証を含むプロ意識、学び続ける姿勢を学習する。演習で「IT会社の１日」を想定し、自分の役割を短く説明して共有する。
科目内 当該講 位置付け	本科目の導入として、IT人材の役割と価値提供を共通理解にする回である。以後の職場規範（02）や協働（03-04）、品質と行動（06-07）を学ぶ前提になる「プロとしての視点」を先に揃える。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① 日本のIT職種と役割（開発・保守・運用の違い） ② 顧客視点と価値提供 ③ プロフェッショナルとしての姿勢（責任・質保証） ④ 学び続ける意義 ◎ IT会社の１日を想定したケース討議＋共有（自分の役割を短く説明）
キーワード	IT職種　開発　保守　運用　顧客視点　価値提供　プロ意識　継続学習
到達目標	◇ 日本のIT職種の役割差を理解し、自分の担当で求められる作業と責任を説明できる。 ◇ 顧客視点と価値提供の考え方を理解し、要件の背景を質問して提案に反映できる。 ◇ プロとしての姿勢と学び続ける意義を理解し、成長方針を言語化して実行計画に反映できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 運用職の役割識別　❷ 顧客視点の行動選択　❸ 成果責任としてのプロ理解 ❹ 当事者意識欠如の判別　❺ ドッグイヤー概念理解

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	02　職場の基本ルール
講概要	勤怠連絡と就業規則、報･連･相の基本型、守秘義務と情報管理、コンプライアンスの考え方を扱う。ミニケースを通じて、必要事項が抜けない報連相メッセージを作成し、短く分かりやすい形に推敲する。
科目内 当該講 位置付け	「プロとしての視点」（01）を具体的な職場ルールとして行動に落し込む回である。以後の異文化協働（03）やチーム遂行（04）でも、連絡・情報管理の土台が崩れると事故が起きるため、前半で確実に固める。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① 就業規則と勤怠（遅刻・欠勤の連絡） ② 報･連･相の型 ③ 守秘義務と情報管理 ④ コンプライアンス（法律・社内ルール） ◎ ミニケースを読んで報･連･相メッセージを作成→グループで推敲
キーワード	就業規則　勤怠　遅刻　欠勤　報連相　守秘義務　情報管理　コンプライアンス
到達目標	◇ 就業規則と勤怠連絡の基本を理解し、遅刻・欠勤時に必要事項を適切に連絡できる。 ◇ 報・連・相の型を理解し、状況に応じて簡潔かつ正確なメッセージを作成できる。 ◇ 守秘義務とコンプライアンスを理解し、情報管理のルールを守って行動できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 遅刻・欠勤連絡の必須要素　❷ ミス発見時の報告行動　❸ 守秘義務違反の識別 ❹ 法令違反リスクの判断　❺ 相談時の準備姿勢

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	03　多様性と異文化協働
講概要	時間感覚や上下関係の受け止め方の違い、偏見への気付き、相互リスペクトのある言い方、共通言語としてのやさしい日本語＋英語を学ぶ。文化差が出やすい場面をロールプレイし、誤解を減らす表現と確認の取り方を整理する。
科目内 当該講 位置付け	ルールと基本連絡（01-02）を異文化環境で破綻させないための回である。チーム運用（04）では、価値観の違いが衝突に繋がるため、その前に配慮表現と共通言語の作法を学ぶ。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① 時間感覚・上下関係の違い ② 偏見への意識 ③ 相互リスペクトがある言い方 ④ 共通言語（やさしい日本語＋英語） ◎ 文化差の場面をロールプレイ→気付きを整理
キーワード	多様性　文化差　時間感覚　上下関係　偏見　リスペクト　やさしい日本語　確認質問
到達目標	◇ 文化差（時間感覚・上下関係等）を理解し、誤解が生じ易い点を説明できる。 ◇ 偏見の構造と相互リスペクトを理解し、相手を傷付けない言い方に言い換えられる。 ◇ 共通言語としてのやさしい日本語を理解し、短文化と確認質問で意思疎通を実践できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 遅刻が信頼に与える影響　❷ アイ・メッセージの選択　❸ 賛成点を踏まえた反対表現 ❹ 理解不足時の確認行動　❺ 上司への声掛け配慮

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	04　チームワークとロール
講概要	リーダー／メンバーの役割、助け合いとレビュー、小さな目標の分担、振り返りミーティングの基本を扱う。簡単な作業計画をチームで設計し、役割分担と進捗共有の形を明文化して、協働の型を体験する。
科目内 当該講 位置付け	異文化配慮（03）をチームの行動規範に落し込む回である。実務コミュニケーション（05）を実装する前に、誰が何を担い、どう確認するかを「チームの単位」で理解させる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① 役割（リーダー／メンバー） ② 助け合いとレビュー ③ 小さな目標の分担 ④ 振り返りミーティング ◎ 簡単な作業計画をチームで設計（役割分担を明文化）
キーワード	役割　リーダー　メンバー　レビュー　分担　小目標　振り返り　ミーティング
到達目標	◇ チーム内の役割（リーダー／メンバー）を理解し、自分の役割と期待行動を説明できる。 ◇ 助け合いとレビューの意味を理解し、観点に基づいた確認と指摘を実践できる。 ◇ 小目標の分担と振り返りを理解し、作業計画と改善点をチームで共有できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ メンバー役割の誤解　❷ レビュー目的の理解　❸ タスク分割の意義 ❹ KPT手法の理解　❺ 助けを求める行動判断

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	05　コミュニケーション
講概要	やさしい日本語のコツ、メール・チャットの基本形式、会議での発言とメモ、フィードバックの受け方・伝え方を学ぶ。 演習ではメール文を改善し、件名・要件・期限が伝わる形に整え、短い共有発表で伝達精度を確認する。
科目内 当該講 位置付け	チーム運用（04）を成立させるための言語化の技術を扱う回である。以後の品質（06）やタスク管理（07）でも、 曖昧な依頼・報告が事故の原因になるため、文と会話の基本型を先に固める。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① やさしい日本語のコツ ② メール・チャットの基本形式 ③ 会議での発言・メモ ④ フィードバックの受け方・伝え方 ◎ メール文の改善（件名・本文・依頼）とミニ発表
キーワード	やさしい日本語　　メール　　チャット　　会議　　メモ　　発言　　フィードバック　　依頼
到達目標	◇ やさしい日本語のコツを理解し、伝わる短文と具体語で依頼・相談できる。 ◇ メール・チャットの基本形式を理解し、件名・要件・期限を明確に記述できる。 ◇ 会議発言とメモ、フィードバックの型を理解し、受け方と伝え方を実践できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ やさしい日本語の原則　　❷ チャット利用マナー　　❸ 会議参加の基本行動 ❹ フィードバック受容姿勢　　❺ メール必須要素の識別

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	06　リスク認識と“小さな品質”
講概要	ミスの種類を切り分け、チェックリストとセルフレビュー、エスカレーションの考え方、基本的な安全・情報セキュリティを 扱う。作業手順からチェックポイントを列挙し、どこでミスが起きるかを見える化して、予防の型を学ぶ。
科目内 当該講 位置付け	職場基盤（01-05）を、事故を起さない実務行動に接続する回である。タスク・時間管理（07）にも強く関連し、 遅延や不具合を「早めに気付く／早めに上げる」態度の核を作る。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① ミスの種類 ② チェックリストとセルフレビュー ③ エスカレーション ④ 安全・情報セキュリティの基本 ◎ 作業手順を読んでチェックポイントを列挙→グループで整理
キーワード	ミス　　チェックリスト　　セルフレビュー　　エスカレーション　　品質　　リスク　　セキュリティ ヒューマンエラー
到達目標	◇ ミスの種類を理解し、起き易い原因に合せた予防策を説明できる。 ◇ チェックリストとセルフレビューを理解し、作業前後の点検を習慣化できる。 ◇ エスカレーションと情報セキュリティの基本を理解し、異常時に適切に報告できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ コミュニケーションエラー理解　　❷ チェックリスト運用の要点　　❸ エスカレーション要否判断 ❹ セキュリティ不適切行動　　❺ ヒューマンエラー原因認識

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	07　タスク・時間の管理
講概要	ToDoと優先順位（重要／緊急）、見積りとバッファ、割込み対応、締切とプロミスを学ぶ。1週間の学習・作業スケジュールを作成し、現実的な見積りと余裕の取り方、遅延の芽を早めに共有する行動を練習する。
科目内 当該講 位置付け	リスク管理（06）を日々の予定運用に落し込む回である。継続学習（08）にも直結し、忙しい時ほど重要な学習（第2領域）を確保する視点を身に付けさせ、後半のキャリア設計（10）に繋げる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① ToDoと優先順位（重要／緊急） ② 見積りとバッファ ③ 割込み対応 ④ 締切とプロミス ◎ 1週間の学習・作業スケジュールを作成→相互コメント
キーワード	ToDo　優先順位　重要緊急　見積り　バッファ　割込み　締切　プロミス
到達目標	◇ ToDoと優先順位の考え方を理解し、重要度と緊急度で順序を決定できる。 ◇ 見積りとバッファの意味を理解し、根拠ある所要時間を説明して調整できる。 ◇ 割込み対応と締切の扱いを理解し、遅延リスクを早めに共有して約束を守れる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 第2領域の行動理解　❷ 見積りの根拠設定　❸ 割込み時の再優先付け ❹ 締切の性質理解　❺ 遅延見込み時の相談

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	08　継続的な学び
講概要	学びのPDCA、学習ログの付け方、資格学習の入口、学習コミュニティの活用を扱う。自分の学習ログ様式を試作し、ペアで改善して、継続できる記録と振り返りの仕組を作る。
科目内 当該講 位置付け	時間管理（07）を「学びの継続」に焦点化する回である。就職までの学習を自走させるため、記録と改善のサイクルを持たせ、キャリア計画（10）を“計画倒れ”にしない準備を整える。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① 学びのPDCA ② 学習ログ（ノート・ツール） ③ 資格学習の入り口 ④ 学習コミュニティの使い方 ◎ 自分の学習ログ様式を試作→ペアで改善
キーワード	PDCA　学習ログ　ノート　資格　コミュニティ　継続　振り返り　改善
到達目標	◇ 学びのPDCAを理解し、目標→実行→振り返りを短サイクルで回せる。 ◇ 学習ログの目的を理解し、ノートやツールで学習記録を継続できる。 ◇ 資格学習と学習コミュニティの使い方を理解し、支援を得ながら学びを継続できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 学習PDCA（C）の理解　❷ 学習ログ目的の誤解　❸ 資格学習の着手手順 ❹ コミュニティ参加マナー　❺ KPT記録の位置付け

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	09　倫理とハラスメント防止
講概要	仕事の倫理（ごまかさない）、労働時間・休憩の入口、ハラスメントの例と線引き、相談先と記録の仕方を学ぶ。事例を読み、不適切発言の言い換えや、困った時に安全に相談する流れを確認し、自己防衛の基礎を固める。
科目内 当該講 位置付け	リスク管理（06-07）を「人・関係性」に拡張する回である。留学生が孤立し易い状況を想定した上で、記録と相談の実務を扱い、最後のキャリア設計（10）を安全に進めるための土台にする。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① 仕事の倫理（ごまかさない） ② 権利と義務の入口（労働時間・休憩） ③ ハラスメントの例と線引き ④ 相談先・記録の仕方 ◎ 事例を読んで不適切発言の言い換えを検討
キーワード	倫理　権利　義務　休憩　ハラスメント　線引き　記録　相談
到達目標	◇ 仕事の倫理を理解し、ごまかさない判断と行動を具体例で説明できる。 ◇ 権利と義務の入口を理解し、労働時間・休憩の基本を踏まえて行動できる。 ◇ ハラスメントの線引と相談手順を理解し、記録と相談を安全に実践できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ ミス申告と再発防止の姿勢　❷ 休憩時間の基本理解　❸ 冗談扱いの危険認識 ❹ 記録と相談の実行手順　❺ ごまかし行動の不適切性

科目名	IT留学生キャリア教育
科目目的	日本の職業・職場を知り、日本で働く意義・目的を考え、そのために必要な職業意識を醸成することを留学生に促す。
講　名	10　IT留学生のキャリア設計
講概要	強みの棚卸し、キャリアパス例、短期・中期目標の作り方、日本・母国・国際の選択肢を扱う。個人キャリアシートを作成し、根拠ある強み表現と、実行可能な行動計画へ落とし込む観点を相互レビューで磨く。
科目内 当該講 位置付け	本科目のまとめとして、01-09で学んだ職場規範・協働・品質・学習・安全を、自分の進路選択に統合する回である。 就職活動の前段として、判断軸と計画を言語化し、次科目（C・D）への学習計画にも接続する。
講形態	講講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：ケース討議／グループ討議）＋ 自習（CBT）
講内容	① 強みの棚卸し（学習・言語・経験） ② キャリアパス例 ③ 短期･中期目標の作り方 ④ 日本・母国・国際の選択肢 ◎ 個人キャリアシートを作成 → グループで相互レビュー
キーワード	強み　棚卸し　キャリアパス　目標設定　短期　中期　意思決定　選択肢
到達目標	◇ 強みの棚卸しを理解し、学習・言語・経験を根拠付きで説明できる。 ◇ キャリアパスと目標設定を理解し、短期・中期の行動計画を作成できる。 ◇ 日本・母国・国際の選択肢を理解し、条件比較に基づく意思決定を実践できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 自己分析の根拠不足回避　❷ スペシャリスト型の理解　❸ SMART（M）の意味理解 ❹ 母国就労メリット整理　❺ ブリッジ人材の概念理解

▼ 教育プログラム シラバス――【科目B】日本事情

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	01　社会構造の概要
講概要	国・都道府県・市区町村の役割、人口と高齢化、働き方の種類、地域社会の仕組を整理し、生活で困った時に「どこに相談するか」を考える基礎を作る。演習では居住区の行政窓口や支援情報を調べ、必要な時に迷わない導線を共有する。
科目内 当該講 位置付け	本科目の入口として、日本で暮す・働くための制度地図を作る回である。生活実務（02）・職場文化（03）・社会参画（10）に進む前に、制度の全体像と窓口選択を先に押さえる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 国・都道府県・市区町村 ② 人口・高齢化の現状 ③ 働き方の種類（正社員／契約･派遣社員） ④ 地域社会の仕組 ◎ 居住区の行政窓口・支援情報を調べてミニ発表
キーワード	行政　都道府県　市区町村　人口　高齢化　雇用形態　地域社会　支援窓口
到達目標	◇ 国・都道府県・市区町村の役割を理解し、必要な窓口を選んで説明できる。 ◇ 人口と高齢化の現状を理解し、生活や産業への影響を簡潔に説明できる。 ◇ 働き方の種類を理解し、自分に関係する支援や注意点を選べる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 行政区分の役割理解　❷ 少子高齢化の影響把握　❸ 派遣社員の制度理解 ❹ 地域ルールの基本認識　❺ 正社員の特徴理解

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	02　生活文化の実際
講概要	住まいとゴミ出し、医療・保険・マイナンバー、銀行・携帯・交通系IC、災害への備えを扱い、日本の生活オペレーションを実務目線で整理する。演習では来月の生活ToDoを作成し、抜け易い手続や安全面の準備を相互確認する。
科目内 当該講 位置付け	制度地図（01）を日常の行動に繋げる回である。職場文化（03）に進む前に、生活基盤の安定を確保し、困り事を未然に減らすことで学習と就活の集中を可能にする。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 住まいとゴミ出し ② 医療・保険・マイナンバー ③ 銀行・携帯・交通系IC ④ 災害への備え ◎ 来月の生活のToDoリストを作成→相互レビュー
キーワード	住まい　ゴミ出し　医療　保険　マイナンバー　銀行　交通系IC　災害
到達目標	◇ 住まいとゴミ出しのルールを理解し、地域の手順に基づいて実践できる。 ◇ 医療・保険・マイナンバーの基本を理解し、必要時に手続きを選択できる。 ◇ 銀行・携帯・交通系ICと災害備えを理解し、生活ToDoとして整理できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 分別と指定日の基本　❷ マイナンバーの用途　❸ 健康保険の役割理解 ❹ 口座の必要性把握　❺ 避難情報の確認行動

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	03　職場文化の諸相
講概要	納期と時間管理の重視、報連相と会議、上下関係と敬語、休暇・残業の考え方を扱う。演習では職場の暗黙知を列挙して整理し、“言われないが重要”になり易いポイントを言語化して共有する。
科目内 当該講 位置付け	生活領域（01-02）から職場領域に橋渡しする回である。科目Ａと重なる話題もあるが、本講では日本社会の慣行としての職場文化を俯瞰し、産業理解（07）や社会参画（10）にも接続させる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 納期・時間管理の重視 ② 報･連･相と会議 ③ 上下関係と敬語 ④ 休暇・残業の考え方 ◎ 職場の暗黙知を列挙・整理→グループで発表
キーワード	納期　時間管理　報連相　会議　敬語　上下関係　休暇　残業
到達目標	◇ 納期と時間管理の重視を理解し、遅延時の相談と再計画を実践できる。 ◇ 報連相と会議の進め方を理解し、必要情報を整理して共有できる。 ◇ 上下関係・敬語・休暇残業の考え方を理解し、誤解を避けて説明できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 納期が重視される理由　❷ 会議での要点共有　❸ 敬語の基本運用 ❹ 残業の捉え方整理　❺ 休暇取得の事前調整

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	04　伝統文化の概観
講概要	神道・仏教の入口、年中行事（正月・お盆等）、礼儀（挨拶・所作等）、地域の祭りを概観し、生活や対人場面の背景を理解する。演習では自国行事と日本行事の共通点を比較し、異文化説明の練習として整理・発表する。
科目内 当該講 位置付け	制度・生活・職場（01-03）に対し、文化の背景理解を補う回である。次講（05）で伝統とデジタルの接点を扱うため、その前提として宗教・行事・礼儀の基本語彙を共有する。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 神道・仏教の入口 ② 年中行事（正月・お盆等） ③ 礼儀（挨拶・所作等） ④ 地域の祭り ◎ 出身国の行事と日本の行事の共通点を比較・発表
キーワード	神道　仏教　年中行事　礼儀　挨拶　所作　祭り　地域差
到達目標	◇ 神道・仏教の入口を理解し、行事や施設での基本作法を説明できる。 ◇ 年中行事と礼儀の意味を理解し、生活や職場での配慮として実践できる。 ◇ 地域の祭りと地域差を理解し、自国文化との共通点と相異点を説明できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 神社・寺の基本差異　❷ 初詣など行事理解　❸ 参拝時の礼儀行動 ❹ 挨拶所作の意味　❺ 地域祭りの社会的役割

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	05　伝統文化とデジタル技術
講概要	文化財のデジタル保存、観光×AR/VR、和楽器・舞台の配信、和食・和服のオンライン発信を扱い、「伝統を守りながら伝える」技術の考え方を学ぶ。演習で地域の伝統を紹介する１頁案を作り、目的・対象・配慮点を整理する。
科目内 当該講 位置付け	伝統文化（04）をIT・デジタルの視点で現代に接続する回である。情報空間（SNS・個人情報・フェイク）（06）に進む前に、発信と権利配慮の入口を扱っておく。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 文化財のデジタル保存（写真・動画・3D） ② 観光 × AR/VR ③ 和楽器・舞台の配信 ④ 和食・和服のオンライン発信 ◎ 地域の伝統をデジタルで紹介する１頁案を作成
キーワード	文化財　デジタル保存　3D　AR/VR　観光　配信　オンライン発信　権利
到達目標	◇ 文化財のデジタル保存を理解し、写真・動画・3Dの意義を説明できる。 ◇ 観光×AR/VRの概要を理解し、地域紹介の簡単な企画案を作成できる。 ◇ 配信・オンライン発信の留意点を理解し、権利と配慮を踏まえて実践できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ デジタル保存の利点　❷ AR/VR観光の活用例　❸ 配信の価値理解 ❹ 発信時の権利配慮　❺ 企画設計の基本手順

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	06　情報空間の諸相
講概要	日本のメディア（TV・新聞・ネット）、SNSマナー、個人情報と安全、フェイク情報の見分け方を扱う。演習では同一ニュースを複数媒体で比較した上で、情報源の違いと注意点を整理し、誤情報に引き摺られない確認行動を身に付ける。
科目内 当該講 位置付け	生活・文化を理解するだけでなく、安全に情報を扱う力を育てる回である。産業IT理解（07）や就職活動での情報収集にも直結するため、媒体選択と確認手順を本科目の中盤で固める。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 日本のメディア（TV・新聞・ネット） ② SNSマナー ③ 個人情報と安全 ④ フェイク情報の見分け ◎ １つのニュースを複数媒体で比較→注意点をミニ発表
キーワード	メディア　SNS　個人情報　安全　フェイク情報　情報源　比較　マナー
到達目標	◇ 日本のメディア特性を理解し、目的に合う情報源を選択できる。 ◇ SNSマナーと個人情報保護を理解し、公開範囲と安全行動を実践できる。 ◇ フェイク情報の見分け方を理解し、確認手順と根拠を説明できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 媒体特性の比較理解　❷ SNS公開範囲への配慮　❸ 個人情報の識別 ❹ ファクトチェック手順　❺ 信頼できる情報源選択

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	07　日本の産業におけるIT
講概要	製造・金融・小売・働き方の各領域で、ITがどう活用されているかを身近な例で整理する。演習では日常の店やサービスを観察し、ITがどこで価値を生んでいるかを言語化して発表し、IT人材としての視点を育てる。
科目内 当該講 位置付け	本科目において、社会理解をITキャリアに寄せる回である。科目Ａで扱った職業観に接続しつつ、コンテンツ産業理解（08）にも繋げ、産業全体におけるITの位置を捉える視野を作る。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 製造のIT（工場の自動化等） ② 金融のIT（キャッシュレス等） ③ 小売のIT（EC・在庫管理等） ③ 働き方とIT（勤怠管理・テレワーク等） ◎ 身近な店・サービスのIT活用を観察→ミニ発表
キーワード	製造　金融　小売　キャッシュレス　EC　在庫管理　テレワーク　勤怠
到達目標	◇ 製造・金融・小売でのIT活用を理解し、身近な例で説明できる。 ◇ 働き方とIT（勤怠・テレワーク等）を理解し、利点と注意点を整理できる。 ◇ 観察結果の纏め方を理解し、サービスのIT活用の要点を発表できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 工場自動化の理解　❷ キャッシュレスの仕組み　❸ 在庫管理のIT活用 ❹ 勤怠管理システムの役割　❺ 身近なIT観察の観点

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	08　JAPANコンテンツの素地
講概要	漫画・アニメ・ゲームの概要、制作の流れ（企画→制作→配信）、ファン文化とコミュニティ、海外展開と著作権の意識を扱う。演習では好きな作品を題材にし、法に抵触しない範囲で紹介し、権利と礼儀を踏まえた説明の型を練習する。
科目内 当該講 位置付け	日本文化を「コンテンツ産業」という現代的切り口で理解する回である。発信と権利（05）や情報空間（06）にも関連し、地域多様性（09）に進む前に、文化と経済の接点を整理する。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 漫画・アニメ・ゲームの概要 ② 制作の流れ（企画→制作→配信） ③ ファン文化とコミュニティ ④ 海外展開と著作権の意識 ◎ 好きなJAPANコンテンツを解説（法に抵触しない範囲で）
キーワード	漫画　アニメ　ゲーム　制作工程　コミュニティ　ファン文化　海外展開　著作権
到達目標	◇ 漫画・アニメ・ゲームの概要を理解し、制作の流れを説明できる。 ◇ ファン文化とコミュニティの特徴を理解し、礼儀を守って参加できる。 ◇ 海外展開と著作権の基本を理解し、安全な紹介・共有を実践できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ メディアミックスの理解　❷ 制作委員会方式の誤解　❸ 聖地巡礼の意味理解 ❹ 海賊版と著作権認識　❺ 留学生の橋渡し価値

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	09　都市と地方の多様性
講概要	主要都市の特徴、地方の産業（農業・観光等）、地域文化と方言、地方×IT（地域課題・リモート対応等）を扱う。演習で関心地域を調べ、地図付きで要点を発表し、進路選択の前提となる「地域条件の違い」を理解する。
科目内 当該講 位置付け	制度理解（01）を「地域差」に広げる回である。就職先を都市部に限らず考えるための視野を作り、それを社会参画（税・相談先・災害）（10）に繋げて生活と仕事の現実感を高める。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 東京・大阪・札幌・名古屋・福岡等の特徴 ② 地方の産業（農業・観光等） ③ 地域文化と方言 ④ 地方 × IT（地域課題・リモート対応等） ◎ 関心ある地域を調べて地図付きでミニ発表
キーワード	都市　地方　産業　観光　方言　地域文化　地域課題　リモート
到達目標	◇ 主要都市と地方の特徴を理解し、生活条件の違いを説明できる。 ◇ 地方の産業・地域文化・方言を理解し、異文化配慮の観点で比較できる。 ◇ 地方×ITの方向性を理解し、地域課題へのIT活用例を提案できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 都市ごとの生活環境差　❷ 地方産業の具体例　❸ 方言への配慮行動 ❹ 地方課題×ITの例　❺ 地方就職の視点整理

科目名	日本事情
科目目的	日本で学んだり働いたりするために知っておくべき日本の社会・文化や現在について概論的に理解する。
講　名	10　社会参画の入口
講概要	税と社会保険、地域活動・ボランティア、相談窓口、災害時の行動を扱い、社会で安全に暮し働くための最低限の知識を整理する。演習で自分の相談先リストを作成し、困った時に動ける「連絡先の準備」を完成させる。
科目内 当該講 位置付け	本科目の総まとめとして、制度（01）・生活（02）・文化（04-05）・情報（06）・地域（09）を、社会参画の具体行動に統合する回である。就職後も必要になるセーフティネット理解を確実に残す。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：調べ学習／ミニ発表）＋ 自習（CBT）
講内容	① 税と社会保険の基礎 ② 地域活動・ボランティア ③ 相談窓口（役所・NPO等） ④ 災害時の行動 ◎ 自分の日本での相談先リストを作成→相互レビュー
キーワード	税　社会保険　年金　ボランティア　NPO　相談窓口　災害　セーフティネット
到達目標	◇ 税と社会保険の基本を理解し、最低限の手続きの流れを説明できる。 ◇ 地域活動・ボランティアの意義を理解し、無理がない参加方法を選択できる。 ◇ 相談窓口と災害時行動を理解し、自分の相談先リストを作成できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 住民税の基本理解　❷ ボランティアの意義　❸ 相談先の適切選択 ❹ 津波警報時の避難　❺ 労災保険の概要

▼ 教育プログラム シラバス――【科目C】就職適性検査対策：言語領域

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	01　出題の全体像と対策
講概要	語彙・文法・読解等の出題範囲と形式を整理し、時間配分、解く順、ミスを減らすコツを学ぶ。例題を解きながら、設問タイプ毎の手順と根拠確認の仕方を共有し、以後の練習で迷わない解答戦略を作る。
科目内当該講位置付け	本科目の導入として、言語問題を「型」で解くための前提を揃える回である。02-10で個別技能（語彙・論理・文法・読解）に分かれるため、最初に時間管理とミス削減の観点を定めて学習効率を上げる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 出題範囲と形式（語彙・文法・読解等） ② 時間配分の考え方 ③ 解く順 ④ ミスを減らすコツ ◎ 例題10問→解法共有
キーワード	出題範囲　形式　時間配分　解答順　見直し　戦略　語彙　読解
到達目標	◇ 出題形式と範囲を理解し、設問タイプ別の解答順と時間配分を説明できる。 ◇ ミスの典型を理解し、見直し観点（根拠確認等）に基づいて誤答を減らせる。 ◇ 学習計画の立て方を理解し、語彙・読解の練習ルーチンを作成できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 整序問題の要点　❷ 時間配分の基本　❸ 長文の着手手順 ❹ 根拠確認でのミス防止　❺ 語彙学習の位置付け

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	02　語句の意味・二語関係
講概要	同義語・対義語、包含関係、言い違え易い語、接頭辞・接尾辞を扱い、N3〜N2レベル語彙で推論する力を養成する。二語関係の練習を通じて語の意味差と関係性を素早く判断する方法を確認し、読解の基礎体力を上げる。
科目内当該講位置付け	語彙は全講の土台であり、論理・読解（03-10）で「意味が取れない」状態を減らす回である。特に留学生は似た語の混同が起き易いため、初期段階で意味差と関係性の型を押さえる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 同義語・対義語 ② 包含関係 ③ 言い違え易い語 ④ 接頭辞・接尾辞 ◎ N3〜N2語彙で二語関係問題を練習
キーワード	同義語　対義語　包含　二語関係　接頭辞　接尾辞　語彙　誤用
到達目標	◇ 同義語・対義語を理解し、意味の差と用法の違いを識別できる。 ◇ 二語関係（包含・対比等）を理解し、関係性を推論して選択できる。 ◇ 接頭辞・接尾辞を理解し、未知語の意味を文脈から推定できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 対義語の識別　❷ 包含関係の推論　❸ 頻出語彙の意味理解 ❹ 接頭辞の意味　❺ 語彙混同の判定

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	03　文の論理構造
講概要	接続語、論理関係（同意・対比・因果等）、指示語、空欄補充の考え方を扱う。短文整序を通じて文同士の関係を手掛りにして並びを決める手順を確認し、感覚でなく根拠で解く練習を行う。
科目内当該講位置付け	語彙基盤（02）の上に、文章の“つながり”を読む力を積む回である。要旨把握・長文読解（05-06）は論理関係を取れないと崩れるため、ここで接続語・指示語の型を確立する。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 接続語（つまり・しかし・だから等） ② 論理関係（同意・対比・因果等） ③ 指示語（これ・それ・この・その等） ④ 空欄補充の考え方 ◎ 短文整序（並べ替え）で論理問題を練習
キーワード	接続語　論理関係　因果　対比　指示語　空欄補充　整序　根拠
到達目標	◇ 接続語の機能を理解し、同意・対比・因果の関係を説明できる。 ◇ 指示語の参照先を理解し、文脈に基づいて正しく特定できる。 ◇ 空欄補充の手順を理解し、前後関係から最適な語句を選択できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 逆接接続語の理解　❷ 言い換え接続語の機能　❸ 指示語の参照特定 ❹ 空欄補充の手順　❺ 因果接続語の識別

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	04　文法と敬語の運用
講概要	助詞、助動詞・補助動詞、敬語（尊敬語・謙譲語・丁寧語）、ビジネス文の型を扱う。社内メールの校正演習で、意味が崩れる誤りや場面に合わない敬語を見つけ、就職後に必要になる最低限の文法精度を整える。
科目内当該講位置付け	論理構造（03）に加え、文の“形”を正確にする回である。実務文書リテラシー（08）に直結するため、ここで助詞・敬語の基本を押さえ、誤解や失礼が生ずるリスクを減らす。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 助詞（は・が・を・に等） ② 助動詞・補助動詞（〜られる・〜ている等） ③ 敬語（尊敬語・謙譲語・丁寧語） ④ ビジネス文の型 ◎ ビジネス（社内）メール文の校正（誤り探し）を練習
キーワード	助詞　助動詞　補助動詞　敬語　尊敬語　謙譲語　丁寧語　メール
到達目標	◇ 助詞・助動詞の基本を理解し、文の意味が崩れない形で運用できる。 ◇ 敬語の種類を理解し、場面（社内／社外）に応じて使い分けられる。 ◇ ビジネス文の型を理解し、失礼がないメール文に修正できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 助詞による断り表現　❷ 受け身敬語の注意　❸ 謙譲語の選択 ❹ メール冒頭の基本　❺ 開始表現の適切性

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	05　要旨把握（短文）
講概要	主題・述部の確認、要点抽出、例（事実）と主張（意見）の区別、正誤判断を扱う。100〜150字程度の要旨問題を練習し、設問条件と根拠箇所を結び付けて常識でなく本文を根拠にして判断する手順を身に付ける。
科目内当該講位置付け	長文読解（06）に入る前段として、短文で「主張と根拠」を確実に取る回である。ここで要旨選択の型を固めることで、長文でも段落毎の要点を把握する速度が上がる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 主題・述部の確認 ② 要点抽出（誰が・何を等） ③ 例（事実）と主張（意見）の区別 ④ 正誤判断 ◎ 100〜150字の要旨問題を練習
キーワード	主題　述部　要点　事実　意見　正誤　要旨　短文
到達目標	◇ 主題と述部を理解し、短文の要点を抽出して要旨を選択できる。 ◇ 事実と意見を理解し、設問条件に沿って正誤を判断できる。 ◇ 根拠箇所の特定を理解し、根拠に基づいて解答を説明できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 要旨選択の誤り回避　❷ 主張サインの把握　❸ 主張と例示の関係 ❹ 条件に沿う正誤判断　❺ 常識解答の禁止

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	06　長文読解
講概要	段落構成、キーワード、図表挿入文、スキミングを扱い、300〜500字程度の読解を訓練する。根拠部に線を引きながら解く演習で、主張・理由・例の関係を崩さずに読み、時間内に処理する読み方を身に付ける。
科目内当該講位置付け	本科目の中核として、試験で得点差が出易い長文処理を扱う回である。短文要旨（05）で作った型を長文に拡張し、換言・骨子化（07-09）で更に安定させる前提になる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 段落構成の把握 ② キーワードの把握 ③ 図表挿入文の読解 ④ スキミング ◎ 300〜500字の読解問題（＋根拠部線引き）を練習
キーワード	段落　キーワード　図表　スキミング　主張　根拠　長文　読解
到達目標	◇ 段落構成を理解し、主張・理由・例の関係を整理できる。 ◇ キーワードを理解し、要点と細部を区別して読むことができる。 ◇ スキミング等の読み方を理解し、制限時間内に解答を完了できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 結論構造（ハンバーガー）　❷ 主張を示す語句　❸ 図表挿入文の読み手順 ❹ スキミングの定義　❺ 接続詞無視の危険

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	07　情報整理と換言
講概要	表や箇条書きによる整理、言い換え（名詞化・動詞化等）、順序の並べ替え、一文要約を扱う。一文要約の演習で、情報を削り過ぎない、細部に寄り過ぎない等の失敗を避け、条件内で要点を言語化する力を育てる。
科目内 当該講 位置付け	長文読解（06）で得た内容を、“まとめる・言い換える“ 力に転換する回である。実務文書（08）は要点整理が必須であり、骨子化（09）に繋ぐための橋渡しになる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 表や箇条書きによる整理 ② 言い換え（名詞化・動詞化等） ③ 情報や記述の順序の並べ替え ④ 一文要約 ◎ 一文要約の問題を練習→相互レビュー
キーワード	情報整理　箇条書き　換言　並べ替え　要約　名詞化　動詞化　レビュー
到達目標	◇ 情報を表・箇条書きで整理する方法を理解し、要点を見える化できる。 ◇ 換言（言い換え）を理解し、同じ意味を別表現で提示できる。 ◇ 一文要約の手順を理解し、制約条件内で簡潔に要約できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 箇条書きでの整理　❷ 言い換え表現の選択　❸ 接続詞・指示語での連結 ❹ 要約の主張サイン　❺ 要約の落とし穴

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	08　実務文書リテラシー
講概要	メールの型、申請・報告の型、指示文書の読解、注意書きの理解を扱い、就職後の実務読解に直結させる。社内通知を読み取って質問を書き出す演習で、読み落しを減らし、確認すべき点を整理する習慣を身に付ける。
科目内 当該講 位置付け	試験対策でありながら、実務でそのまま使う読解技能を育てる回である。敬語（04）、整理・換言（07）を統合し、技術日本語読解（10）に進む前に「業務文書の読み方」を確立する。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① メールの型（件名・宛名・本文） ② 申請・報告の型 ③ 指示文書（メール）の読解 ④ 注意書きの理解 ◎ 社内通知の読み取り＆質問の書き出しの練習
キーワード	件名　宛名　本文　申請　報告　指示文書　注意書き　社内通知
到達目標	◇ メールの構造を理解し、件名・要件・期限を読み落さず把握できる。 ◇ 申請・報告の型を理解し、必要事項を漏れなく記述できる。 ◇ 注意書きの意味を理解し、リスクを避ける行動を選択できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 件名の役割理解　❷ 結論ファースト報告　❸ 至急の実質解釈 ❹ 注意書きの重要性　❺ 署名の機能理解

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	09　構造的把握の基礎
講概要	結論→理由→例の順、段落間の関係、話の骨子メモ（箱書き）、紛らわしい選択肢の捨て方を扱う。骨子メモを作りながら例題を解く演習で、構造を先に把握して時間を節約し、根拠に基づく選択肢排除を練習する。
科目内当該講位置付け	読解技能（06-08）を「骨子化」によって安定させる回である。技術日本語（10）は情報密度が高い文が多いため、先に構造メモの型を身に付けて読み負けない準備をする。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 結論→理由→例の順 ② 段落間の関係 ③ 話の骨子メモ（箱書き） ④ 紛らわしい選択肢の捨て方 ◎ 骨子メモを作りながら例題解答
キーワード	結論　理由　例　段落関係　骨子メモ　箱書き　選択肢　捨て方
到達目標	◇ 結論→理由→例の構造を理解し、文章の骨子メモを作成できる。 ◇ 段落間関係を理解し、論理の流れを追って読み取れる。 ◇ 紛らわしい選択肢の特徴を理解し、根拠に基づいて除外できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ PREP法の誤解修正　❷ 結論接続詞の手掛かり　❸ 骨子メモの実践 ❹ 条件改変選択肢の排除　❺ 骨子先取りでの時短

科目名	就職適性検査対策：言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする言語領域の能力（言葉の意味・関係や話の要旨を的確に捉えて理解できる能力）を高める。
講　名	10　技術日本語の読解
講概要	基本IT用語、簡単な仕様書、手順書・注意事項、表グラフ付き説明文を扱い、IT領域の読解に応用する。短い仕様文の空欄補充と用語確認を通じ、重要語の特定・条件確認・手順の省略禁止等の実務読解の癖を固める。
科目内当該講位置付け	本科目の到達点として、一般的な言語技能をIT文脈に適用する回である。実務文書と骨子化（08-09）を踏まえ、仕様・手順・権限等の語彙を正確に捉えて誤解を防ぐ。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 基本IT用語（保存・更新・権限等） ② 簡単な仕様書の読解 ③ 手順書・注意事項の読解 ④ 表グラフ付き説明文の読解 ◎ 短い仕様文の空欄補充問題＋用語確認
キーワード	IT用語　保存　更新　権限　仕様書　手順書　注意事項　空欄補充
到達目標	◇ 基本IT用語を理解し、仕様文の重要語を特定できる。 ◇ 仕様書・手順書の読み方を理解し、作業手順と注意点を説明できる。 ◇ 図表付き説明文の読み方を理解し、情報を統合して判断できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 保存と更新の使い分け　❷ 仕様書の条件確認　❸ 手順省略の禁止 ❹ 図表先読みの活用　❺ 権限概念の理解

▼ 教育プログラム シラバス――【科目D】就職適性検査対策：非言語領域

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	01　出題の全体像と対策
講概要	割合・表読み・推論等の出題範囲を整理し、時間配分、計算速度の工夫、ミス削減のコツを学ぶ。例題を用いて途中式・概算・検算の使い分けを共有し、以後の単元別学習の土台になる解答戦略を作る。
科目内当該講位置付け	本科目の導入として、非言語を“馴れ”でなく“手順”で解くための前提を揃える回である。計算・図表・確率・論理（02-10）に進む前に、時間とミスの管理観点を固定して得点を安定させる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 出題範囲（割合・表読み・推論等） ② 時間配分の考え方 ③ 計算を速くする工夫 ④ ミスを減らすコツ ◎ 例題５問→解法共有
キーワード	出題範囲　時間配分　概算　計算速度　見直し　推論　割合　戦略
到達目標	◇ 出題範囲を理解し、分野別の解答順と時間配分を説明できる。 ◇ 計算ミスの原因を理解し、検算・概算の観点で誤答を減らせる。 ◇ 練習方法を理解し、弱点分野に応じた学習計画を作成できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 損益算の基本理解　❷ 時間配分の原則　❸ 分数変換による時短 ❹ 暗算偏重の危険　❺ 概算と選択肢活用

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	02　割合・比・速さ
講概要	割合・百分率、比の単純化、速さ、単位変換を扱い、文章題を図で整理する型を学ぶ。基本公式だけでなく、増減率の分母や比の連結の考え方を確認し、計算の誤りを減らす練習を行う。
科目内当該講位置付け	非言語の基礎計算単元として、以後の表・グラフ（03）や方程式（05）にも共通する“割合の感覚”を育てる回である。ここで単位と分母を丁寧に押さえることで、読み違いを減らす。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 割合と百分率 ② 比の単純化 ③ 速さ＝道のり×時間 ④ 単位変換 ◎ 割合・速さの文章題（図で整理）を練習
キーワード	割合　百分率　比　速さ　単位変換　文章題　図解　比例
到達目標	◇ 割合・比・速さの公式を理解し、単位を揃えて計算できる。 ◇ 文章題の情報を理解し、図や表で整理して立式できる。 ◇ 見積りの考え方を理解し、概算で妥当性を確認できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 増加率の分母理解　❷ 比連結の基本手順　❸ 追い掛け問題の差の速さ ❹ ㎞→mの換算　❺ 75%の計算工夫

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	03　表・グラフの解釈
講概要	棒・折れ線・円グラフ、増減と平均、複合表、単位・尺度への注意を扱う。資料読解の演習で、「質問を先に読む」「必要な行列を特定する」等の手順を身に付け、計算以前の読み違いを減らす。
科目内 当該講 位置付け	割合基礎（02）を資料読解に応用する回である。就職試験だけでなく、業務でも表・グラフは頻出であるため、単位・目盛り確認を習慣化し、統計リテラシー（10）に繋げる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 棒グラフ・折れ線グラフ・円グラフ ② 増減と平均 ③ 複合表の読み方 ④ 単位・尺度への注意 ◎ 簡易な資料の読み取り→要点整理を練習
キーワード	棒グラフ　折れ線　円グラフ　平均　増減　複合表　単位　尺度
到達目標	◇ 基本グラフを理解し、増減・平均との差を読み取れる。 ◇ 複合表を理解し、必要な行・列を選んで計算できる。 ◇ 単位・尺度の注意点を理解し、読み違いを避けられる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 折れ線の変化判定　❷ 増減率の分母選択　❸ 複合表の読解手順 ❹ 尺度・単位の見落し　❺ 質問先読みの原則

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	04　場合の数と確率
講概要	並べ方の入口、表での数え方、基本の確率、独立・従属の考え方を扱う。少数値でケース分けして計算する練習を通じ、漏れ・重複を防ぐ整理の型を身に付け、確率の範囲や条件付きの考え方を確認する。
科目内 当該講 位置付け	計算・読解（01-03）と異なり、整理と推論が中心になる回である。論理・集合（07）にも繋がるため、表・樹形図の使い方をここで身に付け、手作業でも確実に数え上げる習慣を作る。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 並べ方の入口 ② 表での数え方 ③ 基本の確率 ④ 独立・従属の考え方 ◎ 少数値でケース分けして計算する練習
キーワード	場合の数　確率　順列　組合せ　ケース分け　表　独立　従属
到達目標	◇ 数え上げの方法を理解し、表や樹形図で整理できる。 ◇ 確率の基本を理解し、場合分けに基づいて計算できる。 ◇ 独立・従属の考え方を理解し、条件付きの問題に適用できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 円順列の通り数　❷ 表で数える利点　❸ 確率の範囲理解 ❹ 独立事象の定義　❺ 順列Ｐの意味理解

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	05　整数と方程式
講概要	四則演算と約分、一次方程式、比を用いた方程式、連立方程式の基礎を扱う。数量関係の立式演習で、条件を式に置き換える手順を確認し、天秤原理や加減法の考え方を使って確実に解く練習を行う。
科目内当該講位置付け	割合・比（02）に強く連動し、文章題を“式にする”技能を確立する回である。以後の図形（06）や最適化（08）でも立式が必要になるため、基礎計算と式変形の精度をここで固める。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 四則演算と約分 ② 一次方程式 ③ 比を用いた方程式 ④ 連立方程式の基礎 ◎ 数量関係の立式＆解法を練習
キーワード	四則演算　約分　一次方程式　連立方程式　立式　比　検算　数量関係
到達目標	◇ 四則演算と約分を理解し、分数を含む計算を正確に行える。 ◇ 一次・連立方程式を理解し、文章題から立式して解ける。 ◇ 比を用いた立式を理解し、数量関係を式で表現できる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 約分の意味理解　❷ 方程式の両辺操作　❸ 比の立式（2xと3x） ❹ 加減法の誤解回避　❺ 差から比を立てる考え方

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	06　図形と空間把握
講概要	角度と三角形、面積・体積、展開図、相似を扱う。方眼紙等を用いて図を描き、可視化して考える練習を通じ、公式の暗記でなく「図形の条件を読み取る」姿勢を身に付け、空間把握のミスを減らす。
科目内当該講位置付け	計算中心の単元から視覚的把握と比の応用に移る回である。方程式（05）と同様、条件を整理して式や比に落す力が必要であり、数列・最適化（08）にも繋がる思考の基礎になる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 角度と三角形 ② 面積・体積の基本形 ③ 展開図のイメージ ④ 相似の考え方 ◎ 図を描いて考える練習（方眼紙使用）
キーワード	角度　三角形　面積　体積　展開図　相似　空間把握　作図
到達目標	◇ 基本図形を理解し、面積・体積を公式で計算できる。 ◇ 展開図を理解し、立体の対応関係を想像できる。 ◇ 相似を理解し、比を使って未知量を求められる。
理解度確認テスト出題観点	❶ 錯角の性質理解　❷ 三角形面積公式　❸ 展開図の反対面関係 ❹ 相似と面積の誤解　❺ 体積の基本式

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	07　論理と集合
講概要	命題と真偽、条件の読み替え、ベン図、表条件の論理を扱う。真偽表・ベン図を用いた演習で、条件を一つづつ整理して矛盾を探す手順を練習し、直感に頼らない論理処理の基礎を固める。
科目内 当該講 位置付け	確率（04）と同様、整理と推論が中心になる回である。アルゴリズム的思考（09）にも直結するため、「条件→分岐→結論」の型をここで作り、以後の応用単元で迷いを減らす。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 命題と真偽 ② 条件の読み替え ③ ベン図による整理 ④ 表条件の論理 ◎ 真偽表・ベン図を用いて考える練習
キーワード	命題　真偽　対偶　ベン図　集合　条件　真偽表　論理
到達目標	◇ 命題を理解し、真偽を条件から判定できる。 ◇ 条件の読み替えを理解し、ベン図で集合関係を整理できる。 ◇ 表条件を理解し、矛盾がない組合せを推論できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 命題の定義理解　❷ 対偶の同値性　❸ 全称命題の反例 ❹ ベン図記入の手順　❺ 表条件の矛盾探索

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	08　最適化と数列
講概要	順序付け、仕事量と時間配分、等差・等比数列、段階的に良案を選ぶ方法を扱う。配分問題を表にして比較する演習で、比較軸を置いて候補を整理し、規則性の把握と最適案選択の型を身に付ける。
科目内 当該講 位置付け	計算（02-05）・論理（07）を踏まえ、複数要素を比較して判断する回である。IT分野の問題解決にも通じる「比較・最適化」の発想を育て、アルゴリズム（09）に繋げる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 順序付けのコツ ② 仕事量と時間配分 ③ 等差数列・等比数列の入口 ④ 段階的に良案を選ぶ方法 ◎ 配分問題を表にして比較する練習
キーワード	最適化　順序づけ　仕事算　等差数列　等比数列　配分　比較　段階選択
到達目標	◇ 順序付けの考え方を理解し、比較基準を整理できる。 ◇ 等差・等比数列を理解し、規則性から次項や和を求められる。 ◇ 最適化の発想を理解し、複数案から妥当な案を選べる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 不等号での順序整理　❷ 仕事算の合算　❸ 等比数列の識別 ❹ 総当りの重複回避　❺ 等比次項の求め方

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	09　アルゴリズム的思考
講概要	手順の分け方、条件分岐、繰り返し、擬似コードの読み方を扱う。手順カードを並べ替える演習で、処理を段階化して説明し、入力から順に追跡するトレースの基本を身に付け、IT適性検査（CAB等）にも繋げる。
科目内 当該講 位置付け	数的処理だけでなく、IT系適性で重視される「手順思考」を扱う回である。論理（07）・最適化（08）で培った条件整理を手順設計に転換し、データ理解（10）に繋げる。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 手順の分け方 ② 条件分岐 ③ 繰り返し ④ 簡単な擬似コードの読み方 ◎ 手順カードを並べ替えて処理を説明する練習
キーワード	手順　条件分岐　繰り返し　擬似コード　トレース　代入　アルゴリズム　説明
到達目標	◇ 手順分解を理解し、処理を段階に分けて説明できる。 ◇ 条件分岐と繰り返しを理解し、処理の流れを追跡できる。 ◇ 擬似コードを理解し、入力に対する出力を推論できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 手順省略の不適切性　❷ 条件分岐の追跡　❸ 繰り返し回数の確認 ❹ 代入記号の意味　❺ トレースの基本

科目名	就職適性検査対策：非言語領域
科目目的	授業内容を理解したり就職試験で求められたりする非言語領域の能力（数的な処理や論理的思考を的確に遂行できる能力）を高める。
講　名	10　統計リテラシーとデータ倫理
講概要	平均・中央値・最頻値、散布図と相関、標本と母集団、データの偏りと公正を扱う。小データを要約表にして解釈する演習で、代表値の使い分けと、相関と因果の区別、偏りが不公正に繋がるリスクを学ぶ。
科目内 当該講 位置付け	本科目のまとめとして、表・グラフ（03）と論理（07）、アルゴリズム（09）の視点をデータ理解に統合する回である。就職後のデータ活用にも直結するため、計算だけでなく倫理の入口まで扱って締める。
講形態	講義（オンデマンド視聴）＋ 演習（ライブ配信：過去問題・模擬試験）＋ 自習（CBT）
講内容	① 平均値・中央値・最頻値 ② 散布図と相関関係の入口 ③ 標本と母集団 ④ データの偏りと公正 ◎ 小データの要約表を作って解釈する練習
キーワード	平均　中央値　最頻値　散布図　相関　標本　母集団　偏り
到達目標	◇ 代表値を理解し、平均・中央値・最頻値を使い分けられる。 ◇ 相関を理解し、散布図から傾向を読み取れる。 ◇ データの偏りを理解し、公正な判断の注意点を説明できる。
理解度 確認テスト 出題観点	❶ 中央値の定義　❷ 相関と因果の区別　❸ 標本の偏り理解 ❹ 偏りが差別に繋がる理由　❺ 偶数個の中央値計算

3.5　IT留学生教育コンテンツ制作

本事業で開発する教育プログラムは、その実装基盤である**オンライン教育システム**（**3.3**）、その目的・ポリシーや４科目40講の教育体系である**カリキュラム**（**3.4.2**）、各講の目標・内容・評価観点等を定めた授業計画としての**シラバス**（**3.4.3**）という３層まで整備された。すなわち、（１）学習を成立させるための環境（基盤）を構築し、（２）そこで学ぶべき領域と順序（体系）を確定し、（３）それに基づいて展開される各講授業の到達目標・内容範囲・評価方法を明文化（設計・計画）することで、教育の再現性と説明可能性を担保できる段階まで到達した。

この３層を前提にし、本節（**3.5**）は、本教育プログラムについて、学習者が実際に学ぶ内容そのもの（**コンテンツ**）に具現化される過程と結果を報告するものである。

カリキュラムとシラバスが示すのは、いかなる教育内容をどの順序で扱い、何を到達点として求め、学習者をいかなる観点で評価するかという枠組である。これに対して**教育コンテンツ**の制作は、その枠組を崩さず、学習者の理解と行動変容が生起するよう、情報の提示方法、学習活動の設計、自己点検の仕組等を**〈教材〉**という具体の形に落し込む作業である。言い換えれば、“設計図”や“計画表”を運用可能な“教育資源”に変換し、授業運用と学修評価が一体として現場で回る状態を作ることが、教育コンテンツ制作の中心的意義である。

本教育コンテンツは、**〈講義映像〉〈演習課題〉〈自習問題（理解度確認テスト）〉**の３要素で構成され、学習者が「理解する」「適用する」「確認する」を１つの講の中で往還できるように設計する。その際、学習者の学習環境や言語的・認知的負荷を踏まえつつ、講単位での標準化、科目間の一貫性、評価基準との整合性を同時に充すことが要件である。

以下に、**3.5.1**で**〈講義映像〉**の制作方針と仕様、**3.5.2**で**〈演習課題〉**の設計方針と具体例、**3.5.3**で**〈自習問題（理解度確認テスト）〉**の作成方針と出題観点について各々詳説する。

3.5.1　講義映像

本教育プログラムに搭載する教育コンテンツのうち**〈講義映像〉**は、カリキュラムおよびシラバスで定めた各講の講内容（①〜④）を、学習者が自律的に理解できる形に再編し、オンライン教育システム上で反復視聴可能な教育資源として提供することを目的にしたものである。それは、単に教員の説明を記録したものでなく、学習者の理解を成立させるための情報設計（概念提示の順序、例示、用語の扱い、視覚提示の配置等）を伴う教材として位置付けられる。

その制作方針は、**調査④**（**2.2**）の結果が示した留学生教育の実態（日本語能力の分布、専門用語理解の困難、理解確認の必要性、視覚的補完の有効性等）を前提にし、講義の情報量や語彙難度を調整した上で、重要概念の取り零しが生じないように“講の核”を明確に提示することである。

構成（統一フォーマット）

講義は、各講の４テーマ（①～④）を〈導入（講の目的・到達イメージの共有）→ 概念提示（用語・背景の説明）→ 適用の視点（場面・例の提示）→ 要点整理（まとめ）〉の流れで構成し、学習者が理解の見通しを持って次の演習・自習に接続できるようにした。

特にN3～N2相当の学習者には抽象語の連続提示が理解を阻碍し易いため、各テーマは〈概念→例→要点〉の順で説明し、同一語を用いた言い換えや短い再提示によって概念の輪郭を安定させた。

また、【科目Ａ・Ｂ】では職場・生活場面の具体性を確保し、【科目Ｃ・Ｄ】では解法の手順や判断ポイントを可視化し、言語負荷と認知負荷の同時上昇を避ける設計にした。

仕様（基本要件）

講義映像の仕様は、次の３点を基本要件にした。

○ 視覚的補完（図表、手順の可視化、画面上のキーワード提示）

○ スモールステップ（説明単位の短分節化と逐次的整理）

○ 理解確認の前提づくり（重要語の定義と使い所の明示）

ファイル形式・点数・時間設計（分割方針）

講義映像のファイル形式は「**mp4**」である。

講義映像の点数は、１講＝１本（計40点）でなく、**１テーマ（＝講内容①②③④）＝１点**である。すなわち、**１講４点、全40講で計160点**の講義映像を制作した。この分割方針は、講義映像１点の時間を短くすることで、学習者の視聴完了と反復学習を成立させるためである。

そのため、講義映像は基本的に**１点５～10分程度**で、１点当りの論点を限定して提示する。MOOC講義の視聴ログを用いた分析では、講義が長尺になるほど視聴継続（エンゲージメント）が低下し易いため、短い単位でのコンテンツ分割が推奨されている★13。特に若年層の場合、YouTube・TikTok等の動画プラットフォームを日常的に利用しているため、動画を“短い単位で消費する”接続環境が一般化している。そのため、教育動画も“長尺を一括で提供する”より“短尺を積み上げる”設計の方が離脱抑制の観点からも合理的である。また、映像ファイル１点のデータ量が大きいと、通信再生時の負荷（読み込み遅延・途中停止等）が増し、学習テンポを阻碍する。そのため、視聴行動の成立と通信負荷の低減（データサイズ縮減）の両立を図るべく、短尺映像を採用した。

★11 Guo（MIT CSAIL / University of Rochester）・Kim（MIT CSAIL）・Rubin（edX）「How Video Production Affects Student Engagement: An Empirical Study of MOOC Videos」2014年（the First ACM（Association for Computing Machinery）Conference on Learning）

講義映像形態の変遷（略史）と本事業制作物の位置付け

講義映像は、ｅラーニングの展開と共にその形態が更新されてきた。その変遷を機能面に限定して最小限に整理した上で、本事業で制作した講義映像の様式を位置付ける。

1970年代頃	授業のテレビジョン放送 放送・収録型の遠隔教育で、教員が教室で講義する様子を撮影・放送する“授業の映像化”が成立（1971年にOpen University放送講義（BBC）が開始）。
1990年代～2000年代前半頃	スライドの普及と収録・編集環境の整備（講義収録配信の拡大） プレゼンテーション資料（スライド）の一般化と収録・編集環境の整備により、講義の収録配信（lecture capture）やスライド中心の講義映像が拡大。
2000年代前半～2008年頃	lecture captureの制度・装置化 動画圧縮技術や配信環境の整備により、大学等で講義を収録して配信する“lecture capture”が制度・装置として普及。
2000年代前半頃	〈スライド“紙芝居”＋音声〉形式の一般化 画面収録（screencast）型の制作ツールが普及し、〈スライド“紙芝居”＋教員ナレーション〉（教員像の非表示）の制作が容易化したことで、教室収録に依存しない“画面中心”講義映像の制作が拡張。
2005年以降 ＆ 2008年頃以降	Web動画視聴環境の一般化 2005年（YouTube開始）以降、Web動画の視聴環境が一般化。 2008年頃以降、（Khan Academyに代表される）〈スライドor板書画面＋音声〉の短尺説明スタイルが拡大。
2010年代前半頃	スタジオ型〈スライド＋教員像〉の標準化と短い動画単位の運用の一般化 2012年頃（MOOC普及期）、オンライン講座の大規模展開に伴い、スタジオ収録や〈スライド＋教員像〉を同時提示する制作形態が標準化。これに伴い、“短い動画単位で学習を進める”運用が一般化。その過程で、教員の収録負担と視認性（見易さ）の最適化が課題化。
	アニメ教員スタイルの拡張 アニメーションによる“説明役”（アニメ教員）を用いた教育コンテンツが普及し、教員の出演負担を抑えつつ視覚提示を制御するスタイルが拡張。
2010年代後半 ＆ 2016年頃以降	ニューラル音声合成の高度化による〈台本→自然音声〉化 2010年代後半、ニューラル音声合成（TTS）が進展し、台本テキストから自然な音声を生成するTTSの品質が向上。 2016年以降、TTSの実用化・高度化により、〈スライド＋機械“読み上げ”〉の制作が加速。
2017年頃以降	AIアバター話者の商用化 生成AI・合成映像技術により、実在人物でないが人間に近い外観の“AIアバター話者”が講義映像に登場するスタイルが商用化・拡大。教員非表示時代を経て、教員の出演負担を抑えながら“話者の存在”を担保するスタイルとして浮上。
2024年頃以降 ＆ 2025年頃以降	表現力・リップシンク・動作の向上 2024年頃以降、顔の表情や口調・抑揚、口形の整合性（リップシンク）を含む表現力が向上し、より自然な話者表現を伴うAIアバター映像が実装段階に移行。 2025年頃以降、AIアバターの全身動作やリップシンク精度が更に向上する局面に進展。

講義映像変遷略史

本事業で制作した講義映像は、上記の展開における「短尺スタイル」と「AIアバター＋リップシンク」を組み合せ、留学生向け教材として可読性・明瞭性・反復視聴性を高める設計にした。具体的には――

○ 各講をテーマ毎に４点の短尺映像に分解し、学習者が“理解の単位”を自覚しながら学習できるようにした。

○ ナレーションは、機械“読み上げ”に留めず、リップシンク適用のAIアバターを用いて表情・口調・抑揚を調整可能な形で提示することで、情報伝達の単調化を回避し、理解の保持を支援するようにした。その際、表情・口調には複数のバリエーションを設定し得るが、本教育コンテンツはN3～N2程度の留学生を主対象にすることから、聴き取り易さと注意喚起を両立するべく、抑揚が大きく要点を明確に示す“予備校講師風”の話法モードを基調にしている。これにより、重要語・重要文の強調、情報の区切り、学習者の注意の向け先を映像内で明示し易くすることを企図した。

制作プロセス

講義映像は、シラバスに基づいて次のようなプロセスで制作した。

① テーマ毎の講義台本（説明順序・例示・用語）の作成

② スライド構成（視覚提示・キーワード）への落し込み

③ 収録・編集（音声・画面提示の整合、冗長部の削減）

④ 最終レビュー（シラバスとの整合、日本語表現の平易化、誤解誘発表現の修正）

特に④ 最終レビューでは、内容の正確性に加え、学習者が後続の演習や講義で何を学べばよいかを講義末尾で見通せることと、自習問題（理解度確認テスト）に対応する要点が講義内で明確に扱われていることを確認した。

＊

以上により、各講の講義映像は、シラバスの講内容（①～④）に対応する学習インプットとして標準化され、演習課題・自習問題と一体になって運用できる教育コンテンツ群として整備された。





講義映像画面例（各画面右端の人物は“AIアバター教員”）

3.5.2　演習課題

本教育コンテンツのうち**〈演習課題〉**は、講義映像で提示した概念・用語・判断観点等を学習者が具体場面に適用することを通じて定着させるための学習活動であり、単なる復習問題でなく“理解の外化（言語化・手順化・説明）”を促す設計要素である。すなわち、講義映像が“理解の入口”であるのに対し、演習課題は“適用と行動の練習”であり、最終的に学修評価基準（スキル項目）で求められる“CanDo”に接続する機能を担う。

制作点数と運用想定

本事業では、**１講１題、全40講で計40題**の演習課題を制作し、講義（オンデマンド視聴）で形成した前提理解を演習（ライブ配信）で実践化する運用を想定した。

課題票・指導票の仕様

各演習課題は、学習者が「何をどの順序でいかなる形で提出すればよいか」を迷わずに遂行できるよう、課題票の仕様を標準化し、学習活動の再現性を確保した。具体的には、**課題票**（学習者用）と**指導票**（教員用）には少くても次の要素が明示される。

○ 形式：　ケース討議・調べ学習・問題演習 等
○ 時間：　授業枠に収る目安時間と配分の考え方
○ 設定：　場面・シナリオ・前提条件・制約条件 等
○ 目的：　当該講で狙う到達を複数の観点で明示
○ 進行手順：　導入→作業→共有→講評のように段階化し、各段階の所要と作業内容を明確化
○ アウトプット様式：　記入欄・発表フォーマット・提出形式・分量 等
○ 教員介入ポイント：　議論が逸れた場合の問い掛け、判断軸の戻し方、観察観点 等
○ 講評・総括観点：　唯一解の提示でなく、価値基準・判断の論点・学びの再確認を整理

設計原則

演習課題の設計では、対象学習者がN3〜N2相当であることを踏まえ、次の３点を共通原則にした。

○ 指示文を短く区切る。
○ 成果物の形（記入欄・提出形式・口頭発表分量等）を先に固定する。
○ グループ活動では役割と進行を先に設定する。

これにより、学習者が何をすればよいかを理解できずに停滞する状況を抑制し、活動の目的が曖昧になって雑談化・形骸化することを避ける。そして、教員介入ポイントを課題票に組み込み、学習者の発言や結論を、講義で扱った判断軸に戻す問い掛けが運用上可能になるようにした。

【科目Ａ・Ｂ】の演習モデル

科目別には、シラバスで定めた演習の性格に合わせ、演習課題の“型”（学習活動のモデル）を整理した。

【科目Ａ】では、職業意識・協働行動の形成を目的にし、IT職場の想定場面を用いた**ケーススタディ**と**グループ討議**を核にして演習を展開する。

そこでは、学習者に（立場・担当が異なる）複数の役割を附与し、品質・納期・顧客価値等が相反し得る条件下で「どう判断し、どう共有し、どう説明するか」を扱う。その際、正解の提示より、判断の根拠が職業的基準（顧客視点・責任・透明性・協働等）に基づいているか、役割差を踏まえた合意形成が出来ているかを学習目標に置く。

【科目Ｂ】では、生活・社会・文化の理解を目的にし、**調べ学習**と**ミニ発表**を核にして演習を展開する。

そこでは、行政・生活実務・文化事象・情報空間リスク等について、一次情報を確認し、要点を整理して相手に伝わる形で提示する手順を踏ませる。その際に重視するのは、知識量の競争でなく、情報源の選択、要点の抽出、説明の順序化等、生活・就労の前提になる実用的な情報処理である。

【科目Ｃ・Ｄ】の演習モデル

【科目Ｃ・Ｄ】では、**就職適性検査対策**として、講義で扱う読解・解法の“型”を演習で実際に適用させる。

そこでは、正答だけを目的にせず、誤りの原因（読み落し・条件整理不足・換言ミス・計算手順の逸脱等）を特定し、自己修正できるようにすることを重視する。その際、演習は講単位で完結させつつ、後続講で扱う論点に自然に接続するよう、扱う素材や問題形式の難度と焦点を段階化する。また、教員向けに、誤答が生じ易い箇所と介入の仕方（どこで止め、何を問い、どの型に戻すか）を整理し、授業運用の再現性を確保する。

運用設計

演習の運用では、演習課題を**「（学習者向け）配付用」（課題票・テンプレート）**と**「（教員向け）指導用」（狙い・進行手順・教員介入ポイント・講評観点）**の２系を整備し、学校間・教員間に差があっても一定の品質で実施できる状態を志向した。これにより、実証講座や横展開における運用負担を低減させるのと共に、講義映像・自習問題（理解度確認テスト）と一体になって学習者の〈理解→適用→確認〉の往還を講単位で成立させることを企図した。

▼ 演習課題（指導票）例

科目	Ａ　IT留学生キャリア教育	講	01　日本のIT人材として	時間	45～90分
形式	IT会社の１日を想定した ケース討議＋共有（自分の役割を短く説明）				
設定	IT現場シミュレーション「トラブル発生！ その時プロはどう動く!?」				
目的	① 役割の理解：　開発・運用・保守の立場の違いと連携を体験する。 ② プロ意識の実践：　顧客視点と納期・品質の板挟みの中で、プロフェッショナルとしての判断力（オーナーシップ）を養成する。 ③ 発信力の向上：　自分の役割と意見を簡潔かつ論理的に伝える力を強化する。				

内容

１　導入・確認（５分）

導入：　今日は皆さんがIT企業の社員になったつもりで、ある緊急事態に対応してもらいます。講義で学んだ「役割」「顧客視点」「責任感」を実際に使ってみましょう。

確認：　３つの職種（開発・運用・保守）と、プロフェッショナルとしてのキーワード（納期厳守、品質、顧客の成功）について軽く振り返る。

２　ケース提示――シナリオ「ECサイトのセール前日」（５分）

次の状況を資料または口頭で説明する。

状況設定
皆さんはECサイト構築プロジェクトのメンバーです。
明朝９時から、顧客にとって年間最大の「大セール」が始まります。

発生した問題
本日17時（定時1時間前）に決済画面で、特定の条件下でエラーが出るバグが見付かりました。
○ 修正には徹夜の作業が必要であるが、復旧できる保証は100%でない。
○ このままリリースすれば、一部の顧客が買えない可能性がある（売上損失）。
○ 復旧を延期すれば、セールの告知が無駄になり、顧客からの信用に関わる。

３　グループ討議（20分）

チーム編成：　１グループ３～４人。次の役割を分担させる。
① 開発担当：　“機能を作る人”。修正して間に合わせたいが、新たなバグも怖い。
② 運用担当：　“守る人”。不安定なシステムをリリースしたくない。安定稼働が第一。
③ 保守担当・リーダー役：　“直す人・全体を見る人”。現状を分析し、現実的な解決策を探る。

討議テーマ：　プロフェッショナルとして明朝９時にどうするか（リリース強行 or 延期 or 機能制限？）。
条件１）自分らの都合（眠い、帰りたい等）でなく「顧客のビジネスの成功」を最優先に考える。
条件２）「指示がないからやりません」はNG。自分事（オーナーシップ）として解決策を出す。

４　発表・共有（15分）

各チームの代表者（または全員）に、次のフォーマットで発表させる。

発表フォーマット
① 私の役割は［ 職種名 ］です。主な仕事は［ システムを～する仕事 ］です。
② 私たちのチームの決断は［ 結論 ］です。
③ 理由は、顧客にとって［ 価値・メリット等 ］が最大になると考えたからです。

教員介入ポイント
「それは顧客にとって安心ですか」（品質）、「約束を守れていますか」（責任）等と問い掛ける。

５　講評・総括（５分）

資料の内容に基づき、次のポイントで総括する。

◇ 正解はないが、姿勢が重要
☞ 技術力だけでは解決できません。チームで報連相を行い、透明性を確保できたかが重要です。

◇ 品質と納期のバランス
☞ バグがあるままで出すのは“プロ失格”ですが、ビジネスチャンス（納期）を逃すのも損失です。そのギリギリの判断でテスト・レビューがいかに重要であったかを再認識しましょう。

◇ 学び続ける意義
☞ 今回の議論で知識不足を感じたら、それが学びのスタートです。技術はドッグイヤーで進むため、常に新しい解決策を学び続けましょう。

以上のように、演習課題は、講義映像で形成した理解を〈適用・言語化・協働〉活動に接続し、学修評価基準に基づく到達を現場運用において成立させるための中核要素として整備した。

上掲の**演習課題（指導票）例**は、その標準化方針（進行手順・アウトプット様式・介入ポイントの明示）が教材形態としてどう具現化されるかを示すものである。

尚、この演習課題の全題は**補章　別掲資料**（**p.178-183**）に収載した。

3.5.3　自習問題

本教育コンテンツのうち**〈自習問題〉（理解度確認テスト）**は、講義映像で提示した概念・用語・判断観点等について、学習者が“理解したつもり”で通過することを防ぎ、講単位で理解の到達度を点検するための教材要素である。講義映像が“理解の入口”、演習課題が“理解の外化（言語化・手順化・説明）”や“適用と行動の練習”であるのに対し、自習問題は、学習者が理解不足の箇所を自覚し、必要に応じて講義映像に戻る往還を成立させる機能を担う。すなわち、自習問題は、評価のためだけでなく学習プロセスを自己調整可能にする“確認の仕組”として位置付ける。

作成点数と運用想定

本教育プログラムでは、各講の理解度を短時間で簡便に点検できるよう、自習問題として１講５問の**理解度確認テスト**を設定した。そのため、**１講５問、全40講で計200問**の自習問題を作成した。全問**４肢択一式**の**CBT**（Computer Based Testing）問題で、講義映像・演習課題で扱った要点を講末に自己点検する運用を想定した。

出題観点

自習問題は、各講シラバスに定めた講内容（①〜④）および到達目標に整合するよう、講単位で出題観点を設定した。理解度確認テスト（自習問題）は、講内容の各テーマ（①〜④）の要点理解が点検されるように構成しつつ、学習者が誤解し易い論点や講内で横断的に用いる判断基準は、空欄補充や正誤判定の形式でも確認できるようにした。これにより、シラバスが示す到達点を、講末で具体的に点検できる状態を担保する。

出題形式

理解度確認テスト（自習問題）では、出題形式を次の３種に限定し、学習者が何をどう理解すべきかを出題のされ方からも捉え易い構ようにした。この３形式は各々、測定し易い能力要素が異なるため、併用することで内容妥当性の欠落（特定形式でしか拾えない理解の偏り）を回避し、誤解の所在を把握し易くする。

空欄補充：　講内容におけるキーセンテンス（理解の要点になる説明文・定義文・規範文等）を提示してその中核を成す概念・用語等を空欄にし、適切な語を選択させる問題である。この形式が測定する中心は、「文脈において概念と語を対応付けられているか」という理解である。単なる用語暗記でなく、キーセンテンスが示す関係（役割・条件・線引き・手順の要点等）を踏まえて語を充当できるかを点検できるため、当該講で扱う核（講義の結論や判断基準）を直接的に測定し易い。また、誤答肢を近接概念や混同し易い用語で構成することで、学習者がどの概念境界で誤解しているかを示し易く、識別力（理解の差を分ける力）を確保し易い利点がある。

事象理解：　「〜は何か」「〜を何と言うか」「〜はどれか」「〜はどの程度か」等の短い問いに対する最も適切な回答を選択させる問題である。この形式が測定する中心は、講で扱った事象に

関する即時的な理解（定義・分類・対応関係の把握）であり、当該講の中核事項を“迷わずに特定できる”水準に到達しているかを点検するのに適している。特に、講の学習成果として最低限に求める“概念の輪郭の把握”を確認する役割を担い、講末点検としての即時性（短時間で到達状況を確認できる）に優れる。設計上、正答が一義に定まる問いを中心にして誤答肢を典型的誤解（類似語、条件の読み落し、範囲の取り違え等）に対応させることで、理解の浅さを可視化し易くする。

正誤判定：　正誤判定は、講内容におけるキーセンテンス（またはそれにに近い文）を提示し、その記述が適切か、あるいは一部に誤りを含むかを判断させる問題である。この形式が測定する中心は、概念・規範・条件の理解を前提にした“記述内容の評価（正しい／誤りを見抜く力）”である。学習者は、単に語を知っているだけでなく、当該講で示された基準・条件・線引きに照して文の妥当性を判定する必要があるため、誤概念の固定化を抑止する点検として機能する。また、正誤判定は、学習者が陥り易い“尤もらしい誤り”（条件の欠落、適用範囲の誤り、例外の無視等）を扱い易く、講の要点を“批判的に読み取る”観点から確認できる利点がある。他方で、曖昧性が混入すると測定誤差が増えるため、設計上は“誤りが生ずる箇所を限定し、判定根拠が講内容に一意に回収できる”記述を基本にする。

以上の通り、空欄補充問題はキーセンテンスの核を再構成できるか、事象理解問題は中核事項を即時に特定できるか、正誤判定問題は基準に照して誤りを識別できるかを各々点検する。この３形式を組み合せることで、講内容・到達目標に対する点検が“語の知識”に偏らず“文脈での理解”“即時の把握”“誤りの識別”という複数の観点で成立するように設定した。

運用上の位置付け

自習（理解度確認テスト）は、講義・演習に続く講末の学習活動で、１講内に〈理解→適用→確認〉の循環を形成する一端になる。解答結果は、学習者にとって理解不足箇所把握の手掛りになり、必要に応じて講義映像の再視聴や、講で扱った判断観点の再整理に戻る契機になる。これにより、自習問題は、単なるテスト問題の集合でなく、学習の質を安定させる運用要素として機能する。

制作プロセス

自習問題の作成には、講末点検としての機能を担保するため、次の手順で問題群を整備した。

① シラバス（講内容・到達目標）に基づく出題観点の確定
② ３形式のいづれかに分類した設問文の作成（確認点の焦点化）
③ 選択肢の設計（講で扱う判断基準に照した識別可能な構成）
④ レビュー（観点との一致、正解の一貫性、誤答肢の妥当性、曖昧表現の除去）
⑤ 最終確認（講義映像・演習課題と整合し、講の核を点検できる状態の確認）

▼ 自習問題（理解度確認テスト）例

◆【空欄補充】

講義A01-1「日本のIT職種と役割」に基づき、「（　　）は、システムの動作状況を常に監視し、データのバックアップやセキュリティ対策等の“日常的な管理”を行う」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

運用（Operations）　　開発（Development）.　　保守（Maintenance）　　営業（Sales）

◆【事象理解】

講義A02-2「報･連･相の型」に基づき、仕事の途中で問題や不明点が生じた時、上司に助言を求めて進め方を確認する行動を何と言うか。

報告　　連絡　　相談　　振り返り

◆【正誤判定】

講義B01-2「人口・高齢化の現状」に基づき、「日本で高齢化が進んでいる主な理由は、生れてくる子供の数が増え過ぎていることである」という文の内容は正しいか、誤っているか。

正しい　　誤っている

以上のように、自習問題（理解度確認テスト）は、１講５問・全40講で計200問を作成し、それらを３種の出題形式によって講単位の理解到達を点検できるようにした。これにより、講義映像・演習課題・自習問題が一体になって〈理解→適用→確認〉の学習循環が成立し、学習者が各講の到達点を自己点検しながら学びを進められる教材構造を確保した。

尚、この自習問題の全問は**補章 別掲資料**（**p.184-197**）に収載した。

＊

本節（**3.5**）で見た「教育コンテンツ制作」では、カリキュラム（**3.4.2**）とシラバス（**3.4.3**）で策定した教育内容・教育目標・評価観点を、学習者が実際に学ぶ教育資源に転換するために、**講義映像・演習課題・自習問題**の３コンテンツを一体として整備した。

講義映像（**3.5.1**）は短尺分割とアバター演出の工夫によって“理解の入口”を形成し、演習課題（**3.5.2**）は課題票・指導票の標準化によって“適用と協働”の学習活動を再現可能にし、自習問題（**3.5.3**）は空欄補充・事象理解・正誤判定の３形式によって講末での理解度を点検できる構造にした。これにより、学習者は１講内で〈理解→適用→確認〉を往還でき、教員は講単位での運用と学修評価を同一設計下で実施できる。つまり、本教育コンテンツは、“体系・計画”としてのカリキュラム・シラバスを、運用可能で検証可能な教材群に具現化し、本教育プログラムの再現性と説明可能性を実装段階まで引き上げたのである。

3.6　IT留学生学修評価基準策定

本事業は、外国人IT人材の「養成」だけでなく、その「円滑な就職」や「(職場）定着」まで視野に入れ、IT専修学校における留学生教育の標準化と再現性の確保を企図するものである。そのため、その教育成果は、「何を教えたか」でなく「留学生が受講後に何が出来るようになったか」という“到達”の形で説明できる枠組が求められる。

前節まで（**3.3**〜**3.5**）で見てきたように、本事業では本年度（令和７年度)、**〈教育指導〉活動**の一環として**教育プログラム**（IT留学生教育プログラム）を開発し、そこでは **オンライン教育システム**（教育基盤）→ **カリキュラム**（教育体系）→ **シラバス**（授業計画）→ **教育コンテンツ**（教材）という、教育を成立させるための設計要素を順に整備した。しかし、これらはあくまで留学生の“学ぶべき内容”と“学習活動の設計”を規定するものでしかなく、その学修成果を共通の尺度で評価・認定するためには別途、“評価の物差し”と“到達の定義”を明文化する必要がある。

そこで、本年度事業では、IT留学生教育プログラム（４科目40講）の受講者の到達度を“教育可能・評価可能なスキル項目”として体系化した**IT留学生学修評価基準**を策定した。

本節（**3.6**）では、その設計方針と運用想定、そしてその具体的内容を報告する。

3.6.1　設計方針

本学修評価基準は、教育プログラムにおける“評価のための附録”でなく、教育の目的・成果を定義する中核装置として位置付けられる。

教育の質を再現可能なものにするためには、学習者に求める到達（学修成果）を先に提示し、その到達を実現するために教育内容・教材・学習活動・評価方法等を整合的に設計することが必要である。すなわち、評価基準は“後から測るためのもの”でなく、教育実践を成立させる設計上の起点であり、“到達目標の集合”としての評価基準が（結果として）人材像（到達した学習者の姿）を規定する。

この考え方は、所謂“逆向き設計”（到達目標→評価→学習活動→教材）や、構成概念（何を習得させたいか）と測定（何で確認するか）を一致させる設計原理と整合する。到達目標が不明確なまま教育を行うと、その内容は属人的になり、評価は印象評価に傾き、学習者は「何が出来ればよいか」を見失い易い。それに対し、到達目標を先に定義すれば、教育内容はそこから演繹され、学習活動は到達を生む活動として説明でき、評価は到達の証拠（説明・判断・実行の成果）を点検する行為として成立する。そのため、本基準は、教育の標準化と説明可能性を担保するための共通言語として設計した。

本学修評価基準の具体的な体系は、大分類（領域）４、中分類10×４、小分類（評価基準=スキル項目）３×40で、**計120のスキル項目**から成る。

その際、大分類・中分類の各類名はカリキュラムの科目名・講名と同一でないが、スキル体系としての概念性（到達領域を示す語）を保持しつつ、教育プログラムとの相関を想起できる程度の近接性を確保した。これは、教育プログラムが“教える単位”（科目・講）であるのに対し、評価基準は“身に付く単位”（スキル項目）であるため、同一名にすると教育単位と到達単位が混同され、到達の定義が曖昧になり易いからである。逆に、名称が乖離し過ぎると、教育内容と評価が分断され、運用上の整合性が崩れる。そこで、名称は工夫しつつ、構造は教育プログラムの内容構成を踏襲するという設計方針を採った。

スキル項目（小分類）の記述は原則的に、“CanDo”型（「〜を理解［把握］し、〜を説明［実践／判断］できる」等）に統一した。これは、学修成果を“知っている”でなく“出来る”として定義し、評価可能性（観察可能な行動や成果物として確認できること）を確保するためである。特に本教育プログラムの場合、留学生の就職移行と職場定着を視野に入れる以上、評価は“知識の再生”だけでなく“場面での説明・判断・実行”に接続していなければならない。そこで、スキル項目は次の観点で設計した。

- ○ 理解（概念・用語・基準の把握）を到達の前提に必ず含める。理解が欠けた実行は偶然の再現に留まり、再現性が担保されないからである。
- ○ 理解に続く到達を「説明」「判断」「実行」のいづれかに明示的に置く。これにより、評価の観点が“暗記”に収束せず、職場・生活・受検等の各場面における運用可能性として定義されるからである。
- ○ 学習者が誤解し易い境界（似た概念の混同、条件の読み落し、線引きの曖昧化等）を意識し、到達が曖昧な“解った気”を許さない粒度で表現する。スキル項目は少数でよいが、到達の核を判別できる表現にする必要がある。

以上のような設計方針により、本学修評価基準は、教育プログラムと密接に相関することが前提になる。すなわち、教育プログラムは、この評価基準で定義された到達目標を実現するための教育実践（内容・順序・学習活動）の体系として位置付けられるため、評価基準と教育プログラムの間に相関が成立するのは当然である。そのため、各講シラバスに記載する〈到達目標〉には、当該講に対応する評価基準（スキル項目）を充当することで統一される。これにより、カリキュラム・シラバス・教材・評価が同一の到達定義を参照し、教育の再現性と説明可能性が体系として担保される。

3.6.2　評価レベルと運用想定

本学修評価基準のスキル項目は計120あり、各項目について到達度を判定するためには**判定尺度（レベル定義）**が必要である。ただし、評価を過度に多段階化すると、運用負荷が増大し、判定の一貫性（評価者間・時点間の整合）が低下し易い。つまり、評価尺度は、“細かさ”より“信頼性”（同じ到達を「同じ到達」として判定できること）と“形成的機能”（学習改善に使えること）が重視されるのである。そのため、本事業では、留学生教育における現場運用を前提にし、成長差を把握できる最小限の粒度として、**全項目共通の３段階レベル**を設定した。

３段階にした理由は――

○ 学習者の到達を「支援が必要な段階」「型に沿えば成立する段階」「状況に応じて自立的に適用できる段階」に整理すると、教育的支援の設計（何を追加すれば一段上がるか）が明確になるからである。

○ 評価者が“どちらかと迷う”局面を減らし、判定の再現性を高めるためである。

○ 学習者が自己評価として扱う場合も、３段階は直観的で理解し易く、到達の見通し（次に何をすればよいか）を持ち易いからである。

つまり、このレベル設計は、測定のためだけでなく、学習を前に進めるための“足場”（スキャフォールド）としての機能を重視したのである。

以上を踏まえ、**レベル定義**は次の通りである。この共通定義に基づき、各スキル項目の到達度を判定する。

Lv.1　要支援（基礎未安定）
当該スキルの概念・手順・注意点の理解が断片的で、説明または実践が指示・例示・支援がないと成立しない。

Lv.2　基本到達（型に沿って実行可能）
概念・手順・注意点を理解し、例・チェックリスト・型に沿えば、説明または実践を概ね正確に行える。

Lv.3　自立実践（状況に応じて適用）
概念・手順・注意点を理解し、状況の違いを踏まえ、説明または実践を自力で安定的に行えて根拠も示せる。

この３段階は、到達の質を“正しさ”だけでなく“安定性”と“適用可能性”で区別する点に特徴がある。**Lv.2**は、教育として最低限の目標を“型に沿えば成立する”段階に置き、学習者の再現性を担保する。**Lv.3**は、就職移行・職場定着を視野に入れ、状況差（条件や相手が変る）に対しても基準を用いて説明・判断・実行できる段階として定義する。これにより、学修評価が“出来た／出来ない”の二値に収束せず、次の支援設計（何を補えばLv.2になるか、何を経験させればLv.3になるか）に接続できる。

また、本評価基準は、“作って終り”でなく、教育プログラムの実施と一体で運用されて初めて価値を持つ。そこで、想定する本評価基準の活用法パターンを、学習者にメリットがある形で以下に整理する。

学習者の自己点検と学習計画（自己調整学習の支援）

各科目・各講の〈到達目標〉がスキル項目として提示されることで、学習者は何が出来ればよいかを事前に把握できる。受講後は、理解度確認テストや演習評価の結果と照合し、未到達項目（Lv.1相当）を自覚し、再視聴・再演習等の学習行動に繋げられる。到達目標を明示すること自体が学習の迷走を抑止し、“努力の方向付け”を可能にする。

教員の形成的評価と個別支援（支援の焦点化）

スキル項目とレベル定義により、教員は学習者の課題を“どの項目がどの段階か”として把握できる。その結果として、補足説明・再課題・学習相談が、一般的助言でなく、スキル項目単位の具体的支援として焦点化される。特に留学生教育では、抽象的な叱責や一般論が学習行動に結び付きにくいため、到達と次の一手をセットで示せる運用が重要になる。

学習成果の可視化（公平性・納得性の確保）

評価がスキル項目とレベル定義に基づくことで、学習者はなぜその判定かを理解し易くなる。これは、評価の透明性を高めて学習者の納得性を担保するだけでなく、異文化環境における不信（恣意的評価への疑念）を抑える効果も持つ。公平性が担保されることは、学習継続と動機付けに直結する。

就職移行支援への接続（説明可能な到達の提示）

評価の結果は、学習者が自分の到達を言語化する材料になる。どの領域で何が出来るかをスキル項目として説明できれば、自己PRや面接での説明が具体化し、就職移行における自己理解と表現が強化される。学修評価は、成績付けに留めず、学習成果を社会接続に翻訳する機能を持つ。

教材・指導改善へのフィードバック（教育の継続的改善）

どの項目でLv.1が滞留し易いかが蓄積されれば、講義映像の情報設計や演習課題の教材設計、理解度確認テストの出題観点を改善できる。すなわち、評価基準は、教育のPDCAを回すための観測装置としても機能する。

以上のように、３段階レベルは、学修成果の判定尺度であるのと共に、学習者の自己調整、教員の支援設計、教育改善の循環を成立させるための運用基盤である。そのため、本事業で企図する標準化と再現性は、シラバスや教材の標準化だけでなく、評価の枠組が運用されて初めて実質化するものである。

3.6.3　IT留学生学修評価基準

以上の設計方針および評価レベル定義を踏まえ、**IT留学生学修評価基準**の具体的内容（領域Ａ～Ｄ）を次頁以降に提示する。その際、各スキル項目は、各講シラバスの到達目標として充当されることを前提にし、理解を基礎に据えつつ、説明・判断・実践という観察可能な形で記述している。

▼ IT留学生学修評価基準――【領域A】職業実践コンピテンシー（ITキャリア基礎）

大分類	中分類	小分類＝評価基準（スキル項目）
A 職業実践コンピテンシー（ITキャリア基盤）	01 職務理解と価値提供	▶ 日本のIT職種の役割差を理解し、自分の担当で求められる作業と責任を説明できる。
		▶ 顧客視点と価値提供の考え方を理解し、要件の背景を質問して提案に反映できる。
		▶ プロとしての姿勢と学び続ける意義を理解し、成長方針を言語化して実行計画に反映できる。
	02 職場規範と情報取扱い	▶ 就業規則と勤怠連絡の基本を理解し、遅刻・欠勤時に必要事項を適切に連絡できる。
		▶ 報・連・相の型を理解し、状況に応じて簡潔かつ正確なメッセージを作成できる。
		▶ 守秘義務とコンプライアンスを理解し、情報管理のルールを守って行動できる。
	03 多文化協働と配慮表現	▶ 文化差（時間感覚・上下関係等）を理解し、誤解が生じ易い点を説明できる。
		▶ 偏見の構造と相互リスペクトを理解し、相手を傷付けない言い方に言い換えられる。
		▶ 共通言語としてのやさしい日本語を理解し、短文化と確認質問で意思疎通を実践できる。
	04 チーム遂行と役割運用	▶ チーム内の役割（リーダー／メンバー）を理解し、自分の役割と期待行動を説明できる。
		▶ 助け合いとレビューの意味を理解し、観点に基づいた確認と指摘を実践できる。
		▶ 小目標の分担と振り返りを理解し、作業計画と改善点をチームで共有できる。
	05 実務コミュニケーション運用	▶ やさしい日本語のコツを理解し、伝わる短文と具体語で依頼・相談できる。
		▶ メール・チャットの基本形式を理解し、件名・要件・期限を明確に記述できる。
		▶ 会議発言とメモ、フィードバックの型を理解し、受け方と伝え方を実践できる。
	06 リスク予防と小さな品質	▶ ミスの種類を理解し、起き易い原因に合せた予防策を説明できる。
		▶ チェックリストとセルフレビューを理解し、作業前後の点検を習慣化できる。
		▶ エスカレーションと情報セキュリティの基本を理解し、異常時に適切に報告できる。
	07 タスク・時間マネジメント	▶ ToDoと優先順位の考え方を理解し、重要度と緊急度で順序を決定できる。
		▶ 見積りとバッファの意味を理解し、根拠ある所要時間を説明して調整できる。
		▶ 割込み対応と締切の扱いを理解し、遅延リスクを早めに共有して約束を守れる。
	08 自律学習と成長習慣	▶ 学びのPDCAを理解し、目標→実行→振り返りを短サイクルで回せる。
		▶ 学習ログの目的を理解し、ノートやツールで学習記録を継続できる。
		▶ 資格学習と学習コミュニティの使い方を理解し、支援を得ながら学びを継続できる。
	09 職業倫理と安全な相談	▶ 仕事の倫理を理解し、ごまかさない判断と行動を具体例で説明できる。
		▶ 権利と義務の入口を理解し、労働時間・休憩の基本を踏まえて行動できる。
		▶ ハラスメントの線引と相談手順を理解し、記録と相談を安全に実践できる。
	10 キャリア意思決定と計画	▶ 強みの棚卸しを理解し、学習・言語・経験を根拠付きで説明できる。
		▶ キャリアパスと目標設定を理解し、短期・中期の行動計画を作成できる。
		▶ 日本・母国・国際の選択肢を理解し、条件比較に基づく意思決定を実践できる。

Lv.1　要 支 援（基礎未安定）　当該スキルの概念・手順・注意点の理解が断片的で、説明または実践が指示・例示・支援がないと成立しない。
Lv.2　基本到達（型に沿って実行可能）　概念・手順・注意点を理解し、例・チェックリスト・型に沿えば、説明または実践を概ね正確に行える。
Lv.3　自立実践（状況に応じて適用）　概念・手順・注意点を理解し、状況の違いを踏まえ、説明または実践を自力で安定的に行えて根拠も示せる。

▼ IT留学生学修評価基準――【領域B】日本社会・文化適応リテラシー

大分類	中分類	小分類＝評価基準（スキル項目）
B 日本社会・文化適応リテラシー	01 社会制度ナビゲーション	▶ 国・都道府県・市区町村の役割を理解し、必要な窓口を選んで説明できる。
		▶ 人口と高齢化の現状を理解し、生活や産業への影響を簡潔に説明できる。
		▶ 働き方の種類を理解し、自分に関係する支援や注意点を選定できる。
	02 生活オペレーション基礎	▶ 住まいとゴミ出しのルールを理解し、地域の手順に基づいて実践できる。
		▶ 医療・保険・マイナンバーの基本を理解し、必要時に手続きを選択できる。
		▶ 銀行・携帯・交通系ICと災害備えを理解し、生活ToDoとして整理できる。
	03 日本型職場文化の理解	▶ 納期と時間管理の重視を理解し、遅延時の相談と再計画を実践できる。
		▶ 報連相と会議の進め方を理解し、必要情報を整理して共有できる。
		▶ 上下関係・敬語・休暇残業の考え方を理解し、誤解を避けて説明できる。
	04 伝統文化の読み解き	▶ 神道・仏教の入口を理解し、行事や施設での基本作法を説明できる。
		▶ 年中行事と礼儀の意味を理解し、生活や職場での配慮として実践できる。
		▶ 地域の祭りと地域差を理解し、自国文化との共通点と相異点を説明できる。
	05 伝統×デジタル活用の理解	▶ 文化財のデジタル保存を理解し、写真・動画・3Dの意義を説明できる。
		▶ 観光×AR/VRの概要を理解し、地域紹介の簡単な企画案を作成できる。
		▶ 配信・オンライン発信の留意点を理解し、権利と配慮を踏まえて実践できる。
	06 情報空間の安全利用	▶ 日本のメディア特性を理解し、目的に合う情報源を選択できる。
		▶ SNSマナーと個人情報保護を理解し、公開範囲と安全行動を実践できる。
		▶ フェイク情報の見分け方を理解し、確認手順と根拠を説明できる。
	07 産業横断ITの理解	▶ 製造・金融・小売でのIT活用を理解し、身近な例で説明できる。
		▶ 働き方とIT（勤怠・テレワーク等）を理解し、利点と注意点を整理できる。
		▶ 観察結果の纏め方を理解し、サービスのIT活用の要点を発表できる。
	08 コンテンツの文化と権利	▶ 漫画・アニメ・ゲームの概要を理解し、制作の流れを説明できる。
		▶ ファン文化とコミュニティの特徴を理解し、礼儀を守って参加できる。
		▶ 海外展開と著作権の基本を理解し、安全な紹介・共有を実践できる。
	09 地域多様性と進路視点	▶ 主要都市と地方の特徴を理解し、生活条件の違いを説明できる。
		▶ 地方の産業・地域文化・方言を理解し、異文化配慮の観点で比較できる。
		▶ 地方×ITの方向性を理解し、地域課題へのIT活用例を提案できる。
	10 社会参画とセーフティネット	▶ 税と社会保険の基本を理解し、最低限の手続きの流れを説明できる。
		▶ 地域活動・ボランティアの意義を理解し、無理がない参加方法を選択できる。
		▶ 相談窓口と災害時行動を理解し、自分の相談先リストを作成できる。

Lv.1　要 支 援（基礎未安定）　当該スキルの概念・手順・注意点の理解が断片的で、説明または実践が指示・例示・支援がないと成立しない。
Lv.2　基本到達（型に沿って実行可能）　概念・手順・注意点を理解し、例・チェックリスト・型に沿えば、説明または実践を概ね正確に行える。
Lv.3　自立実践（状況に応じて適用）　概念・手順・注意点を理解し、状況の違いを踏まえ、説明または実践を自力で安定的に行えて根拠も示せる。

▼ IT留学生学修評価基準――【領域C】言語推論・実務読解スキル

大分類	中分類	小分類＝評価基準（スキル項目）
C 言語推論・実務読解スキル	01 受検戦略（言語領域）の設計	▶ 言語領域の出題範囲と形式を理解し、学習対象の全体像を説明できる。
		▶ 時間配分と解答順を理解し、自分の受検戦略として実行できる。
		▶ ミスを減らす基本動作を理解し、根拠を示して選択肢を判断できる。
	02 語彙関係の推論	▶ 同義語・対義語を理解し、選択肢の意味差を説明できる。
		▶ 包含関係を理解し、上位語・下位語の整合で正解を選択できる。
		▶ 接頭辞・接尾辞の働きを理解し、未知語の意味を推測して説明できる。
	03 文の論理構造の把握	▶ 接続語の機能を理解し、〈因果〉〈対比〉等の関係を特定できる。
		▶ 指示語の参照関係を理解し、文脈に基づいて指示内容を説明できる。
		▶ 空欄補充の考え方を理解し、前後の論理から適切に選択できる。
	04 文法・敬語の実務運用	▶ 助詞の基本機能を理解し、誤用を避けて文を調整できる。
		▶ 助動詞・補助動詞の意味を理解し、文脈に合う語形を選択できる。
		▶ 敬語とビジネス文の型を理解し、場面に合う表現を実践できる。
	05 短文要旨と正誤判断	▶ 主題・述部を理解し、短文の中心命題を抽出できる。
		▶ 事実と意見の区別を理解し、根拠に基づいて正誤を判断できる。
		▶ 要点抽出の観点を理解し、短い要旨として説明できる。
	06 長文読解の手順化	▶ 段落構成を理解し、結論と根拠の位置を説明できる。
		▶ キーワード把握を理解し、話題転換と要点を追跡できる。
		▶ スキミングの方法を理解し、時間内に読解と設問処理を実践できる。
	07 情報整理と換言	▶ 表・箇条書きによる整理を理解し、情報を構造化して示せる。
		▶ 言い換えの技法を理解し、意味を保って簡潔に表現できる。
		▶ 一文要約を理解し、要点を落さず短く纏められる。
	08 実務文書の読解・作成	▶ メールの型を理解し、件名・宛名・本文を適切に作成できる。
		▶ 申請・報告の型を理解し、必要情報を漏れなく整理できる。
		▶ 注意書きの読み方を理解し、疑問点を質問として列挙できる。
	09 構造化メモと選択肢処理	▶〈結論→理由→例〉の型を理解し、文章の骨子をメモ化できる。
		▶ 段落間関係を理解し、論旨の繋がりを説明できる。
		▶ 紛らわしい選択肢の特徴を理解し、捨て肢の根拠を説明できる。
	10 技術日本語の読解	▶ 基本IT用語を理解し、仕様・手順での用いられ方を説明できる。
		▶ 簡単な仕様書を理解し、要件と制約を抽出して整理できる。
		▶ 手順書・注意事項を理解し、誤解なく実務行動に結び付けられる。

Lv.1　要 支 援（基礎未安定）　当該スキルの概念・手順・注意点の理解が断片的で、説明または実践が指示・例示・支援がないと成立しない。
Lv.2　基本到達（型に沿って実行可能）　概念・手順・注意点を理解し、例・チェックリスト・型に沿えば、説明または実践を概ね正確に行える。
Lv.3　自立実践（状況に応じて適用）　概念・手順・注意点を理解し、状況の違いを踏まえ、説明または実践を自力で安定的に行えて根拠も示せる。

▼ IT留学生学修評価基準――【領域D】数理・論理推論スキル

大分類	中分類	小分類＝評価基準（スキル項目）
D 数理・論理推論スキル	01 受検戦略（非言語領域）の設計	▶ 非言語領域の出題範囲を理解し、頻出テーマと注意点を説明できる。
		▶ 時間配分と解答順を理解し、得点源から解く運用を実践できる。
		▶ 計算速度とミス削減の基本を理解し、検算を含む手順で実行できる。
	02 割合・比・速度のモデル化	▶ 割合と百分率を理解し、基準量を確認して正しく計算できる。
		▶ 比の扱いを理解し、簡約・配分・比較を手順に基づいて実践できる。
		▶〈速さ＝距離÷時間〉を理解し、単位変換を含めて文章題を解答できる。
	03 図表読解と数値解釈	▶ 棒・折れ線・円グラフを理解し、目的に合う読み方で要点を抽出できる。
		▶ 増減率と平均を理解し、分母の取り方を踏まえて正しく計算できる。
		▶ 複合表と単位・尺度を理解し、見落しや誤読の罠を避けて判断できる。
	04 場合分けと確率	▶ 並べ方の入口を理解し、重複と抜けを避ける列挙を実践できる。
		▶ 確率の基本を理解し、全事象と有利事象を対応付けて計算できる。
		▶ 独立・従属を理解し、事象の関係に応じて式を選んで説明できる。
	05 計算基礎と方程式化	▶ 四則演算と約分を理解し、途中式を整えて正確に計算できる。
		▶ 一次方程式を理解し、未知数設定から解までを手順として実行できる。
		▶ 連立方程式と比の立式を理解し、文章題を式に変換して説明できる。
	06 図形・空間の可視化	▶ 角度と三角形の性質を理解し、必要な角度関係を説明できる。
		▶ 面積・体積の基本形を理解し、分割合成で求める手順を実践できる。
		▶ 展開図と相似を理解し、対応関係と比を用いて量を算出できる。
	07 命題・集合の論理	▶ 命題と真偽を理解し、条件に対する結論の妥当性を判断できる。
		▶ 条件の読み換えを理解し、対偶等で整理して矛盾を検出できる。
		▶ ベン図と表条件を理解し、集合の関係を可視化して結論を導出できる。
	08 最適化と数列の基礎	▶ 順序付けのコツを理解し、評価軸に基づいて候補を比較できる。
		▶ 仕事量と時間配分を理解し、制約条件下で配分を計画できる。
		▶ 等差・等比数列を理解し、基本性質を用いて一般項や和を扱える。
	09 アルゴリズム的思考	▶ 手順の分け方を理解し、処理を段階化して説明できる。
		▶ 条件分岐と繰り返しを理解し、トレースで状態変化を追跡できる。
		▶ 擬似コードの読み方を理解し、誤りや見落しを検出して修正できる。
	10 統計リテラシーと倫理	▶ 平均・中央値・最頻値を理解し、目的に合う代表値を選んで説明できる。
		▶ 散布図と相関を理解し、因果と混同せずに傾向を解釈できる。
		▶ 標本と母集団、偏りと公正を理解し、データの扱い方針を提案できる。

Lv.1　要 支 援（基礎未安定）　当該スキルの概念・手順・注意点の理解が断片的で、説明または実践が指示・例示・支援がないと成立しない。
Lv.2　基本到達（型に沿って実行可能）　概念・手順・注意点を理解し、例・チェックリスト・型に沿えば、説明または実践を概ね正確に行える。
Lv.3　自立実践（状況に応じて適用）　概念・手順・注意点を理解し、状況の違いを踏まえ、説明または実践を自力で安定的に行えて根拠も示せる。

以上の通り、領域Ａ～Ｄの枠組に基づき、IT留学生教育プログラムの到達目標を計120のスキル項目として体系化した**IT留学生学修評価基準**を俯瞰した。

本学修評価基準は、各講シラバスの〈到達目標〉に直結し、講義・演習・自習という学習活動の設計と評価の観点を同一の言語で接続するための共通基盤である。これにより、学習者には「何が出来れば到達か」が明確になり、教員には形成的評価（改善のための評価）と総括的評価（到達判定）を一貫した尺度で運用できる条件が整備された。そして、その評価結果を蓄積することで、教材・指導・評価の改善が可能になり、教育の再現性と説明可能性を継続的に高める循環を成立させ得る。

本学修評価基準は今後、実証講座等の運用を通じて判定の一貫性と実用性を点検しつつ、必要に応じて表現の精緻化や運用手順の整備を施し、標準モデルとしての完成度を高めてゆく。

＊

本章では、本事業が企図する“標準化されたIT留学生教育”の実装に向け、教育を成立させる諸要素を、基盤から評価まで一貫した設計体系として整備した。

すなわち、広報媒体の拡張による入口の整備（**3.2**）を皮切にし、オンライン教育システムという実装基盤（**3.3**）を構築し、その上に教育体系としてのカリキュラム（**3.4.2**）と授業計画としてのシラバス（**3.4.3**）を確定した。そして、講義映像・演習課題・自習問題から成る教育コンテンツ（**3.5**）を整備し、学習者が〈理解→適用→確認〉を講単位で往還できる学習構造を教材として具現化した。さらに、学習成果を“到達”として定義し、教育実践と評価を同一の枠組で連結する学修評価基準（**3.6**）を策定することで、教育の再現性と説明可能性を運用段階まで引き上げた。

その際、開発した教育体系・教材・評価基準の有効性は、設計の整合性だけで自動的に保証されるものでなく、実際の学習者集団に適用し、学習ログ・確認テスト結果・演習成果等の証拠に基づいて検証されるべきものである。したがって、次段階では、実証講座を通じて教育効果（到達度の伸長、誤解の解消、学習行動の変容等）を測定し、学修評価基準に基づく判定の妥当性と運用可能性を点検する。その検証結果を、教材・指導・評価の改善にフィードバックすることで、本事業が目指す標準モデルを、形式の整備に留めず、実効性を伴う教育実装として確立してゆく。

第４章

催 行 報 告

4.1　催行概要

本事業は令和６～９年度の４箇年度に亘って取り組むものであるが、全箇年度共通して〈調査〉〈開発〉〈催行〉の３部構成で推進する。本年度（令和７年度）の〈調査〉は**第２章**、〈開発〉は**第３章**で詳説した。本章（**第４章**）では**〈催行〉**について、その実施内容を報告する。

本年度事業の〈催行〉では、**活動Ⅰ（(入学前の）広報募集）**の一環として**オンラインオープンキャンパス**、**活動Ⅱ（(在学中の）教育指導）**の一環として**教育プログラム実証講座**を実施した。

オンラインオープンキャンパスは、活動Ⅰの中核的施策で、在アジア（中国・韓国・ベトナム）日本留学希望者を対象にした日本-現地間オンライン交流会（説明会）である。

本年度は、前年度（令和６年度）の韓国・ベトナムに中国も加え、３箇国を対象にして各国１回（計３回)、開催した。開催時期は令和７年10月中旬～11月初旬、開催時間は各国１～２時間（通訳の有無で変動あり)、現地参加者は計120人以上（中国 約50人・韓国 約30人・ベトナム 約40人＋各国保護者・教職員数人）であった。

オンラインオープンキャンパスは、在アジアの日本留学希望者に対して学校理解と進学意思形成の機会を提供するものであり、広報媒体の拡張と連動して“来日前の接点”を具体の交流として実装する役割を担った。

特に本年度は中国開催を加えたことで、対象国の範囲を拡張し、国別の反応差や関心の偏りを把握し得る構造を整えた点に特徴がある。

教育プログラム実証講座は、活動Ⅱの検証施策で、IT専修学校在籍アジア留学生を対象にしたプロトタイププログラムの効果測定（実証実験）である。

実施時期は令和８年１月中旬～同月末、実施内容はオリエンテーション＋実証用プログラム運用＋事前・事後効果測定テスト、受講者は当校在籍留学生32人であった。

実証講座は、開発成果（カリキュラム・シラバス・コンテンツ・評価基準）を学習者集団に対する運用に接続し、到達度の変化を測定可能な形で捉える検証施策である。これにより、〈開発〉で整備した設計要素が実際の学習環境・時間配分・受講者属性の条件下でどう機能するかを確認し、次年度以降の改善に回収できる基盤が整った。

このように、〈催行〉は、〈調査〉や〈開発〉が机上の分析・設計に留まらず、現実の空間・時間の制約下で人を集め、運用し、反応と成果を得るという“実装としての教育活動”を含むことを示す。この実装が、企画の実行可能性（運営手順・役割分担・連携体制・当日運用）を可視化し、成果を再現可能な形で説明するために不可欠である。

また、対外的には、事業成果が単に“資料として存在する”だけでなく、対象者との接触や働き掛けとして具現化されていることを示し、事業の実効性と説明責任を補強する。他方で、対内的には、設計と運用の間に生ずる齟齬や追加要件を早期に発見し、次の（教材・指導手順・評価運用等の）改良に反映する契機となる。

かくして、本年度事業の〈催行〉は、“入口”（募集）と“出口”（教育効果の検証）を実施行為として押さえ、〈調査→開発→運用→検証〉という事業の循環を現場レベルで成立させた点に意義がある。

4.2　オンラインオープンキャンパス

オンラインオープンキャンパスは、従来のオンサイト（来校型）オープンキャンパスに対し、自国（自宅）にいて移動の制約がなく気軽に、進学希望先の学校説明会・留学相談会等に参加できるもので、留学生募集にこそ有用な手法である。コロナ禍の影響で来校型オープンキャンパスを縮小・中止せざるを得ない教育機関が多かった中、国内でオンラインオープンキャンパスを逸早く取り入れたのが専修学校で、その開催実績には一日の長がある。

4.2.1　催行概要

本事業で企画・催行するオンラインオープンキャンパスは、目的意識のある参加者の確保をより確実にするべく、**現地の大学・日本語学校等との提携によって対象者を予め囲い込み、そこに参加を促す**仕方を主な募集手法にした。

そして、その内容は全般的に、ウェブサイトやパンフレットと同様、単なる自校紹介でなく、**日本の魅力や日本で学ぶことの意義を理解させることを通じて日本への留学・就職を促す**啓発的アプローチによるものにした。具体的には、**専修学校が日本社会を支える重要な人材を送り出す教育機関であり、卒業生は職場の専門スキル修得者として期待される**ことを明示することで、彼らが学びの中で就職を意識できるような内容にした。

その上で、本年度事業では、**ベトナム・韓国・中国**の３国を対象にして令和７年10月中旬～11月初旬、計３回のオンラインオープンキャンパスを次の日時で開催した。

①【ベトナム】令和７年10月19日（日）10:00～12:00	@VJCCセンター	男女41人参加
②【韓　国】令和７年10月22日（水）18:00～19:15	@NHK語學院	男女29人参加
③【中　国】令和７年11月２日（日） 14:00～16:30	@福州経貿会展センター	男女49人参加

※ 上記参加者数はいづれも日本留学希望者（高校生・大学生・社会人等）の数で、この他に各回、保護者や教職員も10人弱参加した。

また、上記①～③のいづれについても、オンラインオープンキャンパス開催に先立ち、事業推進委員会の委員が視察・調整のために各国に赴き、連携先の確保、現地コーディネーターとの打合せ、実施環境の確認等、入念な準備を行った。そのため、参加者の募集や当日の運用も円滑に実行でき、質・密度が共に高く有意義で好評のオンラインオープンキャンパスを催行できたと言える。

各回の催行内容や参加者の反応等について、次節以降で詳説する。

4.2.2　催行内容

本年度事業で令和７年10月中旬～11月初旬、在アジア（中国・韓国・ベトナム）日本留学希望者（高校生・大学生・社会人等）を対象にして計３回催行した**オンラインオープンキャンパスの内容**は次の通りである。

▼ オンラインオープンキャンパス催行内容（3回）

国	ベトナム	韓　国	中　国
日時	令和７年10月19日（日） UTC+7　10:00～12:00	令和７年10月22日（水） 18:00～19:15	令和７年11月２日（日） UTC+8　14:00～16:30
現地会場	ハノイ VJCCセンター（貿易大学内）	ソウル NHK語學院	福　州 福州経貿会展センター
現地運営	NKDV	NHK語學院 （李委員・宋委員等）	福建留日分会・福州藝航教育グループ 謝オブザーバ
現地参加者	現地日本語学校・高校等 在校生＆保護者 40人以上 （アンケート回答 41人）	現地日本語学院・大学等 在校生＆保護者 30人以上 （アンケート回答 29人）	現地高校・大学等 在校生＆保護者 50人以上 （アンケート回答 49人）
日本出席者	寺脇委員長 山上委員 木村委員 古川委員 徳安委員 菊池オブザーバ フィン先輩 事務局	寺脇委員長 山上委員 木村委員 古川委員 ク先輩 チョン先輩 事務局	寺脇委員長 山上委員 木村委員 古川委員 何委員 劉先輩 黄先輩 事務局
内容	① 開会宣言（山上委員） ② 実施委員長挨拶（寺脇委員長） ③ 日本のイメージ・IT人材・就職事情・留学生活・学校紹介（木村委員） ④ 日本の企業における外国人材採用の実態（古川委員） ⑤ 先輩メッセージ：学校生活・アルバイト・課外活動・就職活動等 （10/19 フィン先輩、10/22 ク先輩・チョン先輩、11/02 劉先輩・黄先輩） ⑥ 質疑応答（先輩・木村委員・古川委員等） ⑦ 閉会宣言（山上委員） ⑧ アンケート回答		

各回（各国）催行の所見と風景写真を開催日順に次頁以降に示す。

ベトナム開催（令和７年10月19日）

ベトナム回は、ハノイのVJCCセンター（貿易大学内）を会場にし、現地日本語学校・高校等の在校生および保護者40人以上の参加を得て催行した。当校からの説明に加え、IT企業の採用実態（外国人材採用の現況）に関する講演、卒業生による先輩メッセージを組み合せ、日本で学ぶことと働くことを一続きの見通しとして提示できた点が特徴である。また、参加者の日本語能力に幅があることから、通訳を置いて進行し、説明の要点を整理しながら質疑応答に接続することで、理解の取り零しを抑える運用にした。







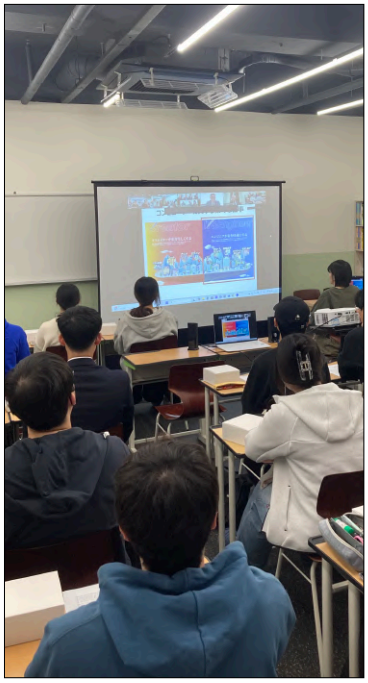



オンラインオープンキャンパス【ベトナム】催行風景

韓国開催（令和７年10月22日）

韓国回は、ソウルのNHK語學院を会場にし、現地日本語学院・大学等の在校生および保護者30人以上の参加を得て催行した。通訳を置かずに進行できたことから、限られた時間内で、IT専修学校と留学生活の全体像に加え、企業の視点での外国人材採用の実態をコンパクトに提示できた。また、当学園在校生による先輩メッセージを通じて学校生活・アルバイト・課外活動・就職活動等の具体的な経験知が共有され、質疑応答では参加者の関心（進学準備・学び方・就職見通し等）を把握する機会になった。



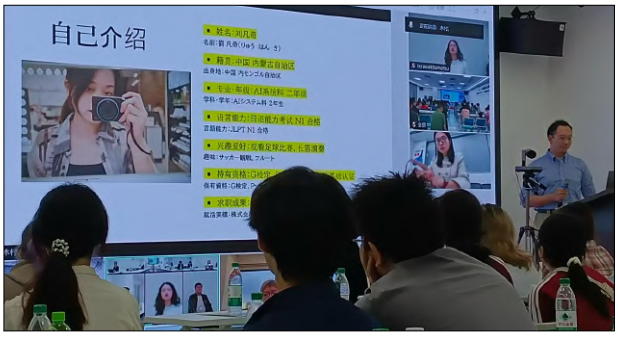


オンラインオープンキャンパス【韓国】催行風景

中国開催（令和７年11月２日）

中国回は、福建留日分会および福州藝航教育グループの協力の下、福州経貿会展センターを会場にし、現地高校生・大学生等の在校生および保護者50人以上の参加を得て催行した。本年度は開催国に中国を新たに加えたことで、広報募集の対象地域の拡張と、現地ニーズの把握を同時に図れた。参加者の日本語能力の幅を見込んで通訳を介して進行し、IT専修学校・就職事情・外国人材採用の実態を段階的に提示した上で、当校在校生による先輩メッセージと質疑応答を通じ、留学後の学修と就職を具体的に思い描ける構成にした。尚、参加者の日本語能力は見込みに反して全般的に高く、質疑応答では通訳を要さずに自ら日本語で質問を寄せてくる学生が多かった。









オンラインオープンキャンパス【中国】催行風景

ここまで、**4.2.1**で本年度の催行の枠組と条件を整理し、**4.2.2**で３国（中国・韓国・ベトナム）各回の催行内容を所見と写真で具体的に記述した。これにより、本年度のオンラインオープンキャンパスが、広報媒体上の情報提供を“対話・質疑”を伴う交流に転換し、留学意思形成に資する機会として機能したことを確認できる。

ただし、そこで把握できるのは主に運用上の所見と当日の反応であり、参加者の属性・理解度・関心領域・満足度・改善要望等を同一の尺度で横断的に把握するのには限界がある。

そのため、次節（**4.2.3**）では、各回で実施したアンケート結果を提示し、参加者の反応を定量的・定性的データとして整理することで、上記所見を裏付けるのと共に、次年度の広報募集設計および催行内容改善に資する示唆を抽出する。

4.2.3　参加アンケート

本年度事業で催行したオンラインオープンキャンパス（以下「OOC」）では各回の閉会時、**参加アンケート**を実施した。

本アンケートは、**4.2.1**～**4.2.2**で既に見た各回の催行内容（説明・質疑・交流等）の実施状況を“参加者の受け止め方”（理解・有用性・満足度・意欲変化等）として定量的に把握し、活動Ⅰ（（入学前の）広報募集）としての施策効果を検証するのと共に、次年度以降の改善（内容構成・時間配分・話題設計・支援体制の調整等）に資する基礎資料にすることを目的とする。

その際、開催国別に会場の条件や通訳の有無が異なる場合も、成果の比較可能性を担保するべく、設問の構成と選択肢の枠組は３回共通にし、同一尺度での集計が可能になるように統一している。

本年度のアンケート回収数は**計119件**であり、各回の回収数は次の通りである。

①**【ベトナム】**令和７年10月19日（日）　**41件**

②**【韓　国】**令和７年10月22日（水）　**29件**

③**【中　国】**令和７年11月02日（日）　**49件**

アンケートの設問は、回答者属性（学年・性別）を把握した上で、**「本日のOOCについて」**の６設問で構成する。回答負担を過度に増やさずに態度の方向性を把握できるよう、原則として**４件法（＋無回答）**を採用した上で、問５だけ複数選択（３つ選択）にし、参加者が価値を感じた話題領域を抽出できるようにした。

設問項目は次の通りである。

〔回答者属性〕

学年（高校１～３年生／大学１～４年生／社会人／無回答）

性別（男／女／無回答）

〔本日のOOCについて〕

問１　OOC内容の理解度

問２　将来の進路を考える際のOOCの有用性

問３　OOC実施環境（設備・現場支援・時間等）の満足度

問４　OOC参加による日本留学・就職意欲の向上度

問５　「面白い・興味深い・勉強になった」と感じた話題（３つ選択）
（実施委員長の話／日本企業の話／日本での就職／日本への留学／日本での生活／日本語の学習／先輩の話／質疑応答／その他／特になし）

問６　今後の同種イベントへの参加意向

この設問項目を書式にした**質問票**を次頁に示す。尚、この質問票は、ベトナム回分と中国回分には当該国語の対訳を附した。

▼ オンラインオープンキャンパス参加アンケート：質問票

文部科学省　一人ひとりに、未来への約束。日本電子専門学校

オンラインオープンキャンパス
参加アンケート

2025年10月実施

本日のオンラインオープンキャンパス（Online Open Campus、以下「OOC」）や日本への就職・留学に関する以下の各質問について、あてはまる選択肢を○で囲んでください。

学年	高１　高２　高３　大１ 大２　大３　大４　社会人	性別	男　・　女	氏名	

1　本日のOOCについて

1.1　本日のOOCの内容は理解できましたか。［1つ選択］

① よく理解できた　② 少し理解できた　③ あまり理解できなかった　④ 全く理解できなかった

1.2　将来の進路を考える際、本日のOOCの内容は役に立ちそうですか。［1つ選択］

① 非常に役に立つ　② 少し役に立つ　③ あまり役に立たない　④ 全く役に立たない

1.3　本日のOOCの実施環境（設備・現場支援・時間等）はいかがでしたか。［1つ選択］

① よかった　② どちらかと言えばよかった　③ 少し問題があった　④ 大いに問題があった

1.4　本日のOOCに参加したことで、日本への留学・就職の意欲は高まりましたか。［1つ選択］

① 大いに高まった　② 少し高まった　③ あまり高まらなかった　④ 全く高まらなかった

1.5　本日のOOCで「面白い！　興味深い！」「勉強になった！」と感じたテーマはどれですか。［3つ選択］

① 実施委員長の話　② 日本企業の話　③ 日本での就職　④ 日本への留学　⑤ 日本での生活
⑥ 日本語の学習　⑦ 先輩（留学生）の話　⑧ 質疑応答　⑨ その他（　　）
⑩ 特にない

1.6　今後もこのような交流イベントがあれば、また参加したいと思いますか。［1つ選択］

① ぜひ参加したい　② 都合がよければ参加したい　③ あまり参加したくない　④ 全く参加したくない

▼ オンラインオープンキャンパス参加アンケート：回答集計結果

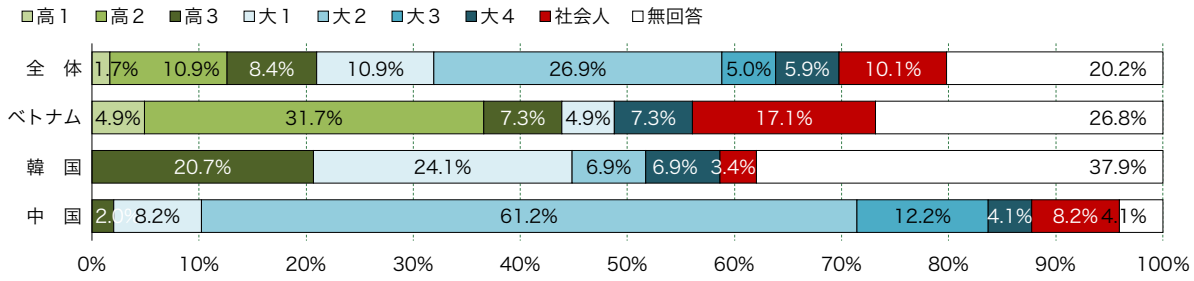
【回答者】在アジア日本留学希望者119人

☞ ① ベトナム（10/19）41人、② 韓国（10/22）29人、③ 中国（11/02）49人

属性　学年［1つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① 高校１年生	2	1.7	2	4.9	0	0.0	0	0.0
② 高校２年生	13	10.9	13	31.7	0	0.0	0	0.0
③ 高校３年生	10	8.4	3	7.3	6	20.7	1	2.0
④ 大学１年生	13	10.9	2	4.9	7	24.1	4	8.2
⑤ 大学２年生	32	26.9	0	0.0	2	6.9	30	61.2
⑥ 大学３年生	6	5.0	0	0.0	0	0.0	6	12.2
⑦ 大学４年生	7	5.9	3	7.3	2	6.9	2	4.1
⑧ 社　会　人	12	10.1	7	17.1	1	3.4	4	8.2
(無回答)	24	20.2	11	26.8	11	37.9	2	4.1

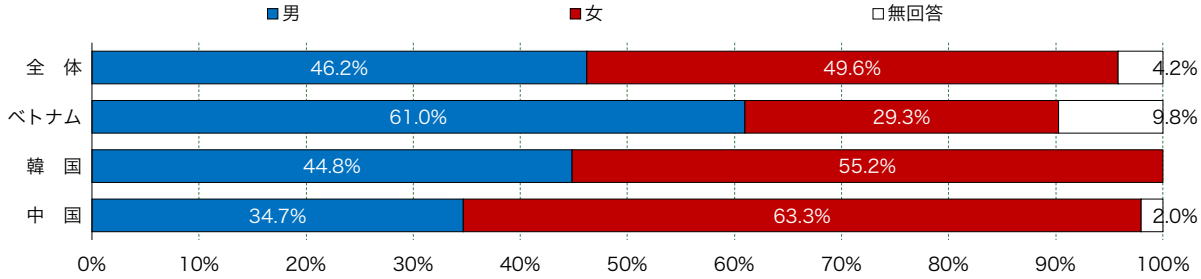
(N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、SA)



属性　性別［1つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① 男性	55	46.2	25	61.0	13	44.8	17	34.7
② 女性	59	49.6	12	29.3	16	55.2	31	63.3
(無回答)	5	4.2	4	9.8	0	0.0	1	2.0

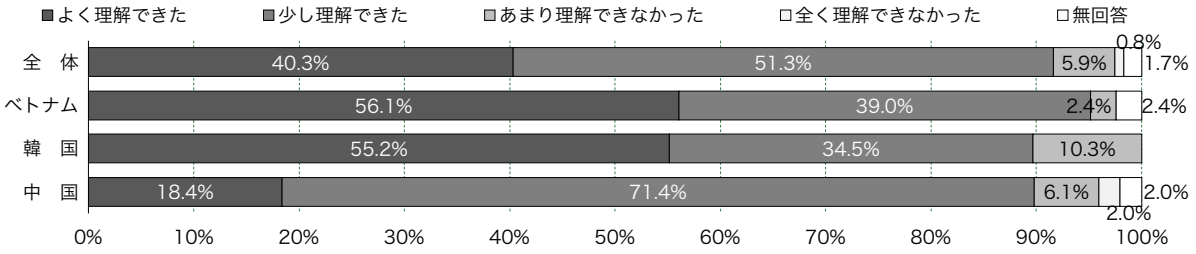
(N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、SA)



問１　本日のOOCの内容は理解できましたか。［１つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① よく理解できた	48	40.3	23	56.1	16	55.2	9	18.4
② 少し理解できた	61	51.3	16	39.0	10	34.5	35	71.4
③ あまり理解できなかった	7	5.9	1	2.4	3	10.3	3	6.1
④ 全く理解できなかった	1	0.8	0	0.0	0	0.0	1	2.0
（無回答）	2	1.7	1	2.4	0	0.0	1	2.0

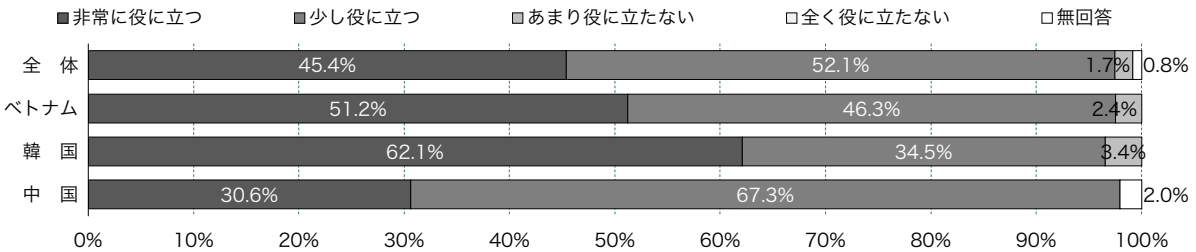
（N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、SA）



問２　将来の進路を考える際、本日のOOCの内容は役に立ちそうですか。［１つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① 非常に役に立つ	54	45.4	21	51.2	18	62.1	15	30.6
② 少し役に立つ	62	52.1	19	46.3	10	34.5	33	67.3
③ あまり役に立たない	2	1.7	1	2.4	1	3.4	0	0.0
④ 全く役に立たない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
（無回答）	1	0.8	0	0.0	0	0.0	1	2.0

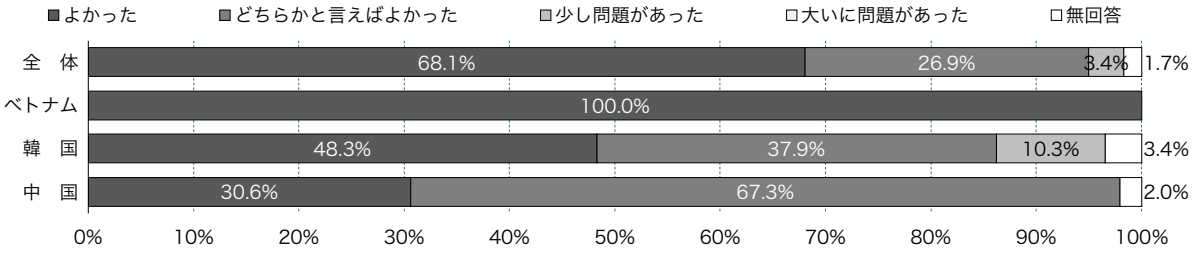
（N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、SA）



問3　本日のOOCの実施環境（設備・現場支援・時間等）はいかがでしたか。［1つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① よかった	81	68.1	41	100.0	14	48.3	26	53.1
② どちらかと言えばよかった	32	26.9	0	0.0	11	37.9	21	42.9
③ 少し問題があった	4	3.4	0	0.0	3	10.3	1	2.0
④ 大いに問題があった	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
（無回答）	2	1.7	0	0.0	1	3.4	1	2.0

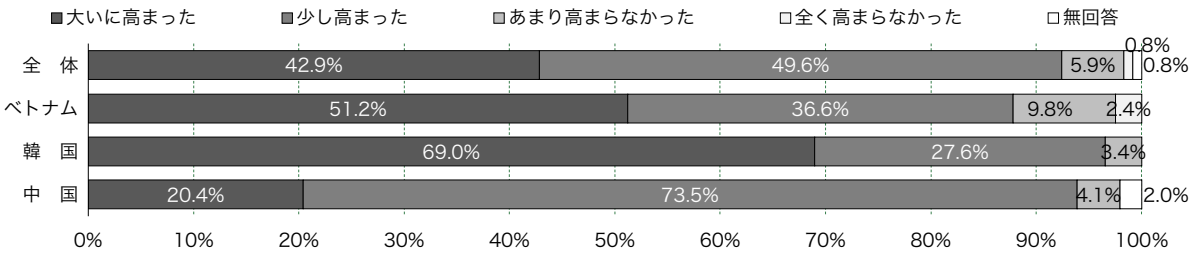
（N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、SA）



問4　本日のOOCに参加したことで、日本への留学・就職の意欲は高まりましたか。［1つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① 大いに高まった	51	42.9	21	51.2	20	69.0	10	20.4
② 少し高まった	59	49.6	15	36.6	8	27.6	36	73.5
③ あまり高まらなかった	7	5.9	4	9.8	1	3.4	2	4.1
④ 全く高まらなかった	1	0.8	1	2.4	0	0.0	0	0.0
（無回答）	1	0.8	0	0.0	0	0.0	1	2.0

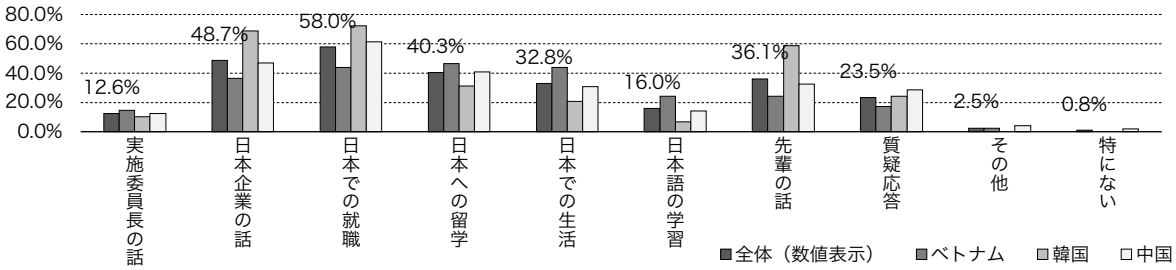
（N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、SA）



問５　本日のOOCで「面白い！ 興味深い！」「勉強になった！」と感じたテーマはどれですか。［３つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① 実施委員長の話	15	12.6	6	14.6	3	10.3	6	12.2
② 日本企業の話	58	48.7	15	36.6	20	69.0	23	46.9
③ 日本での就職	69	58.0	18	43.9	21	72.4	30	61.2
④ 日本への留学	48	40.3	19	46.3	9	31.0	20	40.8
⑤ 日本での生活	39	32.8	18	43.9	6	20.7	15	30.6
⑥ 日本語の学習	19	16.0	10	24.4	2	6.9	7	14.3
⑦ 先輩（留学生）の話	43	36.1	10	24.4	17	58.6	16	32.7
⑧ 質疑応答	28	23.5	7	17.1	7	24.1	14	28.6
⑨ その他	3	2.5	1	2.4	0	0.0	2	4.1
⑩ 特にない	1	0.8	0	0.0	0	0.0	1	2.0

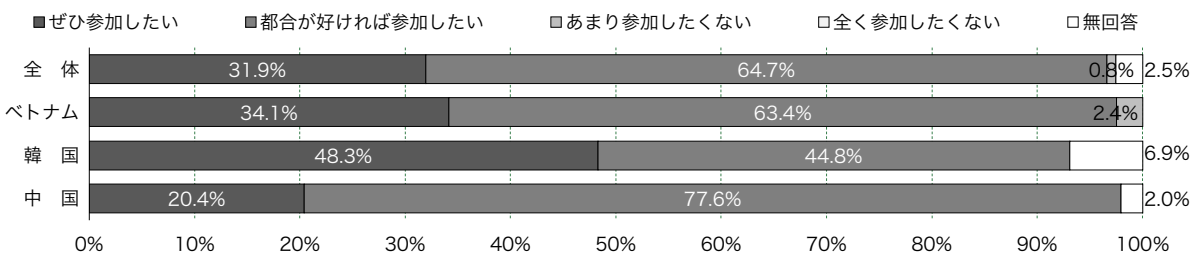
（N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、MA3）



問６　今後もこのような交流イベントがあれば、また参加したいと思いますか。［１つ選択］

選択肢	全　体		① ベトナム (10/19)		② 韓　国 (10/22)		③ 中　国 (11/02)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
① ぜひ参加したい	38	31.9	14	34.1	14	48.3	10	20.4
② 都合がよければ参加したい	77	64.7	26	63.4	13	44.8	38	77.6
③ あまり参加したくない	1	0.8	1	2.4	0	0.0	0	0.0
④ 全く参加したくない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
（無回答）	3	2.5	0	0.0	2	6.9	1	2.0

（N=全体119・① 越南41・② 韓国29・③ 中国49、SA）



本アンケートの結果は以上の通りである。これについて、本事業では次のように解釈する。

有効回答数は計119件、国別内訳は開催日順にベトナム41件・韓国29件・中国49件である。

まづ、**回答者属性**として、**性別**は、全体で男性46.2%・女性49.6%（無回答4.2%）、男女が概ね拮抗した。国別には、ベトナムは男性比率が相対的に高く（61.0%）、中国は女性比率が高い（63.3%）等、構成に差が見られた。**学年**は、大学生層が中心である一方で、無回答が全体で一定割合（20.2%）存在し、属性別の細分分析には留意を要する。

問１（OOC内容の理解度）は、「少し理解できた」（51.3%）が最多回答で、「よく理解できた」（40.3%）を合せた好意的回答が全体の９割以上（91.6%）を占めた。否定的回答（「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」）は6.7%に留まり、内容理解は概ね成立したと評価できる。国別には、中国で「よく理解できた」（18.4%）が相対的に低く、「少し理解できた」（71.4%）が高い傾向が見られ、理解の深さに改善余地が示唆される。

問２（OOCの有用性）は、「少し役に立つ」（52.1%）が最多回答で、「非常に役に立つ」（45.4%）を合せた好意的回答はほぼ全体（97.5%）を占めた。否定的回答は1.7%に留まり、OOCが留学検討・意思決定に資する情報提供として機能したことを確認できる。国別には、韓国で「非常に役に立つ」（62.1%）が高く、内容の実務的効用が強く受け止められた一方で、中国では「少し役に立つ」（67.3%）が高く、効用評価の強度が中位に分布する傾向が見られた。

問３（OOC実施環境の満足度）は、「よかった」（68.1%）が最多回答で、「どちらかと言えばよかった」（26.9%）を合せた好意的回答は95.0%に達した。特にベトナムでは「よかった」が100.0%で、実施環境（通信・運営・理解支援）の安定性が確保されていたことが判る。否定的回答（「少し問題があった」）は全体で3.4%であるが、国別には韓国で10.3%が計上されたため、会場音響・接続品質・進行管理等の基本条件の再点検が必要である。

問４（OOC参加による日本留学・就職意欲の向上度）は、「少し高まった」（49.6%）が最多回答で、「大いに高まった」（42.9%）を合せた好意的回答は92.5%を占めた。否定的回答は6.7%であり、OOCが参加者の意欲形成に一定の効果を持つことを確認できる。国別には、韓国で「大いに高まった」（69.0%）が高く、動機付け効果が強い一方で、中国では「少し高まった」（73.5%）が中心で、意欲の“強い高まり”に到る情報設計（要点の再提示、事例・体験談、質疑応答の設計等）に改善余地がある。

問５（OOCで刺戟を受けた話題）は、「日本での就職」（58.0%）と「日本企業の話」（48.7%）が高く、次いで「日本への留学」（40.3%）・「先輩の話」（36.1%）・「日本での生活」（32.8%）が続いた。つまり、参加者は、学校説明に加え、就職・企業・キャリアの具体像（および先輩等の具体的経験）への関心が強いことが判る。これは、広報募集施策としてのOOCが専修学校案内に留まらず、“留学後の進路・就労像”理解を支援することで価値が高まることを示す。

問６（今後の同種イベントへの参加意向）は、「都合が好ければ参加したい」（64.7%）が最多回答で、「ぜひ参加したい」（31.9%）を合せた好意的回答は96.6%に達した。否定的回答は0.8%に留まり、継続開催に対する受容性は極めて高いと評価できる。

以上から、本年度に催行したOOCは、内容理解度・有用性・実施環境満足度・日本留学就職意欲向上・再参加意向のいづれの指標でも高い比率の好意性を示し、広報募集施策として一定の成果を得たと評価できる。他方で、国別には「非常に／よく」の比率に差が見られ、特に中国では「少し」評価への集中が認められたため、次年度以降は通訳前提の情報設計（概念提示の再整理、事例化、要点の短い再提示、質疑応答の設計強化等）によって理解の深さと意欲形成の強度を高める余地がある。

＊

本年度のOOCは、活動Ⅰ（(入学前の）広報募集）における中核施策として、在アジアの日本留学希望者に対し、学校・学科の情報に加え、日本で学び働く際の前提になる生活・就職・職場像を双方向の場で提示することを目的にして実施した。前年度の韓国・ベトナムに加えて中国を対象国に追加し、計３回（３国×各１回）を開催した点に本年度催行の特徴がある。

催行形態は、日本（当校・本事業委員等）と現地（参加者・保護者等）をオンラインで接続し、現地会場での集団参加を基軸にして運営した。これにより、個人端末での参加に比べて（通信環境・機材・参加導線等の）参加障壁の低減を図り、参加者規模の確保と運営の安定化を両立した。また、通訳配置の有無や運営体制を国別に調整することで、言語条件の差を踏まえた情報伝達の成立を企図した。

OOCの成果はアンケート結果が示す通り、単に参加者数の確保に留まらず、内容理解度（問１：好意的回答91.6%）・有用性（問２：同97.5%）・実施環境満足度（問３：同95.0%%）・日本留学就職意欲向上度（問４：同92.5%）・再参加意向（問６：同96.6%）という複数指標で高水準の評価として確認された。これは、OOCが留学検討層に対する情報提供の非対称性を縮減し、意思決定の前提になる理解と動機付けを一定程度形成し得ることを定量的に裏付けるものである。

また、刺激を受けた話題（問５）では、「日本での就職」「日本企業の話」が上位回答で、次いで「日本への留学」「先輩の話」「日本での生活」が続いた。つまり、参加者に価値が高いのは、専修学校案内に加えて留学後の進路・就労像の具体化（企業・職種・就職活動・生活実態等）であることが判る。そのため、広報募集施策としてのOOCは、“入学前の情報提供”に止まらず、“留学後の姿（出口）を具体化し、期待値を適正化する場”として位置付けることが合理的である。

他方で、国別比較では、「よく理解できた」「非常に役に立つ」「大いに高まった」等の強い好意的回答の比率に差が見られた。そのため、次年度以降のOOCでは、通訳前提での情報量・語彙難度・要点再提示の設計、質疑応答の設問設計と時間配分、具体的事例（就職・職場・学習等）の提示方法等を再点検し、理解の深さと動機付けの強度を高める運用改善が有効である。そして、学年等の属性は無回答が一定割合存在したため、アンケート回収時の入力設計・回答導線の改善によって分析可能性を高める必要がある。

以上の通り、本年度のOOCは、対象国の拡張を含む催行実績を積み上げつつ、参加者の理解・有用感・意欲形成に対して高い効果を示した。

次節（**4.3**）では、本事業の活動Ⅱ（(在学中の）教育指導）における検証施策である**教育プログラム実証講座**について詳述する。

4.3　教育プログラム実証講座

教育プログラム実証講座は、開発した教育プログラムを本格実装の前段階（または初期実装の段階）で一定の対象者集団に対して試行的に運用し、教育の成立性と効果を測定可能な形で点検するための講座（フィールドテスト）である。

教育は、教育体系・指導計画・教材・学習活動・評価方法が個別に成立しているだけでは不充分である。実際の学習環境（学習時間・学習者負荷・学習者属性・運用条件等）に置かれた時、意図した学習行動が起き、到達が生じ、評価によってそれを把握できるという一連の循環が成立して初めて“運用可能な教育”として成立する。実証講座は、その循環の成立性を確認するための工程として位置付けられる。

実証講座を実施する意義は、大きく次の３点に整理できる。

第一に、設計段階で想定した教育の流れ（講義→演習→自習→評価）が、実際の学習者にとって過不足なく成立するかを確認できる点である。“設計図”としてのカリキュラムやシラバスは、到達目標・内容範囲・評価観点の整合性を担保するが、実際の学習者がその設計に基づいて学習すると限らない。実証講座は、視聴完了やテスト回答等の行動のデータを通じ、学習活動が想定通りに回るかを点検できる。

第二に、教育前後の到達度を比較することで、教育効果（伸び）の把握が可能になる点である。教育効果は、単なる受講満足度でなく、到達目標に対応する観点で事前・事後を測ることで説明可能になり、事業成果としての説得力が高まる。

第三に、結果が改善に直結する点である。学習が停滞した講、誤答が集中した観点、離脱が生じた局面を特定できれば、講義の構成、教材の情報設計、評価問題の表現、運用上の支援手順等を具体的に修正でき、次年度以降の標準化と再現性の強化に接続できる。

このように、実証講座は、〈調査〉や〈開発〉によって整備した教育設計を“現場で回る状態”に落し込み、その成果を到達として提示するための橋渡しである。

本事業でも、開発した教育プログラム（４科目40講）を一定期間で実施できる規模に再構成した**実証用ミニプログラム**として運用し、学修評価基準と整合する観点で効果測定を行うことで、教育設計の実効性を検証可能な形で示すことを目的にして**実証講座**を実施した。

4.3.1　実施概要

本年度（令和７年度）事業では、前章（**第3章**）で見た通り、オンライン教育システム（教育基盤）・カリキュラム（教育体系）・シラバス（授業計画）・コンテンツ（教材）を段階的に整備し、学修評価基準（到達の定義）も策定した。

教育プログラム実証講座は、これらの開発成果を実際の学習者集団に適用し、学習行動と到達度の変化を測定することで、教育設計が運用上も成立していること、そして一定の教育効果を示し得ることを確認する検証施策である。

本実証講座は、開発した教育プログラム（４科目40講）をフルスペックで実施するのでなく、（約４週間の）短期運用と効果測定を両立させるべく、全40講から20講を選定して再構成した**実証用ミニプログラム**によって実施した。

その際、**20講選定の基本方針**は次の４点である。

○ 就職移行・職場定着に関わる基礎領域を落さない。

○ 短期介入でも到達の伸びが観測され易い内容にする。

○ 講義（オンデマンド視聴）と自習（理解度確認CBT）だけで教育効果を測定できる内容にする。

○ ４科目の構造を維持しつつ、負荷が過度にならない配列を組む。

この実証講座が“縮約版プログラム”である以上、内容を薄めるのでなく、測定可能な到達に収束するように教育プログラムの“核”を抽出することが重要であるため、この20講は各講シラバスにおける〈講内容〉と〈理解度確認テスト出題観〉点を照合しながら選定した。

実施時期は令和８年１月13日（火）～２月６日（金）（４週間）で、**稼働日数**は当該期間中の平日19日である。**対象者**は当校に在籍するアジア出身留学生 32人（中国16人・韓国10人・ベトナム６人）である。彼らは全員１年生であるが、実施時期が１～２月であるため在籍上は２年次進級直前の段階にあり、就職移行を見据えた準備として本講座を位置付けた。

運用形態は、演習（ライブ配信）を含めず、講義（オンデマンド視聴）と自習（理解度確認CBT）だけで構成した。各講は４テーマ（①～④）を単位とする短尺講義映像で構成され、学習者は所定の期間内に視聴を完了した上で、当該講に対応する自習問題（１講５問）に取り組む。

受講を支援するため、初日に**〈導入セッション〉**を設定し、オンライン教育システムの操作説明、受講上の諸注意、事前テストおよび自己アセスメントを実施した。そして、最終日に**〈総括セッション〉**を設定し、全体講評、事後テストおよび自己アセスメントの実施、次年度以降の改善に資する所見の回収を行った。

評価方法は、次の４点を主要指標にし、これらを総合して教育効果を把握した。

① 学習行動（視聴完了率・CBT完了率）

② 知識・理解（CBT正答率）

③ 事前/事後テスト正答率の比較

④ 事前/事後自己アセスメントの変化（伸び率）

指標①（学習行動）は、教育が成立するための前提（実行可能性・継続可能性）を示し、指標②（知識・理解）は、各講の到達度の確認に資する。指標③（事前/事後テスト正答率比較）と指標④（事前/事後自己アセスメント変化）は、短期介入による到達の変化をプログラム全体として捉えるために設定した。

これにより、本実証講座は「学習が回ったか」「到達が伸びたか」「どこを直すべきか」を同一の枠組で説明できるように整理することを企図した。

以上の内容を**教育プログラム実証講座 実施概要**として次頁に整理する。

▼ 教育プログラム実証講座 実施概要

名称	IT留学生教育プログラム実証講座
目的	開発した教育プログラムを実際の学習者集団に適用し、その学習行動と到達度の変化を測定することで、本教育プログラムの設計が運用上も成立していること、そして一定の教育効果を示し得ることを検証する。
対象	日本電子専門学校に在籍するアジア留学生（１年生）32人（中国16人・韓国10人・ベトナム６人）
時期	令和８年１月13日（火）～ ２月６日（金）の４週間（稼働日数は原則として同期間中の平日19日間）
形態	開発した教育プログラム（全40講）から20講を選定して再構成した実証用ミニプログラムを運用し、学習者はオンライン教育システム上で講義（オンデマンド視聴）と自習（理解度確認CBT）に取り組む。
内容	第１週：　導入セッション＋A01→B02→A02→C01＋D01→D02 第２週：　C03→A05→D03→B03→C04＋中間セッション 第３週：　A06→D05→C06→B06→D09 第４週：　A07→C10→B10→A09＋総括セッション ※ 導入セッション：　オンライン教育システムの操作説明、受講上の諸注意、事前テスト＆自己アセスメント等 ※ 中間セッション：　受講者取組状況レビュー、IT実務家講演（による意欲喚起） ※ 総括セッション：　全体講評、事後テスト＆自己アセスメントの実施、次年度以降の改善に資する所見の回収等
評価	① 学習行動（視聴完了率・CBT完了率） ② 知識・理解（CBT正答率） ③ 事前/事後テスト正答率の比較 ④ 事前/事後自己アセスメントの変化（伸び率） この４点を主要指標にし、これらを総合して教育効果を把握する。それにより、「学習が回ったか」「到達が伸びたか」「どこを直すべきか」を同一の枠組で説明できるように整理する。

4.3.2　実施内容

本項では、前項（**4.3.1**）で見た「実施概要」を実際の運用手順として具体化し、後項（**4.3.3**）「実施結果」で扱う各指標（視聴完了率・CBT回答率・事前/事後比較等）がいかなる条件で得られたかを説明可能な形で整理する。

具体的には、実証用ミニプログラム20講の選定と構成、19日運用の講配列とその設計根拠、初日の導入セッションおよび最終日の総括セッション、そして日々の学習運用（オンデマンド視聴＋理解度確認CBT）について詳説する。

実証用ミニプログラム（20講）の構成

本実証講座で運用した**実証用ミニプログラム**は、開発した教育プログラム４科目の枠組を維持したまま、その40講から**20講**を選定して再構成した。各科目からの選定講数は次の通りである。

【科目Ａ】IT留学生キャリア教育　　６講
【科目Ｂ】日本事情　　４講
【科目Ｃ】就職適性検査対策：言語領域　　５講
【科目Ｄ】就職適性検査対策：非言語領域　５講

これは、次のような観点から配分したものである。その上で、**各科目からの選定講**を以下に列挙する。

○ 就職移行・職場定着の前提になる行動規範と生活基盤を確保する。
○ 就職適性検査対策として言語・非言語の基礎領域を過不足なく扱う。
○〈オンデマンド視聴＋理解度確認CBT〉だけで到達度の伸びが測定可能な講を優先する。

【科目Ａ】IT留学生キャリア教育（６講）

01　日本のIT人材として
02　職場の基本ルール
05　コミュニケーション
06　リスク認識と“小さな品質”
07　タスク・時間の管理
09　倫理とハラスメント防止

【科目Ｂ】日本事情（４講）

02　生活文化の実際
03　職場文化の諸相
06　情報空間の諸相
10　社会参画の入口

【科目Ｃ】就職適性検査対策：言語領域（５講）

01　出題の全体像と対策
03　文の論理構造
04　文法と敬語の運用
06　長文読解
10　技術日本語の読解

【科目Ｄ】就職適性検査対策：非言語領域（５講）

01　出題の全体像と対策
02　割合・比・速さ
03　表・グラフの解釈
05　整数と方程式
09　アルゴリズム的思考

この20講選定の具体的理由は次の通りである。

第一に、理解度確認CBTだけで測定可能な到達を優先した。本実証講座では演習（ライブ配信）を行わないため、協働を実演・相互評価する形式より、規範の理解、判断基準の把握、読解手順や解法の型等、〈講義＋自習〉で到達を確認し易い講を中心に据えた。

第二に、短期介入で伸びが出易い内容を含めた。就職適性検査対策の導入講（**C01・D01**）や、読解・数的処理の基礎講（**C03・C04・D02・D03・D05**）は、学習の型を与えることで得点改善が観測され易い。

第三に、就職移行に必要な前提領域を確保した。**A01・A02・A05・A06・A07・A09**は、職場規範・コミュニケーション・品質と安全・自己管理・倫理等、就職前の最低限の前提知識と判断軸を形成し、**B02・B03・B06・B10**は、生活基盤と社会制度の理解を押えることで学習継続と就職前提を補強する。

第四に、４科目（**A**～**D**）の相関を維持した。実証講座は教育体系の縮約版であるため、いづれかの領域を欠くと、開発した教育プログラムの設計思想（4領域分解）を検証する意義が薄れる。

以上の観点から、この20講は、“少くするために削る”のでなく“測定可能な核を抽出する”という発想で選定した。

19日運用の講配列（20講を19日で回す設計）

本実証講座の実施日数は平日19日であるため、20講を運用するためには１日だけ“２講実施日”を設定する必要がある。そこで、学習負荷の過度な上昇を避けつつ全体の学習を円滑に進めるべく、“２講実施日”には就職適性検査対策の導入講（**C01**と**D01**）を同日に配置することにした。導入講は、具体的な問題処理より出題全体像・時間配分・解く順・ミス低減等の“枠組”の共有が中心であり、同系の情報として短時間で受講し易い。その結果として、２講をこの１日に集約することで、他日は１日１講のペースを維持し、継続率（視聴完了率・CBT完了率）を確保し易い構造にした。

以上を踏まえ、**19日運用の講配列**は次の通りである。

第１週	第01日（1月13日）	〈導入セッション〉＋【A01】日本のIT人材として
	第02日（1月14日）	【B02】生活文化の実際
	第03日（1月15日）	【A02】職場の基本ルール
	第04日（1月16日）	【C01】【D01】出題の全体像と対策（言語領域・非言語領域）
第２週	第05日（1月19日）	【D02】割合・比・速さ
	第06日（1月20日）	【C03】文の論理構造
	第07日（1月21日）	【A05】コミュニケーション
	第08日（1月22日）	【D03】表・グラフの解釈
	第09日（1月23日）	【B03】職場文化の諸相 ＋〈中間セッション〉
第３週	第10日（1月26日）	【C04】文法と敬語の運用
	第11日（1月27日）	【A06】リスク認識と“小さな品質”
	第12日（1月28日）	【D05】整数と方程式
	第13日（1月29日）	【C06】長文読解
	第14日（1月30日）	【B06】情報空間の諸相
第４週	第15日（2月2日）	【D09】アルゴリズム的思考
	第16日（2月3日）	【A07】タスク・時間の管理
	第17日（2月4日）	【C10】技術日本語の読解
	第18日（2月5日）	【B10】社会参画の入口
	第19日（2月6日）	【A09】倫理とハラスメント防止 ＋〈総括セッション〉

この講配列の順序には、次の３点の狙いがある。

第一に、受講の前提を早期に揃えることである。例えば**第１週**では、**A01**（日本のIT人材像と価値提供）で学習の目的を共有し、**B02**（生活オペレーション）で生活基盤の不安を早期に低減し、**A02**（職場の基本ルール）で行動規範の共通前提を形成した上で、**C01・D01**（受検戦略）に接続する。これにより、後続の内容が断片化せず、学習の見通しが維持される。

第二に、負荷の交互配置である。**【科目C・D】**は読解・数的処理によって認知負荷が上がり易い一方で、**【科目A・B】**は場面・規範の理解が中心であり、負荷の種類が異なる。高負荷講を連続させると講義の視聴不全（途中離脱や早送り完了）やCBTの形骸化が起き易いため、**【科目C・D】**と**【科目A・B】**を概ね交互に置き、実行率の低下を抑える配列にした。

第三に、科目内の前提関係に基づく難易度勾配である。例えば**【科目D】**では、**D02**（割合等）と**D03**（資料読解）の基礎を先に置き、**D05**（方程式）に段階的に負荷を上げ、**D09**（アルゴリズム的思考）で論理的処理に拡張する。**【科目C】**では、**C03**（論理構造）と**C04**（文法・敬語）で読解の土台を固めた後に**C06**（長文読解）に進み、最後に**C10**（技術日本語）でIT文脈の読解に接続する。

こうした順序は、短期でも到達の伸びが出易いように〈“型”の獲得→負荷の増加→応用〉に繋げる意図に拠る。

そして、終盤（第４週）は、**A07**（自己管理）→ **C10**（技術文書）→ **B10**（社会参画）→ **A09**（倫理）という流れにし、就職移行期に必要になる“自分で回す力”“業務文脈を読む力”“制度の最低限”“線引きと相談”を纏めて提示する構成にした。これにより、本実証講座が単なる“適性検査対策”に終らず、“就職移行・職場定着”という本事業の趣旨に基づく出口（学習の意味付け）を確保する。

導入セッション（初日）

本実証講座の初日（1月13日）、以降19日間の学習の円滑化と効果測定の成立を目的にして**〈導入セッション〉**（約１時間）を実施した。その内容は次の通りである。

① 実証講座の進め方の確認（１日１講の原則、２講実施日、第10日の中間セッション、最終日の総括セッション）
② オンライン教育システムの概要説明（ログイン・講義視聴・CBT取組・進捗状況確認）
③ 受講上の諸注意（視聴期限・CBT完了期限・質問窓口・学習の進め方等）
④ 事前テストの実施（言語/非言語領域・職場規範・生活基盤に関わる基礎項目）
⑤ 事前自己アセスメントの実施（到達項目に対する自己評価）

〈導入セッション〉の狙いは、操作ミスや受講手続の不明確さによる離脱を防ぐこと、事前測定を同一条件で実施して比較可能性を確保すること、受講者に学習の見通しを与えて継続を促すことにある。特にオンデマンド視聴や自習CBTは学習者の自己管理に依存し易いため、初期段階で“何を・いつまでに・どの順で行うか”を明確にし、学習行動の標準化を図った。

中間セッション（第２週終了時）

本実証講座はオンデマンド視聴と自習CBTを基軸にして進行するため、受講者の取組状況が個別化し易く、学習の遅れや意欲低下が可視化され難い。

そこで、本実証講座では実施期間の中間点である第２週終了時（1月23日）、**〈中間セッション〉**（約1時間）を設定し、事前測定結果の共有と学習状況の点検、そして学習意欲の再喚起を行った。その内容は次の通りである。

① 事前テスト・事前自己アセスメントのレビュー
（全体傾向の共有、共通の弱点領域の整理、後半に向けた学習の焦点提示 等）

② 受講者取組状況のレビュー
（視聴完了率・CBT完了率の中間集計、未完了者の発生要因の確認、学習計画の立て直しと受講上の留意点の再確認 等）

③ IT実務家講演
（現場で求められる行動・判断の具体像の提示、学習内容が職務遂行に接続する場面の例示、就職移行期の心構えに関するメッセージ 等）

④ 質疑・確認（受講上の困難点の共有、学習の進め方の調整、後半運用の確認 等）

〈中間セッション〉の狙いは、第一に、事前測定の結果を“個人の点数”でなく“全体の傾向”として整理することで、受講者が自分の課題を客観化し、後半の学習で注力すべき観点を明確にすることにある。第二に、学習行動の中間レビューにより、視聴やCBT取組が滞留する局面を早期に発見し、運用上の支援（期限意識の再設定、学習時間の確保、学習の分割等）を促すことにある。第三に、IT実務家講演を通じ、学習内容が職務の具体的場面でいかなる価値を持つかを再接続し、受講者の啓発や意欲喚起を図ることにある。これにより、オンデマンド学習が“作業化”することを防ぎ、後半の学習継続と到達の伸長に向けた学習姿勢を整えることを企図した。

総括セッション（最終日）

本実証講座の最終日（2月6日）、事後測定と学習の振り返りを目的にして**〈総括セッション〉**を実施した。その内容は次の通りである。

① 事後テストの実施（事前テストと同一枠組での到達確認）

② 事後自己アセスメントの実施（同一項目での自己評価）

③ 講評（学習行動の傾向、得点変化の概要、よく出来ていた点と改善点 等）

④ 質疑応答・所見回収（受講者の負荷感、理解し難かった講、役に立った講 等）

〈総括セッション〉は、事後測定によって教育効果を確認することに加え、受講者自身が学習の意味を整理し、次の学習（教育プログラム受講や就職準備）に接続するための節目として設定した。オンデマンド学習は学習が個別化し易い一方で、学習のまとまりが弱くなり易いため、プログラム終了時の再統合（全体の振り返り）を確保することが重要になる。

日々の運用（オンデマンド視聴＋自習CBT）

日々の学習は、当日指定講の講義映像（4テーマ）の視聴と当該講に対応する自習CBT（5問）の回答から成る。

講義映像は、短尺単位で構成することで、学習者が集中を維持したまま視聴できるようにした。

自習CBTは、講内容の重要概念・重要用語・判断基準に対応させ、出題形式は〈空欄補充〉〈事象理解〉〈正誤判定〉の３種に拠った。これにより、単なる暗記でなく、重要文の理解、概念の同定、文の適否判断という複数の認知操作を含む形で、理解度の点検が可能になるように設計した。

4.3.3　実施結果

本年度事業では**4.3.1**と**4.3.2**で見たように、**教育プログラム実証講座**を実施した。

本項では、その運用実態と教育効果を、そこで取得した学習ログや測定結果に基づいて整理する。

取得した主なデータは次の５点である。

① 各講の講義視聴完了率

② 各講のCBT完了率

③ 各講のCBT正答率

④ 事前・事後テストの正答率

⑤ 事前・事後自己アセスメントにおける「○」回答率

①②は、オンデマンド運用が計画通りに回ったか（実行可能性・継続可能性）を確認する指標である。③は、各講で提示した重要概念・重要用語・判断基準等が理解として定着したかを点検し、講義内容・自習問題の改善点を抽出するために用いる。④⑤は、プログラム受講による到達の変化を客観指標と主観指標の両面で捉え、その教育効果を説明可能な形で示すための測定である。

以下に、これらの結果を順に提示し、受講者の学習行動や到達の推移等について分析・講評する。

講義視聴完了率とCBT完了率

本実証講座ではまず、「学習が回ったか」を確認するべく、学習行動に関する指標として、各講の**〈講義視聴完了率〉**と**〈CBT完了率〉**を集計した。

〈講義視聴完了〉の定義は、当該講の講義映像（４テーマ）について、１テーマの視聴到達率が90%以上になった状態を「当該テーマ視聴完了」とし、４テーマ全てが完了した状態を「当該講視聴完了」とした。

〈CBT完了〉の定義は、当該講に設定された５問全てに解答し、送信（採点処理）まで完了した状態を「当該講CBT完了」とした。

▼（各講）講義視聴完了率＆CBT完了率

回	講	出身国	講義視聴完了率		CBT完了率	
			n	%	n	%
01	【A01】日本のIT人材として	全　体	28	87.5	27	84.4
		中　国	14	87.5	13	81.2
		韓　国	9	90.0	9	90.0
		ベトナム	5	83.3	5	83.3
02	【B02】生活文化の実際	全　体	27	84.4	25	78.1
		中　国	13	81.2	12	75.0
		韓　国	9	90.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	5	83.3
03	【A02】職場の基本ルール	全　体	27	84.4	26	81.2
		中　国	13	81.2	13	81.2
		韓　国	9	90.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	5	83.3
04	【C01】出題の全体像と対策	全　体	26	81.2	24	75.0
		中　国	13	81.2	12	75.0
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7

	【D01】出題の全体像と対策	全　体	26	81.2	24	75.0
		中　国	12	75.0	12	75.0
		韓　国	9	90.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
05	【D02】割合・比・速さ	全　体	25	78.1	23	71.9
		中　国	12	75.0	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
06	【C03】文の論理構造	全　体	25	78.1	23	71.9
		中　国	12	75.0	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
07	【A05】コミュニケーション	全　体	26	81.2	24	75.0
		中　国	13	81.2	12	75.0
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
08	【D03】表・グラフの解釈	全　体	24	75.0	23	71.9
		中　国	11	68.8	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
09	【B03】職場文化の諸相	全　体	25	78.1	24	75.0
		中　国	12	75.0	12	75.0
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
10	【C04】文法と敬語の運用	全　体	24	75.0	23	71.9
		中　国	12	75.0	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	4	66.7	4	66.7
11	【A06】リスク認識と“小さな品質”	全　体	25	78.1	24	75.0
		中　国	12	75.0	12	75.0
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
12	【D05】整数と方程式	全　体	23	71.9	23	71.9
		中　国	11	68.8	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	4	66.7	4	66.7
13	【C06】長文読解	全　体	23	71.9	23	71.9
		中　国	11	68.8	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	4	66.7	4	66.7
14	【B06】情報空間の諸相	全　体	24	75.0	23	71.9
		中　国	12	75.0	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	4	66.7	4	66.7
15	【D09】アルゴリズム的思考	全　体	23	71.9	23	71.9
		中　国	11	68.8	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	4	66.7	4	66.7
16	【A07】タスク・時間の管理	全　体	25	78.1	24	75.0
		中　国	12	75.0	12	75.0
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7
17	【C10】技術日本語の読解	全　体	24	75.0	23	71.9
		中　国	12	75.0	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	4	66.7	4	66.7
18	【B10】社会参画の入口	全　体	24	75.0	23	71.9
		中　国	12	75.0	11	68.8
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	4	66.7	4	66.7
19	【A09】倫理とハラスメント防止	全　体	25	78.1	24	75.0
		中　国	12	75.0	12	75.0
		韓　国	8	80.0	8	80.0
		ベトナム	5	83.3	4	66.7

（N=全体32・中国16・韓国10・ベトナム6）

上表から判る通り、**全体**（32人）の〈講義視聴完了率〉は71.9～87.5%（23～28人）の範囲に分布し、

平均は78.0%であった。〈CBT完了率〉は71.9〜84.4%（23〜27人）の範囲に分布し、平均は74.4%であった。

両指標は概ね連動し、〈講義視聴完了率〉が高い講ほど〈CBT完了率〉も高いという傾向を確認できる。他方で、〈講義視聴完了率〉と〈CBT完了率〉の差（ギャップ）は講によって生じ、平均3.6pt.（人数換算で概ね１〜２人）の差が観察された。これは、学習行動が〈講義視聴完了〉で止まり、〈理解確認〉（CBT送信）まで到達しない受講者が一定程度存在したことを示す。

時系列で見ると、導入期（第01〜04日）は〈講義視聴完了率〉〈CBT完了率〉共に相対的に高く、全体平均で〈講義視聴完了率〉83.7%・〈CBT完了率〉78.7%を示した。

他方で、中盤（第05〜11日）は〈講義視聴完了率〉77.7%・〈CBT完了率〉73.2%に低下し、後半（第12〜19日）は〈講義視聴完了率〉74.6%・〈CBT完了率〉72.7%に下げ止まる推移であった。特にD05（整数と方程式）・C06（長文読解）・D09（アルゴリズム的思考）では〈講義視聴完了率〉〈CBT完了率〉共に71.9%（23人）に達し、言語・数理・手順的思考を要する講で完了率が相対的に低下することが判る。〈講義視聴完了〉の判定が「“１テーマ90%以上視聴完了“ ×４」という厳格な条件である点を踏まえると、70%台前半まで低下した講は、内容の難度だけでなく、学習時間の確保や学習継続の負荷（疲労・繁忙）が重なった局面である可能性が高い。

科目別に俯瞰すると、完了率は次の順に整理できる。【科目Ａ】は平均で〈講義視聴完了率〉81.2%・〈CBT完了率〉77.6%で最も高く、【科目Ｂ】は〈講義視聴完了率〉78.1%・〈CBT完了率〉74.2%、【科目Ｃ】は〈講義視聴完了率〉76.2%・〈CBT完了率〉72.5%、【科目Ｄ】は〈講義視聴完了率〉75.6%・〈CBT完了率〉72.5%であった。

すなわち、場面想定が明確で概念理解を中心にして進む領域（【科目Ａ・Ｂ】）では完了率が相対的に高く、読解・文法運用・数理処理・手順的思考を要する領域（【科目Ｃ・Ｄ】）では完了率が相対的に低い。これは、オンデマンド学習において“理解の手懸り（場面・具体例・可視化等）”が多い単元ほど完了まで到達し易い一方で、処理量が増える講ほど途中離脱（または先送り）が生じ易いという、学習行動上の一般的な構造とも整合的である。

出身国別に見ると、韓国群（10人）は平均で〈講義視聴完了率〉82.0%・〈CBT完了率〉80.5%というように高位で安定していたのに対し、中国群（16人）は〈講義視聴完了率〉75.6%・〈CBT完了率〉72.5%、ベトナム群（６人）は〈講義視聴完了率〉77.5%・〈CBT完了率〉69.2%であった。特にベトナム群は〈CBT完了率〉が〈講義視聴完了率〉を下回る傾向が相対的に大きいが、（母数が６人であるため）１人の未完了が16.7pt.の変動に繋がってしまう点には留意が必要である。

いづれにせよ、同一教材・同一運用であっても、学習完了の到達度には群差が生じ得るため、運用面では“進捗の可視化”“理解度確認CBTでの到達支援”“中盤以降の離脱の抑制”等のオプションを組み込むことが合理的である。

〈講義視聴完了率〉と〈CBT完了率〉のギャップの観点では、導入期ほどギャップが大きく（平均約５pt.）、後半で縮小する（平均約２pt.）という傾向が見られた。これは、（ｉ）導入期は受講者が“講義視聴で学習が終った”と捉え易く、理解度確認CBTの位置付けが行動に繋がり難い、（ii）運用が進むのにつれて完了基準や学習手順（講義視聴→CBT送信）が受講者に定着し、講義視聴完了者はCBT完了まで到達し易くなるという二段階の可能性を示唆する。実務上は、講義映像とCBTの接続（自動遷移・同一画面での導線、期限設定、リマインド等）を強化することが完了率改善の最短経路になる。

以上から、本実証講座の運用設計（オンデマンド視聴＋CBT）は、受講者32人規模において、講単位で70%台前半〜80%台後半の完了率を確保できる構造として成立している。他方で、完了率の谷が生ずる講（読解・数理処理・アルゴリズム的思考等）と、講義視聴から理解確認に移行し切れない層の存在が確認されるため、今後の改善観点は次の３点に集約できる。

○ CBT完了までを学習の最小単位として行動設計する導線の整備

○ 負荷が高い講での支援（例示の増強、要点の再提示、途中離脱の抑制等）

○ 中盤以降の進捗レビュー機会（中間セッション等）による再動機付け

これらは、学習者の属性差（出身国の別・言語能力差・基礎学力差）を前提にしつつ、運用の標準化と再現性を高めるための実装可能な所見である。

CBT（理解度確認テスト）正答率

次に、学習の到達度を講単位で確認するべく、各講の**理解度確認テストの〈CBT正答率〉**を集計した。

理解度確認テストは、各講の講義内容に準拠した自習CBTで、１講５問で構成される。講内容の重要概念・重要用語・判断基準等に対応する観点で作問しているため、その正答率は当該講の理解度を示す指標になる。

▼（各講）講義視聴完了率＆CBT完了率

回	講	出題観点	全　体		中　国		韓　国		ベトナム	
			n	%	n	%	n	%	n	%
01	【A01】日本のIT人材として	❶ 運用職の役割識別	24	75.0	12	75.0	8	80.0	4	66.7
		❷ 顧客視点の行動選択	23	71.9	11	68.8	8	80.0	4	66.7
		❸ 成果責任としてのプロ理解	23	71.9	11	68.8	8	80.0	4	66.7
		❹ 当事者意識欠如の判別	23	71.9	11	68.8	8	80.0	4	66.7
		❺ ドッグイヤー概念理解	21	65.6	10	62.5	7	70.0	4	66.7
02	【B02】生活文化の実際	❶ 分別と指定日の基本	21	65.6	10	62.5	7	70.0	4	66.7
		❷ マイナンバーの用途	21	65.6	10	62.5	7	70.0	4	66.7
		❸ 健康保険の役割理解	21	65.6	10	62.5	7	70.0	4	66.7
		❹ 口座の必要性把握	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❺ 避難情報の確認行動	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
03	【A02】職場の基本ルール	❶ 遅刻・欠勤連絡の必須要素	22	68.8	11	68.8	7	70.0	4	66.7
		❷ ミス発見時の報告行動	22	68.8	11	68.8	7	70.0	4	66.7
		❸ 守秘義務違反の識別	22	68.8	11	68.8	7	70.0	4	66.7
		❹ 法令違反リスクの判断	21	65.6	10	62.5	7	70.0	4	66.7
		❺ 相談時の準備姿勢	19	59.4	10	62.5	6	60.0	3	50.0
04	【C01】出題の全体像と対策	❶ 整序問題の要点	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❷ 時間配分の基本	19	59.4	9	56.2	7	70.0	3	50.0
		❸ 長文の着手手順	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❹ 根拠確認でのミス防止	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❺ 語彙学習の位置付け	16	50.0	8	50.0	6	60.0	2	33.3
	【D01】出題の全体像と対策	❶ 損益算の基本理解	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❷ 時間配分の原則	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❸ 分数変換による時短	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❹ 暗算偏重の危険	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❺ 概算と選択肢活用	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
05	【D02】割合・比・速さ	❶ 増加率の分母理解	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❷ 比連結の基本手順	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❸ 追いかけ問題の差の速さ	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❹ km→mの換算	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❺ 75%の計算工夫	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
06	【C03】文の論理構造	❶ 逆接接続語の理解	19	59.4	9	56.2	7	70.0	3	50.0
		❷ 言い換え接続語の機能	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❸ 指示語の参照特定	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❹ 空欄補充の手順	16	50.0	8	50.0	6	60.0	2	33.3
		❺ 因果接続語の識別	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3

07	【A05】 コミュニケーション	❶ やさしい日本語の原則	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❷ チャット利用マナー	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❸ 会議参加の基本行動	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❹ フィードバック受容姿勢	19	59.4	9	56.2	7	70.0	3	50.0
		❺ メール必須要素の識別	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
08	【D03】 表・グラフの解釈	❶ 折れ線の変化判定	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❷ 増減率の分母選択	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❸ 複合表の読解手順	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❹ 尺度・単位の見落とし	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❺ 質問先読みの原則	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
09	【B03】 職場文化の諸相	❶ 納期が重視される理由	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❷ 会議での要点共有	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❸ 敬語の基本運用	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❹ 残業の捉え方整理	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❺ 休暇取得の事前調整	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
10	【C04】 文法と敬語の運用	❶ 助詞による断り表現	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❷ 受け身敬語の注意	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❸ 謙譲語の選択	16	50.0	8	50.0	6	60.0	2	33.3
		❹ メール冒頭の基本	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
		❺ 開始表現の適切性	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
11	【A06】 リスク認識と “小さな品質”	❶ コミュニケーションエラー理解	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❷ チェックリスト運用の要点	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❸ エスカレーション要否判断	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❹ セキュリティ不適切行動	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❺ ヒューマンエラー原因認識	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
12	【D05】 整数と方程式	❶ 約分の意味理解	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❷ 方程式の両辺操作	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❸ 比の立式（2xと3x）	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❹ 加減法の誤解回避	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❺ 差から比を立てる考え方	13	40.6	6	37.5	5	50.0	2	33.3
13	【C06】 長文読解	❶ 結論構造（ハンバーガー）	16	50.0	8	50.0	6	60.0	2	33.3
		❷ 主張を示す語句	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
		❸ 図表挿入文の読み手順	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
		❹ スキミングの定義	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❺ 接続詞無視の危険	13	40.6	6	37.5	5	50.0	2	33.3
14	【B06】 情報空間の諸相	❶ 媒体特性の比較理解	19	59.4	9	56.2	7	70.0	3	50.0
		❷ SNS公開範囲への配慮	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❸ 個人情報の識別	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❹ ファクトチェック手順	16	50.0	8	50.0	6	60.0	2	33.3
		❺ 信頼できる情報源選択	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
15	【D09】 アルゴリズム的思考	❶ 手順省略の不適切性	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❷ 条件分岐の追跡	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❸ 繰り返し回数の確認	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❹ 代入記号の意味	13	40.6	6	37.5	5	50.0	2	33.3
		❺ トレースの基本	13	40.6	6	37.5	5	50.0	2	33.3
16	【A07】 タスク・時間の管理	❶ 第２領域の行動理解	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❷ 見積りの根拠設定	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❸ 割込み時の再優先付け	19	59.4	9	56.2	7	70.0	3	50.0
		❹ 締切の性質理解	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❺ 遅延見込み時の相談	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
17	【C10】 技術日本語の読解	❶ 保存と更新の使い分け	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
		❷ 仕様書の条件確認	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
		❸ 手順省略の禁止	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❹ 図表先読みの活用	14	43.8	7	43.8	5	50.0	2	33.3
		❺ 権限概念の理解	13	40.6	6	37.5	5	50.0	2	33.3
18	【B10】 社会参画の入口	❶ 住民税の基本理解	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❷ ボランティアの意義	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❸ 相談先の適切選択	17	53.1	8	50.0	6	60.0	3	50.0
		❹ 津波警報時の避難	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
		❺ 労災保険の概要	15	46.9	7	43.8	6	60.0	2	33.3
19	【A09】 倫理と ハラスメント防止	❶ ミス申告と再発防止の姿勢	20	62.5	10	62.5	7	70.0	3	50.0
		❷ 休憩時間の基本理解	19	59.4	9	56.2	7	70.0	3	50.0
		❸ 冗談扱いの危険認識	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❹ 記録と相談の実行手順	18	56.2	9	56.2	6	60.0	3	50.0
		❺ ごまかし行動の不適切性	16	50.0	8	50.0	6	60.0	2	33.3

（N=全体32・中国16・韓国10・ベトナム６）

上表から判る通り、全100問（＝5問×20講）の**全体正答率**は、平均54.6%（中央値54.7%）で、概ね50%台を中心にして分布した。分布は、60%以上が24問、50.0〜59.9%が49問、40.0〜49.9%が27問で、極端な高得点・低得点に偏るのでなく、講内容の難度差と受講者属性（言語能力差・基礎学力差）の双方を反映した“現実的な幅”を持つ結果になった。最高値75.0%・最低値40.6%で、講・出題観点による到達のばらつきが可視化された。

科目別に見ると、正答率は【科目A】（平均62.2%）＞【科目B】（55.9%）＞【科目C】（49.8%）≈【科目D】（49.3%%）の順であった。【科目A】は、職業意識・職場規範・協働行動に関する“概念理解＋判断基準”の領域で、学習者が自己経験（学校生活・アルバイト等）に繋げて理解し易い。他方で、【科目C・D】は、言語処理（読解・文法）や数理・論理（計算・推論）を含み、短時間の講義視聴だけで正答に安定的に到達するためには（語彙・読解速度・計算手続き等の）基礎学力が直接に要求されるため、相対的に正答率が抑制される構図が見られる。これは、教育プログラムが狙う“IT以前のボトルネック”を評価可能な形で顕在化させるという実証講座の目的に整合的である。

講別に見ると、比較的に高位で安定した講は A01（日本のIT人材として）（平均71.3%）・A02（職場の基本ルール）（66.3%）・B02（生活文化の実際）（61.8%）で、いづれも、概念が日常場面に結び付き易く、重要用語が限定的で、判断軸が明瞭であるため、短問形式のCBTと相性が好い。他方で、低位であった講は、D09（アルゴリズム的思考）（平均42.5%）・C10（技術日本語の読解）（44.4%）・D05（整数と方程式）（45.0%）・C06（長文読解）（45.6%）で、いづれも、“複数手続きの連鎖（推論・手順）”“文章量の増加”“用語密度の上昇”等、認知負荷が高い領域に集中した。したがって、これらの講は、講義映像の短尺化だけでなく、例示の増補、手続きの段階化、誤解し易い用語の対比提示（類似概念の境界付け）等の追加的な支援が、次年度以降の改善論点として示唆される。

出題観点❶〜❺の差分も重要である。全体平均は ❶ 58.8%・❷ 56.6%・❸ 55.2%・❹ 52.7%・❺ 49.8%で、観点番号が進むのにつれて正答率が段階的に低下した。特に❺は20問中10問が50%未満で、最終観点が“用語・要点の再生”より一段高い理解（区別・判断・適用等）を要求していることが、学習者の成績分布から判る。つまり、基礎理解（❶〜❸）は一定程度確保される一方で、判断・運用寄りの問題（❹〜❺）では支援の余地が残るということであり、実証講座として“学習到達の弱点がどこに生じ得るか”を把握できた点に意義がある。

出身国別に見ると、平均正答率は、韓国（61.7%）＞ 中国（53.2%）＞ ベトナム（46.5%）であった。この差は、単純な優劣でなく、（ⅰ）日本語の読解負荷が高い領域（【科目C】）や抽象的手続が連続する領域（【科目D】）で拡大し易いこと、（ⅱ）ベトナムは（母数が6人であるため）1人の差が正答率に与える影響が大きく（16.7%刻み）値が振れ易いことという統計的条件に留意して解釈する必要がある。実際、出身国差が最も大きい講は、C06（長文読解）・C10（技術日本語の読解）等、言語負荷が高い講に集中したため、学習支援を検討する場合、出身国そのものでなく、語彙・漢字処理・読解速度・抽象語理解等の要素に分解して介入設計を行うことが合理的である。

以上を総合すると、本実証講座における〈CBT正答率〉は、次の3点を過不足なく可視化する結果になった。

- ○ 科目設計に内在する難度差（【科目A・B】と【科目C・D】の性質差）
- ○ 出題観点設計による段階性（❶→❺で要求水準が上がる構造）
- ○ 受講者属性に起因する負荷差（言語・数理の基礎学力の分布）

特に【科目Ｃ・Ｄ】後半講や出題観点❹❺で正答率が相対的に低下する傾向は、次年度以降の改善に向けて“どの講の・どの種類の理解を・どう支援すべきか”を具体化する材料になる。

したがって、この〈CBT正答率〉表は、単なる成績集計表でなく、教材改善（説明順序・例示・要点整理等）・評価設計（出題観点配分の妥当性）・運用設計（中間セッションでの補強論点の設定）に接続する、実証講座の中核的データとして位置付けられる。

事前・事後テスト正答率の比較

本実証講座では、受講前後の知識・理解の伸長を定量的に把握するため、**事前・事後テスト**を実施した。

事前テストは、受講開始時の到達水準（ベースライン）を把握し、学習支援上の重点や個人差を可視化することを狙う。事後テストは、それの同一の問題セットで再測定し、講義視聴と自習CBTを経た後の理解度の変化を比較可能な形で捉えることを狙う。

問題は、実証用ミニプログラムとして選定した20講に準拠する各講２問（計40問）で構成した。各問は、当該講の内容と理解度確認テスト出題観点を統合し、単一の知識確認に閉じない“講の核”を問う設計にした。

出題形式は、〈空欄補充〉〈事象理解〉〈正誤判定〉の３種を用い、概念や用語の定着確認だけでなく、条件付けを伴う判断や区別も求めるようにした。その際、問題文は、事前テスト受験段階で未受講者にも成立するよう、特定講への参照に依存しない問いに整えた。選択肢は、（文や節でなく）語句に統一した上で、誤答肢も講内容に基づく“一見もっともらしい誤り”として配置し、理解の曖昧さが得点に反映されるようにした。また、複数正答が生じないことを最優先の品質要件とし、各問で正答根拠を講の要点に一意に結び付けた。

本テストで出題した全40問を以下に示す。

▼ 事前・事後テスト問題（全40問）

問01　「担当業務が開発・保守・運用等に分かれて異なっていても、IT人材は共通して“顧客への価値提供や品質の責任は自分の仕事”と考えておく必要がある」という文の内容は正しいか、誤っているか。
① 正しい　② 誤っている

問02　既に稼働しているシステムで不具合が見付かった場合に原因を調べ、修正や改修を施して品質を維持する担当業務を何と言うか。
① 保守　② 運用　③ 開発　④ テスト

問03　法律だけでなく社内ルールも含めて守り、違反を起さないように行動する考え方を何と言うか。
① コンプライアンス　② モラル　③ マネジメント　④ ガバナンス

問04　「出社時刻に遅れそうな見込みがある場合、勤務調整に必要な（　　）を揃えて早めに連絡するのが基本である」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。
① 理由と到着予定時刻② 謝罪と反則金　③ 申込書と手数料　④ 証明書と代理人

問05　成果物や行動について良かった点や改善すべき点をその本人に伝え、次の行動に活かすためのコメントを何と言うか。
① フィードバック　② 相談　③ 連絡　④ 報告

問06 「仕事について指摘を受けた場合、まづその内容を確認し、必要であれば質問して理解した上で次の行動案を返すと、行き違いが減る」という文の内容は正しいか、誤っているか。

① 正しい　② 誤っている

問07 「作業の抜け漏れを防ぐため、確認点を一覧にした（　　）を活用して点検する」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① チェックリスト　② 経験則　③ 成り行き　④ 思い込み

問08 「社内であっても、パスワードを他人と共有することは、不正利用のリスクが上がるため、避けるべきである」という文の内容は正しいか、誤っているか。

① 正しい　② 誤っている

問09 仕事の見積りで、予想外の遅れに備えて予め加えておく余裕時間を何と言うか。

① バッファ　② 工数　③ 納期　④ マイルストーン

問10 締切に間に合わない可能性が出た場合、周囲に迷惑を掛けないため、まづ黙って最後まで自分だけで抱えてから報告するのが望ましい。

① 誤っている　② 正しい

問11 仕事で不都合があってもごまかさず、正直に扱うという考え方を何と言うか。

① 職業倫理　② 職業訓練　③ 職業能力　④ 職業適性

問12 「職場等で相手の尊厳を傷付ける不適切な言動を総称して（　　）と言う」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① ハラスメント　② 意見　③ 指導　④ 冗談

問13 「日本では、病気や怪我に対する医療費を社会で支え合うため、原則として（　　）に加入し、その保険料を納める」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 健康保険　② 労災保険　③ 雇用保険　④ 介護保険

問14 地震や台風に備え、飲料水・非常食・懐中電灯等を事前に用意しておくことを何と言うか。

① 備蓄　② 回収　③ 募金　④ 配給

問15 「社外の取引先に成果物を渡す約束の日である（　　）を守る意識は、日本の職場文化で重視される」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 納期　② 決算期　③ 支払日　④ 発註日

問16 「休暇を取得する際、業務調整のため、直前より事前に相談・共有しておく方がトラブルが起きにくい」という文の内容は正しいか、誤っているか。

① 正しい　② 誤っている

問17 氏名・住所・電話番号等、特定の人物を識別できる情報を総称して何と言うか。

① 個人情報　② 統計情報　③ 連絡事項　④ 調達情報

問18 インターネット上の情報は、拡散している人が多いほど正しい可能性が高いため、特に発信者や日付を確認せずに判断してよい。

① 誤っている　② 正しい

問19 国や地方公共団体が教育・道路整備等の公共サービスを実施するために国民や住民から徴収する財源を何と言うか。

① 税金　② 元金　③ 利子　④ 売上

問20 「生活や仕事で困り事がある時、役所やNPO等の（　　）を利用すると支援に繋がり易い」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 相談窓口　② 交通経路　③ 組織概要　④ 庁舎案内

問21　就職適性検査（言語領域）では、初めに難しい問題に時間を掛けても最後まで解き切る方が、得点が安定し易い。

① 誤っている　② 正しい

問22　制限時間20分で40問の試験で、１問当り30秒を目安にして解くように計画することを何と言うか。

① 時間配分　② 誤答分析　③ 用語暗記　④ 要約練習

問23　「文章中に「しかし」がある時、その前後の内容は（　　）関係になり易い」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 対比　② 追加　③ 因果　④ 例示

問24　「これ」「あれ」「それ」等、文脈中の語句や内容を受けて示す働きを持つ語を何と言うか。

① 指示語　② 接続語　③ 付属語　④ 敬語

問25　「が」「を」「に」「へ」「で」等、その名詞の文中での役割や関係（動作の相手や時間・場所等）を示す語を何と言うか。

① 助詞　② 動詞　③ 副詞　④ 接続詞

問26　「「うかがいます」のように、自分の行為を低く言って相手に丁寧さを示す場合、（　　）を用いる」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 謙譲語　② 丁寧語　③ 美化語　④ 尊敬語

問27　文章を速く読み、結論や主題等、全体の大意を把握する読み方を何と言うか。

① スキミング　② 逐語訳　③ スキャニング　④ 音読

問28　「就職適性検査（言語領域）における長文読解問題では、正答肢を選ぶ前に本文中のどの箇所が（　　）になるかを確認すると、誤答が減り易い」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 根拠　② 改行　③ 空欄　④ 表題

問29　システムにおいて利用者に可能な操作の範囲を制御する仕組を何と言うか。

① 権限　② 検索　③ 保存　④ 更新

問30　「手順書やマニュアルに基づく場合、注意事項を先に読んでから操作すると、誤操作を防ぎ易い」という文の内容は正しいか、誤っているか。

① 正しい　② 誤っている

問31　「就職適性検査（非言語領域）等において、計算後に逆算や別の方法で確かめる（　　）を行うと、計算ミスを減らし易い」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 検算　② 暗算　③ 読み飛し　④ 丸暗記

問32　就職適性検査（非言語領域）における計算問題では、単位（円・人・km等）を揃えずに計算すると、誤答が増え易い。

① 正しい　② 誤っている

問33　「前年度の売上を100%として本年度の売上を比較する」際、100%にする方の「前年度の売上」を何と言うか。

① 基準値　② 比較値　③ 平均値　④ 余り

問34　「36㎞/hは、（　　）を行って表し直すと10m/sになる」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 単位変換　② 約分　③ 因数分解　④ 比例計算

問35　「グラフは、線の形だけ見ればよく、軸の単位や目盛を確認しなくても増減の程度を正しく比較できる」という文の内容は正しいか、誤っているか。

① 誤っている　② 正しい

問36 複数の値の合計をデータの個数で割って求める代表値を何と言うか。

① 平均値　② 最頻値　③ 中央値　④ 割合

問37 分数を簡単にするため、分子と分母を同じ数で割る操作を何と言うか。

① 約分　② 通分　③ 展開　④ 代入

問38 「２つの未知数を２つの式で同時に求める場合、（　　）を用いる」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 連立方程式　② 等差数列　③ 一次方程式　④ 確率

問39 プログラム言語そのものでないが、ifやforのような形で処理手順を文字で表した説明を何と言うか。

① 擬似コード　② フローチャート　③ 議事録　④ 仕様書

問40 「ログインが成功した場合と失敗した場合で、次画面に進ませたりエラーを表示したり、実行処理を変えるために（　　）を用いる」という文の空欄に入る最も適切なものはどれか。

① 条件分岐　② 繰り返し　③ 変数　④ 逐次処理

以上の40問を、実証講座の開始時（事前）と終了時（事後）に同一条件で実施し、各受講者の正答率を算出した。それを全体（32人）および出身国別（中国・韓国・ベトナム）に集計し、事前・事後の差分を比較できるように整理した。

▼ 事前・事後テスト正答率（事前／事後 比較）

問No.	講	出題観点	出身国	事前テスト		事後テスト	
				n	%	n	%
問01	【A01】日本のIT人材として	価値提供・責任の理解	全　体	20	62.5	28	87.5
			中　国	10	62.5	14	87.5
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問02		保守業務の識別	全　体	18	56.2	25	78.1
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問03	【A02】職場の基本ルール	コンプライアンスの理解	全　体	18	56.2	26	81.2
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問04		勤怠連絡の必須要素	全　体	21	65.6	28	87.5
			中　国	10	62.5	14	87.5
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	4	66.7	5	83.3
問05	【A05】コミュニケーション	フィードバックの理解	全　体	17	53.1	25	78.1
			中　国	8	50.0	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問06		指摘対応手順の理解	全　体	19	59.4	27	84.4
			中　国	10	62.5	13	81.2
			韓　国	6	60.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問07	【A06】リスク認識と“小さな品質”	チェックリストの活用	全　体	20	62.5	28	87.5
			中　国	10	62.5	14	87.5
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問08		パスワード共有リスクの理解	全　体	20	62.5	28	87.5
			中　国	10	62.5	14	87.5
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3

問09	【A07】タスク・時間の管理	見積りバッファの理解	全　体	18	56.2	25	78.1
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問10		遅延時報告の判断	全　体	19	59.4	26	81.2
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問11	【A09】倫理とハラスメント防止	職業倫理の理解	全　体	18	56.2	25	78.1
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問12		ハラスメントの識別	全　体	22	68.8	29	90.6
			中　国	11	68.8	15	93.8
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	4	66.7	5	83.3
問13	【B02】生活文化の実際	健康保険制度の理解	全　体	17	53.1	24	75.0
			中　国	8	50.0	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問14		防災備蓄の理解	全　体	20	62.5	27	84.4
			中　国	10	62.5	13	81.2
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問15	【B03】職場文化の諸相	納期概念の理解	全　体	18	56.2	26	81.2
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問16		休暇事前共有の理解	全　体	20	62.5	28	87.5
			中　国	10	62.5	14	87.5
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問17	【B06】情報空間の諸相	個人情報の識別	全　体	20	62.5	28	87.5
			中　国	10	62.5	14	87.5
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問18		情報真偽の判断	全　体	17	53.1	24	75.0
			中　国	8	50.0	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問19	【B10】社会参画の入口	税金概念の理解	全　体	20	62.5	28	87.5
			中　国	10	62.5	14	87.5
			韓　国	7	70.0	9	90.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問20		相談窓口の活用	全　体	17	53.1	24	75.0
			中　国	8	50.0	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問21	【C01】出題の全体像と対策	難問固執の判別	全　体	13	40.6	22	68.8
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	4	40.0	7	70.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7
問22		時間配分の理解	全　体	15	46.9	24	75.0
			中　国	7	43.8	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7
問23	【C03】文の論理構造	“対比”接続語の理解	全　体	14	43.8	22	68.8
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	5	50.0	7	70.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7
問24		指示語の識別	全　体	14	43.8	22	68.8
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	5	50.0	7	70.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7
問25	【C04】文法と敬語の運用	助詞機能の理解	全　体	16	50.0	24	75.0
			中　国	8	50.0	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7

問26		謙譲語運用の理解	全　体	12	37.5	20	62.5
			中　国	6	37.5	10	62.5
			韓　国	4	40.0	7	70.0
			ベトナム	2	33.3	3	50.0
問27		スキミングの理解	全　体	11	34.4	18	56.2
			中　国	5	31.2	9	56.2
			韓　国	4	40.0	6	60.0
	【C06】		ベトナム	2	33.3	3	50.0
問28	長文読解	根拠確認手順	全　体	14	43.8	23	71.9
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	5	50.0	8	80.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7
問29		権限概念の理解	全　体	15	46.9	23	71.9
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	6	60.0	8	80.0
	【C10】		ベトナム	2	33.3	4	66.7
問30	技術日本語の読解	注意事項先読の判断	全　体	17	53.1	24	75.0
			中　国	8	50.0	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問31		検算実行の理解	全　体	14	43.8	23	71.9
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	5	50.0	8	80.0
	【D01】		ベトナム	2	33.3	4	66.7
問32	出題の全体像と対策	単位統一の理解	全　体	18	56.2	25	78.1
			中　国	9	56.2	12	75.0
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	5	83.3
問33		基準値の識別	全　体	17	53.1	22	68.8
			中　国	8	50.0	11	68.8
			韓　国	6	60.0	7	70.0
	【D02】		ベトナム	3	50.0	4	66.7
問34	割合・比・速さ	速度単位の変換	全　体	14	43.8	23	71.9
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	5	50.0	8	80.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7
問35		軸単位確認の判断	全　体	14	43.8	23	71.9
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	5	50.0	8	80.0
	【D03】		ベトナム	2	33.3	4	66.7
問36	表・グラフの解釈	平均値定義の理解	全　体	18	56.2	25	78.1
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	6	60.0	8	80.0
			ベトナム	3	50.0	4	66.7
問37		約分操作の理解	全　体	19	59.4	26	81.2
			中　国	9	56.2	13	81.2
			韓　国	7	70.0	8	80.0
	【D05】		ベトナム	3	50.0	5	83.3
問38	整数と方程式	連立方程式の理解	全　体	14	43.8	22	68.8
			中　国	7	43.8	11	68.8
			韓　国	5	50.0	7	70.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7
問39		擬似コード概念の識別	全　体	13	40.6	21	65.6
			中　国	6	37.5	10	62.5
			韓　国	5	50.0	7	70.0
	【D09】		ベトナム	2	33.3	4	66.7
問40	アルゴリズム的思考	条件分岐の理解	全　体	15	46.9	23	71.9
			中　国	8	50.0	12	75.0
			韓　国	5	50.0	7	70.0
			ベトナム	2	33.3	4	66.7

（N=全体32・中国16・韓国10・ベトナム６）

上表は、実証講座の受講者32人（中国16人・韓国10人・ベトナム６人）が受講前後に受験した**事前・事後テスト**（40問＝２問×20講）の正答率を受講前後（事前／事後）で比較したものである。

本テストは、各講の理解度確認テスト（自習CBT）が測る“講内”の理解に対し、“講を横断”して中核概念・手順・判断基準を再現できるか（知識の定着と再適用）を確認する位置付けである。

全体で見ると、正答率の平均は〈事前〉52.8%・〈事後〉76.9%で、〈事前→事後〉で+24.1pt.の上昇を確認できる。

その際、**問題別**のばらつき（40問の正答率分布）に着目すると、〈事前〉は34.4〜68.8%に分布し、平均に加えて“低得点帯の厚み”が見られる一方で、〈事後〉は56.2〜90.6%に分布し、下限が持ち上がる形で全体が高得点側に移動していた。実務的には、平均値の上昇だけでなく“最低到達層の底上げ”も同時に生じた点が重要で、講義視聴と自習CBTの反復が基礎概念の取り零しを減らす方向に作用したと評価できる。

また、〈事後〉では、40問中32問（8割）が正答率70%以上に到達した一方で、80%以上は14問（3割5分）に留まるため、短期介入（約４週間）としては一定の成果が出つつも、上位到達の厚みは今後の運用（復習設計・再テスト・補強教材）で伸す余地が残る。

出身国別に正答率（40問）平均を整理すると、次の通りである。

○ 中　　国：　〈事前〉52.0% →〈事後〉76.6%　　+24.7pt.
○ 韓　　国：　〈事前〉59.0% →〈事後〉80.2%　　+21.3pt.
○ ベトナム：　〈事前〉44.6% →〈事後〉72.1%　　+27.5pt.

韓国は、〈事前〉値が相対的に高く、〈事後〉値も80%台に到達した一方で、伸長幅は他国より小さい。これは、“伸びなかった”ということでなく、入口の既有知識が高いほど伸長余地が物理的に小さくなること（天井効果）に整合する。それに対してベトナムは、〈事前〉値が低いが、〈事後〉で70%台前半まで到達し、短期介入でも“底上げ”が起り得ることが示唆される。ただし、（母数が6人であるため）１人の正答・誤答の差が比率に与える影響が相対的に大きい。そのため、出身国別比較は、傾向把握として有効でも、次年度以降は母数確保や補助指標（中央値、個票の伸長分布）を併用して解釈の頑健性を高める必要がある。

科目別に見ると、〈事前→事後〉でいずれも20pt.超の上昇を得られたが、入口難度と到達水準に差がある。

○【科目Ａ】（職業意識・協働行動）：　〈事前〉59.9% →〈事後〉83.3%　+23.4pt.
○【科目Ｂ】（社会・文化・生活理解）：　〈事前〉58.2% →〈事後〉81.6%　+23.4pt.
○【科目Ｃ】（就活対策 言語領域）：　〈事前〉44.1% →〈事後〉69.4%　+25.3pt.
○【科目Ｄ】（就活対策 非言語領域）：　〈事前〉48.8% →〈事後〉72.8%　+24.1pt.

【科目Ａ・Ｂ】は、〈事後〉値が80%台に到達し、就職移行期の留学生にとって“理解すべき規範・手続・判断”を短期に共通化できた点が成果として大きい。【科目Ｃ・Ｄ】は、伸長幅は大きいが、〈事後〉値が相対的に低く、特に「言語領域」（【科目Ｃ】）の到達が70%未満に留まった。ここは、単なる知識の獲得でなく、読解や論理構造把握、根拠探索等の“処理過程”が得点を左右し易く、学修負荷が高い領域であることに整合する。そのため、【科目Ｃ・Ｄ】は、“追加の演習”より、“同一観点を複数回・異なる素材で反復する”設計（並行問題、段階的難度、誤答理由の可視化等）が学修効率上有利である。

講別の平均（各講２問平均）で見ると、伸長が大きいのはC01（出題全体像と対策）等で、入口で弱かった

“試験の取り組み方”“解答手順の型”が学習によって改善し易いことが示唆される。他方で、〈事後〉も相対的に低い水準が残るのは、C06（読解方略）・C04（敬語運用）等に代表される“概念の識別に加え、運用上の区別・判断を要する内容”である。これらは、講義視聴＆自習CBTだけでも一定の改善を生むが、安定的な定着には“誤答の典型パターン”（スキミング／スキャニングの混同、敬語種の混同 等）を可視化して矯正するフィードバックが必要になる。

出題形式別では、〈正誤判定〉が比較的に高得点になり易く、〈空欄補充〉〈事象理解〉は誤答肢の識別力が要求されるため、〈事後〉でも差が残り易い。これは、“形式差”でなく、到達確認として妥当な差で、むしろ〈空欄補充〉〈事象理解〉で得点が上がることこそ、用語・概念の境界が整理された証左になる。

本テストの結果は、（１）職業・生活の基礎規範（【科目Ａ・Ｂ】）を早期に共通化し、（２）言語・数理の基礎処理（【科目Ｃ・Ｄ】）を底上げするという本実証講座の狙いに整合する改善パターンである。特に、〈事前→事後〉で全体が24pt.前後上昇し、下位層が持ち上がる形で分布が改善した点は、短期介入として再現性がある成果指標になり得る。

他方で、言語領域（【科目Ｃ】）を中心にして〈事後〉でも正答率70%未満の項目が残るため、次年度以降の実装では次の３点を組み合せることが望ましい。

○【科目Ｃ・Ｄ】の反復回数確保（小テストの並行版整備、再受験設計）

○ 誤答理由に基づくミニ補講（“なぜ誤るか”を１分で示す短尺補助コンテンツ）

○ 出身国別より“入口水準別”の補助線（同一国内の差を前提にした習熟度別支援）

これにより、平均点の押し上げだけでなく、就職移行期に必要な“説明できる”“区別できる”“根拠を示せる”という到達に、より確実に接続できる。

事前・事後自己アセスメントの比較

本実証講座では、〈講義視聴完了率〉〈CBT完了率〉〈CBT正答率〉〈事前事後テスト正答率〉という客観指標により、受講者の取組状況と理解度の到達を多面的に把握した。

しかし、これらの指標は、学習者自身が自分の理解や準備性をどう認識しているか（自己の把握・説明可能感・判断可能感）を直接に捉えない。

そこで、本実証講座では、**事前・事後自己アセスメント**を併用し、受講前後で“理解できる”“説明できる”“区別できる”等の認知局面の変化を、受講者自身の自己評価として可視化した。

〈自己アセスメント〉の設計は、実証講座用に選定した20講と「IT留学生学修評価基準」の相関を前提にする。学修評価基準は本来、１講（＝１中分類）３点の評価基準=スキル項目（小分類）で構成されるため、選定20講には計60点のスキル項目が対応する。ただし、本実証講座は、（演習（ライブ配信）を伴わず）講義（オンデマンド視聴）と自習（理解度確認CBT）による運用であること、受講者も就職前の在校生（留学生）であることから、職場での行動実践を前提にする“CanDo”をそのまま自己評価させるのは適切でない。そのため、各講について、対応する３点のスキル項目を束ね、講内容と理解度確認テスト出題観点に照して〈“理解・把握・認識”→“区別・説明・記述”〉という到達像に再構成した新スキル項目を１点化し、20講で計20点の自己アセスメント項目として編成した。

この20項は選定20講と１対１に対応するため、〈自己アセスメント〉結果は、講別の理解の自己評価として読み解けるだけでなく、客観指標（CBT・事前事後テストの正答率）と突き合せることで、（ⅰ）理解はしているが得点化が不安定な領域、（ⅱ）得点は出るが理解の自覚が弱い領域、（ⅲ）取組（視聴・回答）自体が障碍になっている領域を峻別する材料になる。そのため、この〈自己アセスメント〉は、実証講座の教育効果を“主観指標として補完”するだけでなく、教育プログラム運用時の導入診断・フォロー対象特定・改善点抽出に資する、運用可能な評価手段として位置付けられる。

本アセスメントで提示した全20項を以下に示す。

▼ 事前・事後自己アセスメント票（全20項）

□ **01**（職務理解と価値提供）
日本のIT職場における開発・保守・運用の役割差と顧客価値の視点について理解し、担当業務を想定した場合、責任ある姿勢と学び続ける意義を自分の言葉で説明できる。

□ **02**（職場規範と情報取扱い）
日本の職場における就業規則（勤怠）・報連相・守秘義務・コンプライアンス等の基本を理解し、連絡や報告が必要な場面を想定した場合、伝えるべき事項と文面の要点を説明できる。

□ **03**（実務コミュニケーション運用）
職場コミュニケーションにおける日本語のコツ、メール・チャットの形式、会議での発言とメモの基本を理解し、依頼・相談・フィードバックの場面を想定した場合、伝わる表現と確認事項を記述できる。

□ **04**（リスク予防と小さな品質）
作業ミスの種類と予防、チェックリスト／セルフレビュー、エスカレーションと情報セキュリティの基本を理解し、手順書が与えられれば、そのリスク箇所と品質確保の要点を説明できる。

□ **05**（タスク・時間マネジメント）
ToDo整理と優先順位、見積りとバッファ、割込み対応、締切・期限の考え方を理解し、１週間の学習・作業計画を立てる場面を想定した場合、その順番と時間配分の理由を説明できる。

□ **06**（職業倫理と安全な相談）
職場における倫理、労働時間・休憩等の権利義務の入口、ハラスメントの線引きと相談手順を理解し、それらの事例を読んだ場合、その問題点と取るべき対応方針を説明できる。

□ **07**（生活オペレーション基礎）
日本での生活における住まい・ゴミ出し、医療・保険・マイナンバー、銀行・携帯電話・交通系ICと災害備えの基本を理解し、自分の生活を想定した場合、必要な手続きとToDoを整理して説明できる。

□ **08**（日本型職場文化の理解）
日本型職場文化における納期・時間管理、報連相と会議、上下関係・敬語、休暇・残業の考え方を理解し、典型的な職場場面を想定した場合、誤解を避けるポイントと望ましい行動の要点を説明できる。

□ **09**（情報空間の安全利用）
日本の情報環境におけるメディアの特徴、SNSマナーと個人情報保護、フェイク情報の確認手順を理解し、ニュースや投稿記事を見た場合、信頼できる情報源の選び方と注意点を説明できる。

□ **10**（社会参画とセーフティネット）
税と社会保険、地域活動、相談窓口と災害時行動の基礎を理解し、生活上の困り事が起きた場合、その相談先と最低限の対応手順を説明できる。

□ **11**（受検戦略（言語領域）設計）
就職適性検査（言語領域）における出題範囲と形式、時間配分と解く順、ミス削減の基本を理解し、模擬問題に取り組む場合、そこでの自分の受検戦略（順序・根拠の取り方）を説明できる。

□ **12**（文の論理構造の把握）
就職適性検査（言語領域）の文章理解における接続語と指示語の働き、空欄補充の考え方を理解し、短文を読んだ場合、その論理関係と参照先を特定して最適な選択肢を判断できる。

□ **13**（文法・敬語の実務運用）
就職適性検査（言語領域）の文法（助詞・助動詞）と敬語、ビジネス文の基本形を理解し、社内メールや例文を見た場合、誤りを見付けて適切な表現を選び、その理由を説明できる。

□ **14**（長文読解の手順化）
就職適性検査（言語領域）の長文読解における段落構成とキーワード追跡、スキミングの手順を理解し、制限時間を想定した場合、結論と根拠の位置を押さえて設問処理の方針を説明できる。

□ **15**（技術日本語の読解）
就職適性検査（言語領域）の仕様・手順文で用いられる基本IT用語と簡単な仕様書・手順書の読み方を理解し、短い文書を読んだ場合、その要件・制約・注意点を抽出して整理し説明できる。

□ **16**（受検戦略（非言語領域）設計）
就職適性検査（非言語領域）の出題範囲と頻出テーマ、時間配分と解答順、計算速度・検算を含むミス削減手順を理解し、模擬問題に取り組む場合、その解く順序と見直しの方針を説明できる。

□ **17**（割合・比・速さのモデル化）
就職適性検査（非言語領域）の「割合・比・速さ」の文章題における基準量、比の簡約と配分、単位変換の考え方を理解し、問題文を読んだ場合、式の立て方と計算手順を説明できる。

□ **18**（図表読解と数値解釈）
就職適性検査（非言語領域）における表・グラフの種類と読み方、増減率・平均の計算、単位・尺度の注意点を理解し、図表が提示された場合、その要点抽出と計算根拠を説明できる。

□ **19**（計算基礎と方程式化）
就職適性検査（非言語領域）における四則演算と約分、一次方程式・連立方程式、比を用いた立式の考え方を理解し、文章題を読んだ場合、未知数の置き方と式変形の理由を説明できる。

□ **20**（アルゴリズム的思考）
就職適性検査（非言語領域）における手順分解、条件分岐、繰り返し、擬似コードの読み方を理解し、簡単な処理手順が示されれば、その状態変化を追跡して誤りの有無を判断して説明できる。

本アセスメントは、上掲20項を受講者が各自で読み、その時点で「できる」（「多分できると思う」も含む）と判断した項目にチェック（「✓」）を入れさせる形式で実施した。

各項は、実証講座で扱う講の学習内容（講義・自習CBT）に整合するよう、学修評価基準の該当スキルを統合し、〈“理解・把握・認識”→“説明・区別・判断”〉の認知局面で到達可能な“CanDo”として記述している。

以下に、実証講座受講前後（事前／事後）における各項のチェック者数とチェック率を、全体（32人）および出身国別（中国16人・韓国10人・ベトナム６人）に集計した結果をに示す。

▼ 事前・事後自己アセスメント各項チェック率（事前／事後 比較）

項No.	スキル	出身国	事前		事後	
			n	%	n	%
01	【A01】職務理解と価値提供 日本のIT職場における開発・保守・運用の役割差と顧客価値の視点について理解し、担当業務を想定した場合、責任ある姿勢と学び続ける意義を自分の言葉で説明できる。	全　体	17	53.1	24	75.0
		中　国	8	50.0	12	75.0
		韓　国	6	60.0	8	80.0
		ベトナム	3	50.0	4	66.7

02	【A02】職場規範と情報取扱い 日本の職場における就業規則（勤怠）・報連相・守秘義務・コンプライアンス等の基本を理解し、連絡や報告が必要な場面を想定した場合、伝えるべき事項と文面の要点を説明できる。	全　体	15	46.9	24	75.0
		中　国	7	43.8	12	75.0
		韓　国	6	60.0	8	80.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
03	【A05】実務コミュニケーション運用 職場コミュニケーションにおける日本語のコツ、メール・チャットの形式、会議での発言とメモの基本を理解し、依頼・相談・フィードバックの場面を想定した場合、伝わる表現と確認事項を記述できる。	全　体	14	43.8	24	75.0
		中　国	7	43.8	12	75.0
		韓　国	5	50.0	8	80.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
04	【A06】リスク予防と小さな品質 作業ミスの種類と予防、チェックリスト／セルフレビュー、エスカレーションと情報セキュリティの基本を理解し、手順書が与えられれば、そのリスク箇所と品質確保の要点を説明できる。	全　体	14	43.8	23	71.9
		中　国	7	43.8	12	75.0
		韓　国	5	50.0	7	70.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
05	【A07】タスク・時間マネジメント ToDo整理と優先順位、見積りとバッファ、割込み対応、締切・期限の考え方を理解し、１週間の学習・作業計画を立てる場面を想定した場合、その順番と時間配分の理由を説明できる。	全　体	16	50.0	24	75.0
		中　国	8	50.0	12	75.0
		韓　国	6	60.0	8	80.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
06	【A09】職業倫理と安全な相談 職場における倫理、労働時間・休憩等の権利義務の入口、ハラスメントの線引きと相談手順を理解し、それらの事例を読んだ場合、その問題点と取るべき対応方針を説明できる。	全　体	15	46.9	24	75.0
		中　国	8	50.0	12	75.0
		韓　国	5	50.0	8	80.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
07	【B02】生活オペレーション基礎 日本での生活における住まい・ゴミ出し、医療・保険・マイナンバー、銀行・携帯電話・交通系ICと災害備えの基本を理解し、自分の生活を想定した場合、必要な手続きとToDoを整理して説明できる。	全　体	20	62.5	27	84.4
		中　国	10	62.5	13	81.2
		韓　国	7	70.0	9	90.0
		ベトナム	3	50.0	5	83.3
08	【B03】日本型職場文化の理解 日本型職場文化における納期・時間管理、報連相と会議、上下関係・敬語、休暇・残業の考え方を理解し、典型的な職場場面を想定した場合、誤解を避けるポイントと望ましい行動の要点を説明できる。	全　体	19	59.4	26	81.2
		中　国	9	56.2	12	75.0
		韓　国	7	70.0	9	90.0
		ベトナム	3	50.0	5	83.3
09	【B06】情報空間の安全利用 日本の情報環境におけるメディアの特徴、SNSマナーと個人情報保護、フェイク情報の確認手順を理解し、ニュースや投稿記事を見た場合、信頼できる情報源の選び方と注意点を説明できる。	全　体	18	56.2	25	78.1
		中　国	9	56.2	13	81.2
		韓　国	6	60.0	8	80.0
		ベトナム	3	50.0	4	66.7
10	【B10】社会参画とセーフティネット 税と社会保険、地域活動、相談窓口と災害時行動の基礎を理解し、生活上の困り事が起きた場合、その相談先と最低限の対応手順を説明できる。	全　体	19	59.4	26	81.2
		中　国	9	56.2	12	75.0
		韓　国	7	70.0	9	90.0
		ベトナム	3	50.0	5	83.3
11	【C01】受検戦略（言語領域）設計 就職適性検査（言語領域）における出題範囲と形式、時間配分と解く順、ミス削減の基本を理解し、模擬問題に取り組む場合、そこでの自分の受検戦略（順序・根拠の取り方）を説明できる。	全　体	11	34.4	21	65.6
		中　国	5	31.2	10	62.5
		韓　国	4	40.0	7	70.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
12	【C03】文の論理構造の把握 就職適性検査（言語領域）の文章理解における接続語と指示語の働き、空欄補充の考え方を理解し、短文を読んだ場合、その論理関係と参照先を特定して最適な選択肢を判断できる。	全　体	11	34.4	22	68.8
		中　国	6	37.5	11	68.8
		韓　国	4	40.0	7	70.0
		ベトナム	1	16.7	4	66.7
13	【C04】文法・敬語の実務運用 就職適性検査（言語領域）の文法（助詞・助動詞）と敬語、ビジネス文の基本形を理解し、社内メールや例文を見た場合、誤りを見付けて適切な表現を選び、その理由を説明できる。	全　体	10	31.2	20	62.5
		中　国	5	31.2	10	62.5
		韓　国	4	40.0	7	70.0
		ベトナム	1	16.7	3	50.0
14	【C06】長文読解の手順化 就職適性検査（言語領域）の長文読解における段落構成とキーワード追跡、スキミングの手順を理解し、制限時間を想定した場合、結論と根拠の位置を押さえて設問処理の方針を説明できる。	全　体	11	34.4	21	65.6
		中　国	6	37.5	10	62.5
		韓　国	4	40.0	7	70.0
		ベトナム	1	16.7	4	66.7

15	【C10】技術日本語の読解 就職適性検査（言語領域）の仕様・手順文で用いられる基本IT用語と簡単な仕様書・手順書の読み方を理解し、短い文書を読んだ場合、その要件・制約・注意点を抽出して整理し説明できる。	全　体	10	31.2	21	65.6
		中　国	5	31.2	10	62.5
		韓　国	4	40.0	7	70.0
		ベトナム	1	16.7	4	66.7
16	【D01】受検戦略（非言語領域）設計 就職適性検査（非言語領域）の出題範囲と頻出テーマ、時間配分と解答順、計算速度・検算を含むミス削減手順を理解し、模擬問題に取り組む場合、その解く順序と見直しの方針を説明できる。	全　体	14	43.8	23	71.9
		中　国	7	43.8	11	68.8
		韓　国	5	50.0	8	80.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
17	【D02】割合・比・速さのモデル化 就職適性検査（非言語領域）の「割合・比・速さ」の文章題における基準量、比の簡約と配分、単位変換の考え方を理解し、問題文を読んだ場合、式の立て方と計算手順を説明できる。	全　体	13	40.6	22	68.8
		中　国	6	37.5	11	68.8
		韓　国	5	50.0	7	70.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
18	【D03】図表読解と数値解釈 就職適性検査（非言語領域）における表・グラフの種類と読み方、増減率・平均の計算、単位・尺度の注意点を理解し、図表が提示された場合、その要点抽出と計算根拠を説明できる。	全　体	13	40.6	21	65.6
		中　国	6	37.5	10	62.5
		韓　国	5	50.0	7	70.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
19	【D05】計算基礎と方程式化 就職適性検査（非言語領域）における四則演算と約分、一次方程式・連立方程式、比を用いた立式の考え方を理解し、文章題を読んだ場合、未知数の置き方と式変形の理由を説明できる。	全　体	12	37.5	21	65.6
		中　国	6	37.5	10	62.5
		韓　国	4	40.0	7	70.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7
20	【D09】アルゴリズム的思考 就職適性検査（非言語領域）における手順分解、条件分岐、繰り返し、擬似コードの読み方を理解し、簡単な処理手順が示されれば、その状態変化を追跡して誤りの有無を判断して説明できる。	全　体	13	40.6	21	65.6
		中　国	6	37.5	10	62.5
		韓　国	5	50.0	7	70.0
		ベトナム	2	33.3	4	66.7

（N=全体32・中国16・韓国10・ベトナム6）

上表から判る通り、**自己アセスメント各項チェック率**は**全体**（平均）で、〈事前〉44.5% →〈事後〉71.9%（+27.4pt.）として大きく上昇した。すなわち、640（＝20項×32人）のチェック機会のうち、〈事前〉で285件、〈事後〉で460件が「できる」と判断されたことになる。この伸長は、単に“主観が楽観化した”ことだけを意味しない。各項が要求する到達水準は、行動実践でなく理解に基づく“説明・区別・判断”であり、実証講座の構成（講義視聴→自習CBT）において獲得し得る認知水準に合せている。そのため、〈事前→事後〉の上昇は、学習後に“説明できる内容の範囲が増えた”という認識の拡大と、“何が問われるか（何が出来ればよいか）”の見通しの獲得（メタ認知の改善）を反映したものと解釈できる。

そして、各項間の“ばらつき”（標準偏差）は〈事前〉9.7 →〈事後〉6.3に縮小し、学習後は「できる／できない」が特定項に偏在する状態が緩和されて一定の水準に収束している。これは、内容理解の底上げに加え、教材・評価の提示が学習者の理解構造を揃える方向に作用したことを示唆する。

20項を**科目対応**の４群（01–06、07–10、11–15、16–20）で見ると、全体平均は次のような傾向であった。

A（項 01-06）職業実践コンピテンシー	〈事前〉47.4% →〈事後〉74.5%	+27.1pt.
B（項 07-10）日本社会・文化適応リテラシー	〈事前〉59.4% →〈事後〉81.2%	+21.8pt.
C（項 11-15）言語推論・実務読解スキル	〈事前〉33.1% →〈事後〉65.6%	+32.5pt.
D（項 16-20）数理・論理推論スキル	〈事前〉40.6% →〈事後〉67.5%	+26.9pt.

ここで注目すべきことは、B群（07–10 日本社会・文化適応リテラシー）が〈事前〉から相対的に高く、〈事後〉は80%前後に到達した点である。社会制度・生活様式・職場文化等の領域は、学習者にとって具体的場面を

想起し易く、理解の自己判断もし易い。そのため、〈事前〉の自己評価が比較的に高位に出易い一方で、講義を通じて“説明の粒度”が上がることで〈事後〉の上昇も確保されている。他方で、C群（11–15 言語推論・実務読解スキル）は、〈事前〉が最も低いが、伸長幅が最大である。ここは、受検戦略・論理構造把握・文法敬語・長文読解・技術日本語等、抽象度と処理負荷が高い学習要素を含むため、学習前は「できる」と言い切り難い。しかし、学習後に“手順”や“判断観点”を獲得すると、自己評価が一段上がり易い。〈事前〉の自信の低さが学習後の上昇として可視化された構図である。

全体における〈事後〉チェック率は、20項全てが60%を超え、最低でも過半数が「できる」と自己判断する水準に達したて。これは、実証講座が“一部の得意領域だけが伸びる”設計でなく、20講の学習経験が各項に広く波及したことを意味する。

その上で、**項目別**に見ると、次のような特徴が見受けられる。

ⅰ）〈事後〉の到達が高い項（例）：

07（生活オペレーション基礎）84.4%、08（日本型職場文化の理解）81.2%、10（社会参画とセーフティネット）81.2% 等

☞ 生活・職場の具体的場面を想起するため、理解の実感を得易く、自己評価が上がり易い。

ⅱ）〈事前→事後〉の伸長幅が大きい項（例）：

12（文の論理構造の把握）+34.4pt.、15（技術日本語の読解）+34.4pt.、11（受検戦略（言語領域）設計）+31.3pt.、13（文法・敬語の実務運用）+31.3pt. 等

☞“勘”でなく、判断手順や観点（どこを見るか、どう確かめるか 等）を学習で獲得したことが自己評価に反映したと解釈できる。

ⅲ）〈事後〉も相対的に低位に残る項（要フォロー）：

13（文法・敬語の実務運用）62.5%、14（長文読解の手順化）65.6%、15（技術日本語の読解）65.6%、19（計算基礎と方程式化）65.6% 等

☞〈事後〉でも一定の伸長はあるが、他項より到達が低い。これは、“学んだ直後に自信が付く領域”と“反復・経験で安定する領域”の差で、後者には継続的な演習・復習設計（反復回数の確保、典型誤りの可視化、判断根拠の言語化訓練 等）が有効である。

出身国別の平均は次の通りである。

○ 中　　国：　〈事前〉43.7% →〈事後〉70.3%　　+26.6pt.
○ 韓　　国：　〈事前〉52.0% →〈事後〉76.5%　　+24.5pt.
○ ベトナム：　〈事前〉34.2% →〈事後〉68.4%　　+34.2pt.

韓国は、〈事前〉から自己評価が高位で、〈事後〉も高水準に到達した。これは、学習前提（日本語運用・受検経験等）の相対的優位を反映し得る。他方で、ベトナムは、〈事前〉が最も低いが、伸長幅が最大で、“学習前は出来ないが、学習によって到達し得る”領域が多かったことを示唆する。また、出身国間の差は、〈事後〉に縮小する傾向が見られる一方で、文法・敬語等で差が残り易い。同一教材で底上げは可能であるが、到達を揃えるためには補助的な反復（例文型の追加、誤りパターン別の短問、言い換え練習 等）を併用する設計が合理的である。

〈自己アセスメント〉は、客観テストの代替でないが、学習者の自己効力感（「できる」と思える）や学習課題の見取り（何をどこまで出来ればよいか）を把握するのに有用である。特に本実証講座のように、オンデマンド学習を中心にした運用では、学習者が学習を継続するための心理的条件として“できる感”の形成が重要である。

本アセスメント結果は、20項全てで〈事前→事後〉の上昇が確認され、項間の“ばらつき”も縮小したことから、学習者が到達目標を理解し、説明可能な知識として再構成できた範囲が拡大したと評価できる。今後は、同様の〈自己アセスメント〉を、開発した教育プログラム（40講）にも接続し、客観指標（CBT・事前/事後テスト）と主観指標（自己アセスメント）を併用することで、到達の可視化と学習支援の精度を高めることが望ましい。

＊

本実証講座は、開発した教育プログラム（4科目40講）から就職移行期（1年次末）に必要度が高く短期間での教育効果を検証し易い20講を選定してミニプログラム化し、オンライン教育システム上での運用可能性と学習成果の変化を確認することを目的にして実施した。

評価は、次の３系の指標を用い、客観・主観、行動・到達の両面から結果を把握できるように設計した。

- ○（客観）行動指標： 学習ログ（講義視聴完了率、CBT完了率）
- ○（客観）到達指標： CBT正答率、事前・事後テスト正答率
- ○ 主観指標： 事前・事後自己アセスメント

まづ、**行動指標**として学習の取組状況を見ると、全体（32人）の平均は〈講義視聴完了率〉78.0%・〈CBT完了率〉74.4%で、各講でも両率共に70%台前半〜80%台後半の範囲で推移した。出身国別では、韓国（10人）が〈講義視聴完了率〉82.0%・〈CBT完了率〉80.5%で相対的に高く、中国（16人）は〈講義視聴完了率〉75.6%・〈CBT完了率〉72.5%、ベトナム（6人）は〈講義視聴完了率〉77.5%・〈CBT完了率〉69.2%であった。全体として、学習ログは〈講義視聴→自習CBT〉という一連の学習活動が一定の割合で成立したことを示す一方で、〈CBT完了率〉が〈講義視聴完了率〉を下回る講が散見され、講義視聴後の確認テスト実施を習慣化する運用上の補助（リマインド、締切設計、提出導線の明確化等）の必要性が示唆された。また、就職適性検査の言語領域における長文読解や、非言語領域における方程式・アルゴリズム的思考等、認知負荷が高い講では講義視聴・自習CBT共に相対的に低下し易く、難度が高い単元ほど学習支援（復習導線、例題量、躓き点の可視化 等）を厚くする設計が妥当であることが判る。

次に、**到達指標**として各講の理解度を見ると、〈CBT正答率〉（100問＝5問×20講）は全体平均で54.6%、出身国別では中国53.2%・韓国61.7%・ベトナム46.5%であった。ここで留意すべき点は、このCBTが“選抜”でなく“学修の確認と再学習の起点”として位置付けられることである。正答率は、高ければ好いという単純指標でなく、講毎の難度差や用語理解・読解負荷・計算負荷等の特性が反映される。実際、基礎概念の確認が中心の講では高めに、抽象度が高い講や手順が複線化し易いや講では低めに出る傾向が見られた。そのため、CBT結果の所見は、正答率の上下に囚われず、誤答が集中し易い観点（用語の区別、根拠箇所の同定、式化の手順、条件分岐の読み取り等）を手懸りにして講義映像の要点提示や演習・自習の設計を再調整する“改善材料”として扱うことが合理的である。

この講単位の理解度を統合して更に確認する目的で、事前・事後テスト（40問＝2問×20講）を実施した。

全体正答率は〈事前〉52.8%から〈事後〉76.9%に24.1pt.上昇し、出身国別でも中国52.0%→76.6%（+24.5pt.）、韓国59.0%→80.3%（+21.3pt.）、ベトナム44.6%→72.1%（+27.5pt.）で、いづれも明確な改善が見られた。〈事前〉の段階では言語領域理（読解・文法・敬語）と非言語領域（割合・比・速さ、図表読解、方程式化、アルゴリズム的思考）において出身国別の差が相対的に現れ易いが、〈事後〉では“最低限の型”が共有され、全体として到達度の底上げを確認できる。特に、初期値が低めに出易い層で上昇幅が大きいことは、この実証用ミニプログラムが“入口段差”を縮減する補完教育として機能し得たことを示すものである。

最後に、**主観指標**である事前・事後自己アセスメント（20項）を見ると、全体のチェック率は〈事前〉44.5%から〈事後〉71.9%に27.3pt.上昇した。出身国別でも、中国43.8%→70.3%（+26.6pt.）、韓国52.0%→76.5%（+24.5pt.）、ベトナム34.2%→68.3%（+34.2pt.）で、全体として“理解して説明できる”という認知“CanDo”に対する自己評価が大きく改善した。自己アセスメントは、客観テストに一致することだけが目的でないが、事前・事後テストの上昇と方向性が整合した点は、学習者の自己理解（何が解り、何が解らないか）も同時に更新されたことを示唆する。

結果として、本実証講座は、学習ログ（行動）→理解度確認テスト（講単位の理解）→事前・事後テスト（統合到達）→自己アセスメント（主観の到達）の連鎖が、短期間でも成立し得ることを確認し、次年度以降の教育プログラム運用に向けた実施モデル（学習導線と評価導線）の骨格を得たと総括できる。今後は、難度が高い講での講義視聴からCBT取組への接続強化、誤答が集中し易い観点の教材改善、そして出身国・学力差を前提にした支援（リマインド設計、復習導線、補助教材の標準化等）を組み込むことで、完了率と到達度の両面を安定させる運用が期待される。

＊　　＊

本章では、本年度（令和７年度）事業の〈催行〉として実施した**オンラインオープンキャンパス**（**【**活動Ⅰ**】**広報募集）（**4.2**）と **教育プログラム実証講座**（**【**活動Ⅱ**】**教育指導）（**4.3**）について報告した。
〈調査〉〈開発〉が主に現状把握と設計要素の整備（基盤→体系→計画→教材）であるのに対し、〈催行〉は、それらを現実の空間・時間・参加者の条件に載せて運用し、機能性と妥当性を点検するフェーズである。すなわち、事業成果を“机上の整合”に留めず、実際の参加者（留学希望者・在学生）を前提にて運用上の成立条件と改善点を抽出できる点に、〈催行〉の中心的意義がある。

オンラインオープンキャンパスは、在アジア（中国・韓国・ベトナム）の日本留学希望者に対し、学校理解・進路理解・就職像の具体化を促す場で、本年度は対象国を拡張して実施した。参加状況とアンケート結果は、国別に関心・不安・意思決定段階が異なることを改めて示し、広報導線や説明内容を一律化せず、対象国別に重点を変える必要性を裏付けるものであった。そして、質疑応答や交流の場面で顕在化する“理解のズレ”は、募集資料や説明スクリプトの改善に直結する実務的示唆を提供した。

他方で、教育プログラム実証講座は、本事業で開発した教育体系を実際のアジア留学生（1年次末）に適用し、学習ログと評価指標によって教育効果を可視化する取組である。講義視聴完了・CBT完了という行動指標が一定水準で成立し、各講CBTや事前/事後のテスト＆自己アセスメントにおいて事後の改善を確認できたことは、オンライン教育システム上で〈視聴→確認→到達→自己理解〉という学習の循環を組み立て得ることを示した。これにより、本年度の〈開発〉で整備した設計要素が、運用と評価の局面でも相関的に機能し得ることを確認でき、標準化と再現性確保という本事業の狙いに対して実装面からの裏付けを得たと言える。

以上より、本年度の〈催行〉は、広報募集と教育指導の双方において、実施データと参加者反応を通じて改善の論点を具体化し、次年度以降の展開に向けた運用モデルの精度を高める段階になった。今後は、本章で得た所見を、広報設計（国別導線・説明の具体化）と教育運用（学習導線・評価導線・支援設計）の両輪で反映し、外国人IT人材の「養成」から「円滑な就職」および「（職場）定着」に接続する一気通貫の支援モデルとして、成果の蓄積と外部展開可能性を高めてゆく。

第5章

事 業 総 括

本章では、これまで見てきた本年度（令和７年度）事業の取組を、教育・人材養成事業の評価枠組として広く用いられる**CIPP**（Context／Input／Process／Product）の観点で総括する。

CIPPは、プロジェクトを“好かった／悪かった”の印象論で整理するのでなく――

①（Context）いかなる環境・課題の下で……

②（Input）　いかなる設計と資源投入を行い……

③（Process）いかなる手順で実行し……

④（Product）何を成果物として生み、いかなる効果が観察されたか

という４点を因果の筋道として整理するための枠組である。

また、本事業は４箇年度の継続事業であり、単年度の“完了”より、成果の横展開と次年度以降の移行設計が事業価値を左右する。そのため、本章では、CIPPの後にOutreach（展開と波及）とRoadmap（移行と接続）を加え、本年度事業の内部（設計・実行・成果）と外部（専門学校業界・留学生事情・産業界および次年度事業）を同一章内で往復しながら、網羅性を確保しつつ論点を拡散させない総括にする。

尚、Product（成果と効果）の記述では、成果物（output：作ったもの）と効果（outcome：変化・到達）の峻別を意識し、教育プログラムの“整備”と“機能”の双方を説明可能な形で整理する。

5.1　Context――課題と論点

課題の所在（「IT以前」の制約要因）

本年度事業における課題設定は、実施した３調査で把握した留学生教育の実態、特に“IT専門教育の成否がIT以前の基盤条件に強く規定される”という観察に基づく。具体的には、専門用語・読解・表現等の負荷、学習習慣や生活基盤の不安定、実習局面で露呈する協働行動（報連相・仕様理解・粘り強さ等）、そして就職選考（適性検査等）における言語・数理の基礎負荷が学習継続と就職移行の両面で、主な制約要因として確認された。

そのため、本年度事業では、専修学校が担うべき機能を“技能伝授”に限定せず、“学修を成立させる条件の整備”と“就職・定着に接続する行動様式の形成”を含む多層課題として捉え、そのうち教育可能・評価可能な領域に分解した上で、教育プログラムに落し込むことを中核課題にした。

前年度→本年度のシフトが示した論点

前年度（令和６年度）事業では、【活動Ⅰ】（広報募集）を中心にして対象国・募集導線・情報設計の検討と試行を進めた。これに対して本年度事業では、【活動Ⅰ】を継続しつつ【活動Ⅱ】（教育指導）に重心を移し、オンライン教育システムを実装基盤とする教育プログラム（カリキュラム・シラバス・コンテンツ・学修評価基準）を整備した。

このシフトによって明確になったのは次の２論点である。

ⅰ）募集局面で形成された期待（何を学べ、何が出来るようになるか）を入学後の学習設計に矛盾なく接続するためには、教育内容の標準化だけでなく、到達の定義（評価基準）・目標を含む説明体系が不可欠である。

ⅱ）留学生教育では、授業内の理解だけでなく、社会・生活・文化の理解が学習継続の前提条件として働くため、教育指導と生活支援が分断されたままでは、成果の再現性が低下し易い。

これらは、次年度（生活支援を主軸にする年度）への移行設計に直結する論点である。

本年度総括における評価視点

以上を踏まえ、本章では、① 課題設定が調査知見と整合していたか（Context）、② 設計と投入が課題に見合う最小構成になっていたか（Input）、③〈調査→分析→開発→催行〉の連結が実務的に機能したか（Process）、④ 成果物と効果が説明可能な形で観察されたか（Product）、⑤ 外部への波及可能性（Outreach）、⑥次年度への移行可能性（Roadmap）を、同一の論理線上で評価する。

5.2　Input――設計と投入

設計方針（〈体系→計画→教材〉への段階化）

本年度事業における設計投入の要点は、教育を成立させる要素を〈教育基盤（システム）→ 教育体系（カリキュラム）→ 教育計画（シラバス）→ 教材（コンテンツ）→ 到達指標（学修評価基準）〉として段階化し、その相互整合性を担保することで、教育の再現性と説明可能性を確保することである。

特に、カリキュラムとシラバスは “何を教えるか” を規定するが、それだけでは “何が出来るようになったか” を共通尺度で説明できない。そこで、学修評価基準を到達（”CanDo”）の指標として体系化し、各講の到達目標・評価観点に接続させる設計を採用した。この一貫性は、単年度の開発完了より、次年度以降の運用・改善・横展開における費用対効果を左右する投入判断である。

投入資源（体制・素材・品質担保）

本年度事業における投入は、単なる制作工数の積上げでなく、次の資源群を意識して構成した。

- ○ 知見投入：　３調査（IT専修学校留学生教育実態・IT留学予備生キャリア意識・IT留学生用教材事例）の結果を科目設計・教材仕様・評価設計に変換する。
- ○ 実装投入：　オンライン教育システムを、教材配信に留めず、学習ログ・小テスト・自己点検等を運用できる基盤として整備する。
- ○ 品質投入：　シラバスと評価基準の相関、講義・自習問題の対応、表記統一、誤解誘発表現の除去等、レビュー工程を明示して反復する。

ここで言う品質担保は、“完成度”だけを意味するのでなく、運用段階での改訂容易性（更新・差替えを破綻なく行えること）を含む。複年度事業では、運用時の改訂コストが累積するため、初期段階での統一仕様の設定は、投入としての合理性が高い。

最小構成としての４科目設定

本年度事業で開発した教育プログラム（「IT留学生教育プログラム」４科目40講）は、３調査から導出された主な制約要因を教育可能・評価可能な４領域（A 職業意識・協働行動、B 社会・文化・生活理解、C 言語能力、D 数理・論理）に分解した最小構成として設計した。科目名は教育体系上の名称として整理しつつ、その内実は、調査結果が提示した論点（言語負荷、職業行動、生活基盤、適性検査負荷）を講単位で扱える粒度に落し込むことを企図した。

5.3　Process――開発と催行

調査→分析→設計への翻訳

本年度事業のプロセスの特徴は、調査結果の“記述”を教育設計の“要件”に変換する工程を明示した点にある。実施した調査では、留学生の日本語能力分布、学修定着に影響する要因、実習局面での困難、補完教育ニーズ、生活支援の実態等が観察された。これらを単なる所見に留めず、ⅰ）教育内容（何を扱うか）、ⅱ）提示方法（どう提示するか）、ⅲ）評価方法（どう測るか）に接続することで、調査と開発の間に因果の筋を通した。

この“翻訳工程”が成立したことは、事業計画上の〈調査→分析→開発〉という筋（理窟）を成果物の形で裏付けた点で意義がある。

開発プロセス（標準化とレビュー反復）

開発は、設計要素の順序（基盤→体系→計画→教材→評価）に基づいて進めた。特に、シラバスと評価基準、講義映像と自習問題の整合は、“作れば自動的に揃う”ものでなく、レビュー反復によって担保される。

そのため、本年度事業では、仕様（表記・構造・項目定義）を固定し、同一仕様での反復（40講）を行うことで、“ばらつき”を減らし、改訂可能性を上げるプロセスを採用した。その結果として、個別最適の寄せ集めでなく、全体として統制が取れた教育資源群として整理できる段階に達した。

催行（実地運用による検証）

本事業の特徴は、〈調査〉〈開発〉を机上作業に留めず、〈催行〉として実際の対象者に接続する場面を組み込んでいる点にある。オンラインオープンキャンパスは〈広報募集〉の施策として、教育プログラム実証講座は〈教育指導〉の検証施策として位置付けられ、実装基盤（オンライン教育システム）と開発成果（教育コンテンツ・学修評価基準）をリアルな運用条件の下で接続する。

〈催行〉は、成果物の“存在”を確認するだけでなく、“運用”の成立条件（参加動機、負荷、離脱、理解、評価反応）を可視化し、次年度以降の改善点を抽出する装置として機能する。複年度事業において〈催行〉は“確認”でなく“改善可能性の確保”である。

5.4　Product——成果と効果

成果物（Output）の整理

本年度の主要成果物（output）は次の通りである。

- ○ オンライン教育システム（教育基盤）の整備（配信・受験・記録等、運用要件を含む）
- ○ 教育プログラム（４科目40講）のカリキュラムと、講単位のシラバス（授業計画）の整備
- ○ 講義映像・演習課題・自習問題等、学習者が実際に学ぶ教育コンテンツ群の制作
- ○ 学修評価基準（到達の定義）と、その運用を想定した自己点検・評価設計の整備

これらは、“作った”こと自体が目的でなく、次項の効果（outcome）を説明可能にするための前提条件である。

効果（Outcome）の観察

本年度は、客観指標（講義視聴完了率・CBT完了率・CBT正答率・事前/事後テスト正答率）と、主観指標（事前/事後自己アセスメント）を併用し、単一指標による誤認を避ける設計にした。教育効果は、知識増加だけでなく、

学習行動の成立（講義視聴・CBTの完了）と到達の自己認識（自己点検）を含む。

その結果として、① 学習行動の成立度（完了率）、② 理解の到達度（正答率・事前事後差）、③ 到達の自己認識（自己アセスメントの上昇）が、同一方向の変化として観察される構造を確認できた。特に、〈事前→事後〉の差が一定幅で確保され、同時に“ばらつき”が縮小する傾向が見られることは、プログラムが“一部の上位者だけが伸びる”構造でなく、“一定程度の底上げ”として機能する可能性を示唆する。

ただし、効果は、単年度で完結するものでないため、次年度以降も、運用回数の増加、対象拡大、教材更新等を通じてその再現性（同条件で同様の効果が出るか）が検証されねばならない。

残された課題（改善の焦点）

本年度事業の成果は、“整備の段階”を越え、“運用・評価の入口”に到達したが、次の課題が残る。

- ○ 学習負荷（言語負荷×認知負荷）の個人差に対する運用上の支援設計（フォロー導線、復習経路）の精緻化
- ○ 教材更新（社会制度・就活慣行・ITトレンド変化）に対する改訂サイクルと責任分界の設計
- ○ 生活支援・孤立防止等、学修の前提条件を教育設計から切り離さず、運用モデルとして組み込むこと

これらは次年度（生活支援を主軸にする事業年度）、重点的に扱うべき改善焦点である。

5.5 Outreach——展開と波及

専修学校業界への展開可能性

本年度事業成果の波及可能性は、個別校の実践に留まらず、専修学校に共通する課題（留学生の日本語能力・学修定着・職業行動・生活基盤・就職選考等）に対し、教育設計の“型”を提示した点にある。

特に、４科目40講の教育体系、シラバス項目の標準フォーマット、学修評価基準（“CanDo”）という３点セットは、学校毎の裁量を残しつつ、最低限の共通言語（教育の説明単位）を提供し得る。これは、学校間の比較可能性と改善可能性を上げ、その結果として留学生教育の質保証に資する。

留学生事情・産業界への波及可能性

留学生には、学ぶべき内容と到達の見通しが明確になることで、学習行動（視聴・復習・受検）の自己管理が可能になり易い。他方で、企業には、採用後のオンボーディングで問題になり易い領域（報連相・期限意識・仕様理解・生活基盤・制度理解等）を入学段階から扱う教育設計として説明できることが、ミスマッチ低減に寄与し得る。

さらに、学修評価基準は、学校内の評価だけでなく、学習者が自己点検し、就職活動で自分の到達を言語化する

道具として機能し得る。これは、教育成果を“教えた内容”でなく“できること”で説明するという本事業の基本趣旨に整合する。

展開の条件（運用と更新）

波及を成立させる条件は、成果物の配布でなく、運用可能性の担保である。すなわち、① 更新のルール、② 品質レビューの手順、③ 導入校の最小運用体制（担当・研修・問合せ等）を教育資源とセットで設計する必要がある。次年度以降、留学生の生活支援や留学生担当教職員の指導支援の取組を通じて運用モデル（人・運用）を厚くすることが、展開の現実性を高める。

5.6　Roadmap――移行と接続

次年度事業計画の重点（生活支援を中核にした再設計）

次年度（令和８年度）事業では、留学生の生活支援を主軸にし、留学生同士の交流機会および留学生担当教職員の交流・研修の設計、留学生および教職員向け啓発コンテンツの作成、そしてオンライン教育システムのコミュニティ基盤としての拡張等に取り組む計画である。

この重点は、本年度に実施した調査が示した“学修継続の前提条件としての生活基盤・孤立防止”の重要性に整合し、教育プログラムの効果を安定させるための論理的な次段（基盤の厚み付け）として位置付けられる。

本年度成果の活用方針（再利用と接続点）

本年度事業で整備したオンライン教育システム・シラバス仕様・学修評価基準は、次年度事業の主活動〈生活支援〉の施策において、次のような形で再利用できる。

- ○ 設計の再利用：　講義映像・自習問題で確立した〈短単位×理解確認〉という教育コンテンツの設計思想を生活支援コンテンツにも転用する。
- ○ 評価の再利用：　学修評価基準の“CanDo”記述を、生活支援領域での到達（手続き理解・相談先判断・行動選択等）に拡張し、到達の可視化を維持する。
- ○ 運用の再利用：　学習ログ・チェック・自己点検の仕組をコミュニティ運用（参加状況・相談導線・フォロー等）に接続する。

すなわち、次年度事業は、教材の追加開発に加え、運用モデル（人・関係・支援導線等）を設計資源として明文化し、教育基盤を“学習”だけでなく“継続”の基盤に拡張する年度の取組として位置付けられる。

４箇年度計画における本年度事業の位置付け

本年度は本事業４箇年計画において、教育体系（カリキュラム・シラバス）と評価体系（学修評価基準）を整備し、教育コンテンツを具現化した年度であった。言い換えれば、次年度事業で検討・推進する留学生生活支援施策（生活支援・教職員研修・コミュニティ形成等）を、単発の取組でなく、教育成果の再現性を高める運用モデルとして積み上げるための“共通の設計図”を整えた年度である。

そのため、次年度は、本年度に整備した教育資源群を生活支援・人的支援の仕組に結合させることで、留学生教育を〈教材〉だけでなく〈運用モデル〉として標準化する段階に進めることが、本事業全体の合理的な移行戦略になる。

＊

本事業は、人口減少下で進むDX需要と外国人材活用の拡大という社会的要請に対し、IT専修学校が担う留学生の〈受入れ→教育指導→生活支援→就職定着支援〉という一連のプロセスを、教育の言葉で再設計する試みである。

特に留学生教育は、個別教員の経験や属人的工夫に依存し易く、成果の説明可能性が弱いという構造的課題を抱える。

このような課題に対し、教育基盤・教育体系・教育計画・教材・評価基準を相互参照可能な形で整備し、再現可能なモデルとして提示した点が、本事業の本年度の成果である。

これにより、本事業は、「（事業主体が）何を実施したか」から「（教育対象者が受講後に）何が出来るようになるか」に成果指標を移行させ、学校間で共有可能な最低限の共通言語を獲得した。

また、〈広報募集〉（活動Ⅰ）と〈教育指導〉（活動Ⅱ）を一体の設計対象として扱うことで、入口の期待値形成から職場適応までを断絶させない留学生支援像を描けた。

他方で、学習成果の伸長は、学習者の生活基盤・対人関係・学習習慣に強く結び付くことが改めて確認され、教育だけで完結しない支援設計の必要性が明確になった。

次年度事業では、この知見を踏まえ、生活支援を中核に据えた学習継続と孤立防止の仕組を、学習者向け・教職員向けのコンテンツとコミュニティ基盤として具現化してゆく。

その際、本年度事業で整備した評価基準を運用の中心に置き、支援施策を“効果が見える形”で改善できる循環を形成することが重要である。

本事業の最終的な価値は、単一校の成功事例を作ることでなく、専修学校業界全体で応用可能な標準モデルを提示し、外国人IT人材の養成・定着を社会インフラとして支える点にある。

今後も、現場実装と検証を往還させ、教育の質保証と学習者の安心を同時に高める枠組として、本事業の成果を磨き込み、横展開に接続してゆく。